追二〇九　太政官ヨリ久光公ヘノ国事通牒

但シ通牒本文ナシ

「（封筒）
島津左大臣殿閣下
（封筒ウラ）
「封」

中村大外史
作間権大外史」

御留守中御施行相成候条件、一昨日日誌を以供　高覧候処、日誌ニ記載無之重立事件写取、別紙之通呈上申候、以上、

四月廿七日

作間一介
中邨（村）弘毅

左大臣公閣下

文書原寸　縦一七・六糎　封筒原寸　縦二〇・五糎
横三七・二糎　横　七・三糎

追二一〇　名東県権大講義松浦長年ノ内院ヘノ内願

三通

「（包紙ウワ書）
先日内願と記候下書間違候而指上候段恐入候、此書と御引替可被降候、」

追加一一〇ノ一

慨歎之事

御系譜〇国史〇地誌の三則は、御国体に預る所の大典重事にして、　内務御省の管轄たるよし、井蛙蚊力の長年越俎詹言恐縮の至りには奉存候得共、右三則の義は私本来得意の学業筋にて、志学の年より凡四十五年来螢雪の苦学爰に専ら註意仕候事に御座候、まづ

〇御系譜の義は、　崇神天皇・仲哀天皇・応神天皇・顕宗天皇・仁賢天皇などの御系の如き、古来より混同謬説ありて年代の協はざる事多かり、譬へは　島津家御系丹後局の同名より混乱謬妄の出来しか如く、将又上古にも其御代に依て嫌疑禁忌の訳ありて口伝秘説等に

詫(託)し古人慎黙の大弊、後には事実正義を忘失して世に古伝の朦朧たるは、最(イト)も惜むへく悲むへきの極みと奉存候、但し谷森種松翁の帝皇略譜ありて、世にめでたき袖珍の書なから、猶謬誤なき事能はず、将考証の届かぬもありて為に此を遺憾なす事に御座候、

○国史の義は、神代の如き、別て神秘口決ありて漫りに此を漏さす、後の御代〳〵に至りても彼の禁忌(を憚り)ありて慎黙の陋習、終には古伝湮晦の弊を醸せり、故(カレ)此を補正し謬妄を弁解なせむと思ふ事、年久しきも便宜の折なし、止むを得ず梱外不出の説となして、別冊二本に其綱目のみを挙記しつ、

○地誌の義は、既に旧藩の撰挙に預り、去ル明治二年阿波国後風土記編輯惣裁に命せられ、草稿本及別書御覧に入候通に御座候、又先年東西関門考と申す地誌図入本壱冊　文部御省へ差出し候事も御座候、此書東関は古史に陸奥鎮守府を申し、西関は筑前太宰府を申し、国家鎮護の両関門ある御制度に随ひ、奥地の沿革を詳に論ひ、西の国々も神代よりの沿革を弁解致候、因みに東西関外の諸国には式ノ社の少き古実をも挙置候、

されは右三則を主張いたし、文明開化の初年より国史中謬誤を改正の大志を遂むと希慕せし事も時至らす、追々老衰多病に依て、数年の素懐こと〳〵く画餅となりしか、漸く当春八級権大講義を拝命仕候段は重畳難有義とハ奉存候得共、兼々得意の三則とハ別条なれハ、何卒右三則に随従の御系譜国史等の正誤、或ハ式社考地誌の編輯等拝命被　仰付候様、偏ニ奉懇願候事ニ御座候也、

頓首謹言、

名東県権大講義

松浦長年

明治七年五月一日

冊子原寸　縦二四・三糎　横一七・四糎　三枚

追加一一〇ノ二

島津家始祖神考証ノ来歴ハ、新井白石先生ノ藩翰譜ニ、

島津家ノ始祖ヲ世間ニハ頼朝ノ落胤ナル由ノ伝ヘナレトモ、旧記年代等ニ合難キ事多クシテ不審シキヲ種々考ヘ見レトモ更ニ思ヒ得ズト記サレシヲ、イデイカデト頑愚ノ長年諸書ニ探索シテ漸クニ其混同謬誤ヲ発明ナシ、ヲ、兼テ皇国学ノ因ミアル御旧藩八田氏ニ内密噂セシハ、慶応四年卯ノ春ニモヤ有ケン、夫レカ元始トナリテ右八田氏ハ更ナリ、谷村氏諸共此考証編輯アラン事ヲ懇々委托数度ナルニ難黙止、上冊壱巻遠路態々西京ヘ相贈リシ処、同年七月両氏ヨリ念頃ナル別紙来翰アリシ、已来モ下巻ノ成功ヲ依頼ノ由ニテ質問等ノ文面モ絶ズ、下巻ヲ促ス事屢々ニシテ、第一　中将様ノ御褒詞モ相添ハリ冥加ニ余リ難有意味モ有之、何事モ思ヒ捨テ至急ニ取掛リ、終ニ同年冬中巻・下巻取揃ヘ、是亦態々指出候事ニ御座候、又其翌年辰ノ秋、　中将様御上京ノ御趣承リ、此カ為ニ長年自身西京ヘ参リ候処、始終御病気ノ由、遺憾ナカラモ無詮方空敷帰国仕候程ノ事ニテ、今般モ東京御在府ト承リ、前顕八田氏ノ約定始末ヲ奉窺度、且ハ皇学ノ体裁挽回ノ愚見ヲ陳ント、旁登京ニ至ル事ニ御座候也、

名東県貫属士族権大講義　松浦長年

明治七年五月一日

冊子原寸　縦二四・三糎　横一七・四糎　二枚

追加一一〇ノ三

内願之事

御系譜〇史典〇地誌の三則は国家大典の重事にして、左院御分課之内なるよし、井蛙蚊力の長年越俎詹言多罪恐縮の至りとは奉存候得共、右三則は私義平素よりの得意にして、凡四十五年来螢雪の苦学専ラ爰に註意仕候事也、

〇御系譜の義は、崇神天皇・仲哀天皇・応神天皇・顕宗天皇・仁賢天皇なとの御系の如き、古来より混同謬伝あり、譬ハ島津家御系も丹後局の同名より混乱せし類ひに等し、且上古にも其御代に依て嫌疑禁忌の訳あり

て口伝秘説等に託し古人慎黙の余り、後には事実正義を忘失して古伝を知る人の少くなれるこそ、最惜むべく悲むべきの極ミ也けれ、但し谷森種松翁の帝皇略譜ありて、世にめでたき袖珍の書なから、猶謬誤無き事能はず、将考証の届かぬ条もあれは為に此を遺憾する事なり、

○史典の義は、神代の如き別て神秘ありて漫りに此を洩さず、後の御代〳〵に至りても彼ノ禁忌口伝ありて慎黙の陋習、終には古伝湮晦の弊を醸せり、故此を補正し謬妄を弁解なさむと思ふ事年久しきも、折無くして梱外不出の説とはなしぬ、別書弐冊に綱目を挙たり、

○地誌の義は、既に旧藩の撰挙に預り、去ル明治二年阿波国後風土記編輯惣裁に命せられ、別冊草稿・別書とも御覧ニ入候通ニ御座候、尤右風土記編輯御廃止ニ相成候後も、皇国地誌編輯之義心得置候様被　仰出候、然れは右三則を主張いたし、文明開化の初年より壱度は青雲の志を遂むと、方今七等奏任官を此上もなき規慕に思ひし事も、追年老衰多病に依りて、数年の素志もこと〳〵く画餅となりしか、漸く当春八級権大講義を拝命仕候、廃人同様之身にしては重畳難有義と奉存候、併兼而得意の学業筋に聊カ別なれバ、何卒御道も有せられ候ハヽ、左院御分課之内にていか様とも拝命被　仰付候様、偏ニ奉懇願候事ニ御座候也、頓首謹言、

名東県下権大講義

五月一日　　杉浦長年

冊子原寸　縦二四・三糎　横一七・四糎　二枚

包紙原寸　縦二四・五糎　横　三三糎

遺品二　九鬼隆都ヨリ久光公ノ左大臣任命ノ賀状

（封筒）「御直覧

（封筒ウラ）「封　　従五位九鬼隆都」

〆」

御歓申上度一翰呈上仕候、先以

益御勇健被為渡奉賀候、然は今般左大臣被任候由、兼々
左茂可有之愚存願居候、平人さえ諸藩士参議被　命候、
尊君ニは
当今様態々御国元江
行幸再度勅使被　召呼候次第、固御相当　御先祖頼朝
公之古今新　尊君之御身ニ御体任御苦労奉存候、乍併
是ニ付天下之御政務御改正、　天朝復古御時御到来と
恐悦至極奉存候、兼而　尊公様自被任候
日本神統一系千万歳不動御規則御立直過日御上書之件々、
速御行天下有志之面々、腹鼓歌舞為　天朝恐悦申上候
儀ト於愚拙難有仕合奉存候、早速御歓参　殿可仕筈、
何分大病人出来、朝夕身体自由を不得、甚以不本意至
極奉存候、依而乍略儀以紙面一先御歓奉申上候、書余
近日参　殿拝　尊顔、万々御歓可申上候、匆々頓首、
再拝、

九鬼従五位
藤原朝臣隆都
謹言

戊五月五日

島津
左大臣久光朝臣
尊閣下進呈

文書原寸　縦三二・二糎　封筒原寸　縦三四・五糎
横八二・三糎　横　一〇糎

遺二三　九鬼隆都ヨリ久光公ヘ

（表紙）「毎朝天照皇大神三唱其他ノ件
従五位藤原隆都
謹撰

天照皇太神
毎朝御唱三種
八神御祓　」

隆都案
吐普鏡始生二坎離一。多女鏡終
成二艮坤一。加美瓊先出二震巽一。
依身剣後現二兌乾一。

とふとため鏡とゝのひ
かミ御璦ゑミ剣にて三種（ミクサ）
御宝（ミたから）
出雲之国造伝伯家元雑掌悴佐地逸雄
二条在番中伝之
吐普加美依身多女毎朝五百返
国造俊秀君三男
宮本伊穂理
菅原信栄秘授
白川神祇伯資訓王
御父資敬王

明治七甲戌五月八日　風月亭

冊子原寸　縦二五糎　横一七糎　二枚

遍二三　九鬼隆都ヨリ左府公ヘノ建言

華族ノ冠頭トシテ奮起ヲ望ム

（封筒）「密呈　九鬼隆都」
御直覧

（封筒ウラ）「封　〆」

追加一一三ノ一

一昨十日中島一三入来、暫時面話、一二述愚意候、雖然兼而愚拙胷中存込居候儀、一条茂未到吐露之地、近日参殿委曲可申上候、　尊公様此度は華族之冠頭被蒙命候上は、誰成共一両人自華族之内任選輔　尊公様之御尽力は被命様仕度、乍去何分華族其人無之、愚拙所知、漸唯人右之而已、是亦不十分、其余は不存申候、且是迄華族中御任用有之仁は何分当世ニ沈溺之族而已御座候、無御拠一二事御咄合有之候共、却而　尊公様之御不評と可相成、窃御安思申上候、元々諸大名一人茂有志剛勇之者無之故、如斯諸藩鎮衛脱落相成、諸県役人計り奉　命、臨不案内之地固不得人心、小量之胷中施仕置之力無之、少騒立及乱暴等候得は忽脱走、日本国為之壊崩日至衰弱候儀、残

念至極奉存候、於当表近頃遊学之場所取建候儀等、実華族中唯増無益之損費之策窮嘆息仕候、　尊公様幸被任枢要之地、　頼朝公以来武威輔国之御大功、早々御成就有之度伏奉希候、頓首再拝、

明治七年甲戌五月十二日

従五位藤原隆都謹言

島津源久光尊公様

閣下密呈

文書原寸　縦二八・三糎　横三八糎

追加一一三ノ二

（端裏書）「添呈」

此書面御側向江茂一切為御見不被下様偏奉願上候、委曲拝眉之上具ニ申上候、以上、

五月十二日　　隆都拝

文書原寸　縦二八・三糎　封筒原寸　縦三一糎

横　一九糎　　横一〇糎

追加二四　布治帰一ヨリ左府公ヘノ願書

（包紙ウワ書）「復請書」

布治帰一謹上」

氓隷布治帰一誠恐誠恐頓首頓首、氓隷嚮待罪于按察使府欲全志操、不求苟合後遭府廃決然解官而帰田里、亦赤心不能忘邦家、常以為更始之大業閣下創之者、天下皆所知既創之、則宜卒之矣、夫去歳閣下入京也、衆献言者相継于門上書満筐笥、於是乎氓隷不敢献一言、特就執事自陳以老于民務而請致賤軀于門下、亦非求官釣禄之意明矣、閣下親見徴求所撰述氓隷不敢辞上三篇、其一曰、擬荒政当更始論済都下、其二、上民部省書嘗在待詔論除民患、其三曰、審勢策帰田後論大政不振、自有以上、斯三篇後屢上言亦要閣下有格正于天下耳、未敢献一策焉、閣下優答諭以名分示以時機而至今日、億兆聞閣下当路翕然、皆信其格正引領望之、惟怨其不速、於是乎閣下英断以応人望乎、抑姑息

以自保安乎、如其保安則固非氓隷所与知、若応人望則不能不復其所請也、頃者聞之執事昔日満筐上書今也、概属覆瓿蓋名憂国而其実釣禄之徒多也、若氓隷則常念死国而未得死所、故欲附驥尾竭駑駘日久矣、閣下幸不与昔日衆献言者同視之、憐其愚衷而許其所請、則水火亦有所不避矣、瀆冒威尊惶懼無已、誠恐誠恐頓首頓首、

明治七年五月十六日　　氓隷布治帰一謹上

左大臣島津公下執事

文書原寸　縦一八・二糎　横九六・七糎　包紙原寸　縦二八・七糎　横　四〇糎

邊二五　浅田宗伯惟常ヨリ左府公ヘノ建言

朝令暮改ノ弊ニ付

（包紙ウワ書）「建言書　浅田宗伯惟常」

常謹白伏惟国家維新以来七更裘葛而基本未立、政令朝出而夕止、局制夕定而朝変、黜陟・賞罰反覆無窮、加之外有呑噬之夷内有嘯集之民、内外煩擾人心洶々、天下皆望賢相之出、若大旱之於雲霓、然時聞閣下登台鼎握天下之大権、衆咸欣々然相語曰、大賢当途他日蘇息我者必斯公也、常則独嘆曰、今時其何時、犬羊乱群羶風扇世而以大任属公、苟自非簡法重令以澄其源、崇礼定制以斉其俗、立綱目以節浮費、揭専務以廃虚文、厳政条以核名実、則不足以慰天下之望、而使民欣々然也、昔周公立明堂以聴天下、而召公惑之降如寇萊公・范文正公皆有徳君子、而不能久立朝者何也、望高事大妬忌、紛拏・奸詐・百出擠其後也、宜乎召公之致惑焉、方今

聖主聡明英達雖如周公之於成王無不容納、然所憂者閣下唯一人而已、若得召公若其人者三五人賛助之天下望之、屹然若中流之底柱有所恃而不恐、則国家或可扶持焉、抑国家忘中興之鴻業、而懐偸安之心士大夫狃于腥羶之夷、而以漁利為時勢之、当然此已失之、基本誤之事体乃所以政令屢出而不能、振局制数変而不能、復振也、伏惟閣下

抱不世出之才立、於天子之下百官之上、其深謀遠慮固非常小人之所測知、然天下之勢如峻阪人情日下而公之望益高、其地危如累卵大任一去国体大傾、則不可復収正、宜速登俊良黜庸流総攬、衆才経略世務嘘死灰於復燃廻狂瀾於既倒以莫民之欣々然者更為悒々然也、是常之所以区々独為嘆息、而遂忘狂瞽以触冒威、尊惶恐無他伏俟鈇鉞之罪而已矣、常死罪頓首、

島津左相公閣下

文書原寸　縦一九・七糎　包紙原寸　縦　二四糎

横　九一糎　横三二・五糎

遺二六　中野龍明等ヨリ教院並附属社名廃止反対抗議

伊東長辭等へ

（表紙）「願書」

岡野龍叟
中野龍明」

奉歎願候

不学暗愚私共ニ御座候得共、洋風日々盛ニシテ神州ノ教風不行儀ヲ長歎大息罷在候折柄、去ル申年四月小教院御開業ニ相成、神州ノ教風相開候奇瑞ト喜悦仕、則御両君江附属諸人ニ教解仕、且暮苦心丹精仕、当五月迄ニ凡三万人余人員結社仕候処、御両名御免職、社中之者目斗ヲ失ヒ驚入候、是迄盛ニ人員相増候儀取計候得共、月掛日掛銭等為致候儀無之、且勧財等仕候儀猶更無之、教院入費大小ト無、伊東家御出金被下候得共、結社入費之儀は私共両人自費ニテ尽力、基本志願結社人員数拾万ニ至候迄ニは、追々御教講ニ而神州無二信義之人員取建、海外耶蘇之輩人心動不得様教育志願ニ而赤心ヲ尽シ候処、御免職ニ付人心頻ニ動揺心痛仕候処、猶又第一号小教院并附属社名共御廃止之御沙汰重々驚入候、近傍社中之者共右之趣承り、挙テ私輩江申出候ハ大講義方并各より三条之教則相守、講社人員盛大ニ相成候様協力可致旨御談ニ付、面々尽力致候処、教院并社名御廃止之御沙汰、其所

謂覚悟難仕面々、是迄申述候趣虚談ニ至り、諸人江対シ汗顔之至ニ付、弥社名等御廃止之儀ニ候得は、耶蘇教師江入門仕候間、今日迄協力同心誓約致居候事故、相共ニ耶蘇洋教ニ入学、可然旨被申談、如何共返答方ニ差支居候、御両君御免職之処江申立儀恐入候得共、御在職中報国尽忠之御志願ニ而御取立之人員洋教江入門仕候ハヽ、一大事件と奉存候、御賢慮御評談之上御差図迅速奉願候也、

明治七年六月五日　　中野龍明
　　岡野龍叟

伊東長斡殿
中条信汎殿

冊子原寸　縦二七糎　横一九・五糎　四枚

過日、御内沙汰ニ仍而申上置候探偵書写出来候ニ付指上候、御落手奉仰候也、

六月廿二日

文書原寸　縦一七・三糎　横二六糎

遺二七　土方久元ヨリ左府公ヘ探偵書写ノ件

（封紙ウワ書）「左府公閣下　久元」

遺二八　華族会館事業変更ニ付久光公ヘノ通牒

松平嵯峨両卿ヨリ

当館最前ノ考案ハ、嘗テ仮規則ヲ以テ御相談申入候通リ、勉学講義書籍諸局ヲ開設シ、追々興張ノ見込ニ候処、諸君御討論モ有之、彼是参考時日迂延（遷）致居候内、館中ニモ異論有之、依テ従前ノ宿案ヲ翻シ、学務ノ儀ハ加藤弘之ヘ諮詢、既ニ其方法ヲモ商議致シ、略ホ決定ノ処、何分今日ノ形状ニテハ不足ノ会計ヲ以テ之ヲ処置致候儀ニテ、諸事十中八九マテハ差支ノ廉有之、到底見込通リ相運ヒ難キ場合ニ立至リ、実以テ心外ノ至リニ候、乍去此儘打

捨置候テハ益世上一般ノ誹聞ヲ受ケ、折角首唱ノ意旨モ空ク水泡ニ相帰シ可申ニ付、兼々御異論モ有之儀ニハ候ヘトモ、館員稽古ノ為メ有志人ヲ集合シ会議席ヲ開キ、華族タル者ノ義務ヨリ尋テ博ク政体時事ニモ議及致シ、尚ホ別ニ講義席ヲ設ケ、聊カ勉学ノ意ヲ表シ、右二条ヲ以テ当館著手ノ第一トシ、暫ク館員ノ人心ヲ維持シ、漸次盛大ノ方法ニ相運ヒ申度候、右ハ万止ムヲ得サルノ事情ヨリ決定候間、此段申入候也、

「(欄外ニアリ)松平嵯峨両卿ヨリ請取　戌六月廿七日」

文書原寸　縦二三・八糎　横三三・三糎

追加二九　大倉鋹三郎ヨリ東京府知事大久保一翁ヘノ願書　和歌添二通

旧幕臣石川靭負復禄ノ件

追加一一九ノ一

正

石川家元従臣身分ニ付上表

石川靭負元従臣惣代大倉鋹三郎、謹而奉申上候、靭負儀は日来勤王之誠意相立候処、辰年以降弥遵奉実功之道顕然相成、其附属同様遵奉仕、巨細之儀、先年中三条殿下・島津殿下江呈書差上置候ニ付、御尋問之程奉希願度、人員出兵書は兼而正院書記官重野安繹・細川広世御心得候、

辰年中

鎮撫

御総督府東海道御下向之節は、薩州参謀海江田武治江靭負募兵隊長正監察岡崎亀三郎応接ニ而、人数召連守衛勤奉仕候、三河国矢作川・男川通細川村砦之場所は人数交代警衛仕候、因之以来帯刀脱剣農商心得如何仕候哉、此段奉窺候、以上、

明治七年甲戌六月　木下村草民　大倉鋹三郎〇

東京府知事　大久保一翁殿

文書原寸　縦二四・八糎　横三四・六糎

追加一一九ノ二

辞邦

国の為君のためとて捨るみは
何おしからんものゝふのミち
たらちねの教のミちは今こゝに
跡ふミわけて尋まいらん
嗚呼皇邦主従同　先駆死亡当院中
一合奉禄祖以食　心形刀流輝日東

坂東壮士
大倉鋹三郎
再拝

辰年御朱印拝覧之節
皇の御代にいたゝく十寸鏡（マス）

右

吟上　士進書

文書原寸（折紙）　縦一五・八糎　横二一・五糎

遺二〇　二見正則ヨリ左府公ヘノ建言

時弊匡救ニ付

臣正則謹再拝奉書

左府相公閣下、方今天下ノ危急焼屋ノ下漏船ノ中ニ座スル如ク、伏惟、
相公閣下独宵肝憂慮、蓋コレヲ拯救スル所以ノ術ヲ思惟ス、臣以為、方今ノ急務ハ更無他説、譬禦飢者当ニ食ヲ用ユヘシ、捨食ノ外皆急ニスルトコロニアラス、已疾者当ニ医ヲ用ユヘシ、捨医ノ外皆急ニスルトコロニ非ス、臣今所言不為愚伏乞、
相公閣下少容之幸甚、臣区々憂国為
相公閣下敢上陳之、蓋古ノ英主ハ謀臣帷幄ノ中ニ座シ以籌策ヲ出ス、群賢依憑之以自進、此令一ツニ出而大功ノ成所以ナリ、漢高祖所共謀者蕭何・張良・陳平而已、他臣ハ不参謀、唐太宗所共謀者房喬・杜如晦而已、他臣ハ不参謀、宋太祖所共謀者趙普一人而已、他臣ハ不参謀、東照公有天下所共謀者本多正信一人而已、他

臣ハ不参謀、恭惟、
相公閣下
今上帝王政復古開済ノ大功臣、当今特居大傅之重任可謂
隆盛也、宜シク速入帷幄為
聖明可除弊事、夫天下無不可為之事亦無不可為之時、惟
其時ヲ失、則事ノ小者日益大事ノ易者日益難、要ハ惟
前日ノ轍ヲ改ムヘシ、
英断在行之耳、臣正則痛切時事為国血泣叩頭、誠惶誠
懼、昧死百拝頓首謹上、
六月　日
奉
左大臣島津従二位公閣下
臣二見正則拝上

文書原寸　縦一八糎　横一一八・五糎

邊三　斎藤貞蔵（簡）ヨリ左府公ヘノ建言

奸臣黜斥ノ件

（包紙ウワ書）
「奉建言一書并拙詩二首」

謹而奉申上候、
閣下御引籠以来数十日間、　廟堂御決議無之、御上言之
趣湮晦仕、于今　御出勤不被在儀は全奸魁一旦辞表等差
出候得共、満　朝皆其徒ニ而事を通し言を互にし、忠誠
之言を擁蔽仕候儀と奉存候、且近頃又々出勤全権之趣承
候得ハ、益
皇国之御危難無極御洞察之通、必蛮夷之手ニ陥入可仕と
日夜苦慮仕候、先般拙詩ニ奉申上候通り、御迹を継候人
物ハ天下絶而無之候間、何卒
皇国之為ニ御出勤御匡救被下候様仕度候、先月十九日参
殿之節、奸魁之罪悪確証を拝謁ニ而奉申上度奉存候処、
其人既ニ引込ニ相成、且不日閣下御出勤ニも可被為成之
輿論相聞得候故、差扣引取居候得共、今日ニ至り海内外
之事情益乖理人心沸騰仕、何分憂憤ニ難堪候間、又々狂

盲を不顧言上仕候、抑賞罰ハ治国之大典政道之緊要ニ有之、舜四凶を遠け、周公管蔡を征之、孔子少正卯を誅する之類、歴代聖賢・明主尤先シ最重する所ニ御座候得ハ、早く奸魁之確証を御徴求被為在、御厳罰之程奉仰望候、若御徴求御手筋ニ於き候而は、拝謁ニ委曲可奉申上候、夫政事之緩急ハ時に寄り宜ニ従ひ候儀ニ而、己代之時、周之世宗皇帝応機決策人之意表ニ出て、又政事ニ勤め姦を扞き伏を摘聡察神之如しと御座候間、乍恐閣下ニ被為於候而茂、人之意表ニ出候て聡察神之如シト申処に御注意被遊、天下万民之苦艱一日茂早く御救済被成下候様仕度奉伏願候、当今　左相之御重任を被為拝候間、乍憚此儀御当然之御事と奉存上候、若満朝奸佞之徒而已ニ而一人之忠雄無之、主上を奉蛍惑、御忠誠之御献言如何ニ仕候而茂御採用ニ不相成候ハヽ、上ハ皇統不絶之為、下ハ万民塗炭之苦除之為ニ、御先祖右大将公之御謀猷を被為継、天下一洗王室廓清之御処置被為有度奉拝冀候、是即私一人之儀ニハ無之、海内憂国有志之士衆願罷在候間、乍恐御深慮御決定被遊候様奉泣願候、猶書ハ言を尽シ兼候間、御直ニ曲折奉申上度奉拝願候、恐惶頓首稽顙、

明治七年七月三日　　斎藤貞蔵九拝

左相公
閣下　侍史御中

奉再伸候、拙詩二首聊表愚衷　御電覧奉拝願候、

賞罰之知大政機大奸何使満
朝癡前人覆轍
君看取千丈堤従蟻穴堕
怪底豎児漫弄才竿頭要掲大奸魁豎　神州将化為夷狄廿策
誠忠恐画灰

斎藤簡拝顙

冊子原寸　縦二七・五糎　横　二〇糎　三枚
包紙原寸　縦一七・八糎　横三九・五糎

遍三三　安田轍蔵ヨリ左府公ヘノ上申

（包紙ウワ書）
「上申　板垣前参議ノ忠誠」

安田轍蔵

七月七日

（「緘」ト朱印ハ重複）
緘〇　」

記

昨六日早朝、板垣前参議旅宿江差越、私ヨリ一言ヲ不出、同氏是迄為天下尽力云云巨細承知仕候処、実ニ不耐感泣私不覚之及落涙候、真ニ板垣氏ハ御邦内稀ナル忠臣ト奉存候、尤同氏談話ニモ政府官員情実歎息之口上多分ニ御座候、別而大隅（限カ）之姦曲両大臣江上申モ諸方ヨリ御座候由申聞ヶ候、倩昨夜来板垣氏之談話情態を観想仕候得ハ、扶桑国脈之危急切迫風燈ヨリモ不可頼、氷肝寒心之極ト奉存候、乍恐此上ハ何卒偏ニ御前之御尽力不被為在候而ハ不相済奉存候間、幾重ニモ天下為万民御配慮被為在度奉存候、当今大坂市中之困苦一々不可奉申上苦酷之法則双起し、人心之不平乍恐上ヲ怨望スル形勢不耐見聞奉存候、此段御含被為在候様仕度上申仕候、誠恐誠惶謹言、

七月七日

安田轍蔵

上申

尚又奉言上候、板垣氏モ九月中再上京之含ニ御座候由、同氏申居候、前件上申之云云合シテ此件ハ乍恐御他言不被在候様、伏而奉願上候也、

文書原寸　縦二五・五糎　横　五一糎　包紙原寸　縦二八・三糎　横　二〇糎

遍三三　斎藤貞蔵ヨリ左府公ヘノ建言

（包紙ウワ書）
「上　浅田宗伯ヲ推挙ス」

閣下　侍史御中

斎藤貞蔵
九拝」

謹而奉申上候、先般建言仕候大奸確証奉申上候、無程
閣下ニハ奸人之儀少々罪科有之候共、大功業之人ニ付其
侭御任用可相成、　叡慮之趣と少々其外御ヶ条共御答ニ
相成候由、道路同様之説承及、左候得ハ　叡慮ニ託し奸
悪も無御構由ハ賞罰被為廃候、　叡慮に当り、乍恐亡国
之　詔と可奉申上儀ニ而、微臣建言等ハ固より御用被遊
兼候ハ勿論と奉存候、乍去淵海と　尊慮被為有候御儀ニ
付、別段御対策被為有候得共、何卒奸人之難企及御不世
出之御長策を以御芟除被為有、国家鼎重之御程奉仰願候、
　但確証之儀ハ御折を以御熟聞御握置之儀奉希望候、
一若々近く御出勤遊候ハ、、是非此度ハ　尊慮を以御股
肱御服心と相成候、愛国剛忠謀略臨機神出之士を参議ニ
御登用第一と奉存候、従古英主明君之孤立と申事決而無
之、一二を挙候而も、漢高之子房・蕭何、光武之劉禹又
寇恂・馮異、大宗之杜如晦を挙、皆中ニ止宿し謀議候由
ニ而、俱共輔相して大業を成候歴々如此枚挙ニ遑無御座
候間、其剛忠謀略神出之人と申候得ハ、乍恐先頃申上候
浅田宗伯之外ニ右数条ニ堪候人、微臣之存候者ニ無之候
間、何卒近日ニ被為召、御服心之官人并御家臣も御交へ
之御席ニ而徹底御叩詰被遊候ハ、、其鳴声ニ而大低其鐘
之大小醜美御分解可被遊候、尤旧諸侯中ニも三人程ハ参
議ニ御任用之人有之候由、同人申居候間、是又御挙用遊
し候ハ、、俱ニ朝議其外御大羽翼可被為成候、
閣下乍恐無上之御英明ニ被為入候得共、御羽翼不被為有、
御一人ニ而此御大業を済得候御儀御六ヶ敷と、又々不顧
恐懼、若々御出勤遊し候、却之一大御機用要と奉存奉申
上候、誠惶誠恐頓首稽顙、
猶以国債并紙幣共悉皆数月之間ニ消償之実策御届候由、
同人申居候間、大蔵省其外之儀、決而乍恐御懸慮ニ及
申間敷候、稽首、

明治七年戊七月十八日　　斎藤貞蔵

左相公
閣下　侍史御中

九拝

冊子原寸　縦二四・五糎　横一六・五糎　二枚

包紙原寸　縦二四・三糎　横三二・五糎

邊二四　青森県士族佐々成家ヨリ左府公ヘノ建言

政府改革ノ英断ニ付

臣成家
謹再拝頓首白

左相府公閣下伏而惟ルニ、方今ノ形勢、内ハ則民心離隔シ、将ニ土崩セントスルノ萌アリ、外ハ則支那ノ大患焦眉ノ急アリ、実ニ皇国未曽有危殆ノ秋也、畢竟政府維新ノ始メ民心ノ嚮背ヲ顧ミス、漫ニ新奇ヲ好ミシヨリ終ニ今日ノ勢ニ馴致ス、然レトモ政府未タ前非ヲ悔ス、而唯民ヲ目スルニ頑愚固陋ヲ以テシ、是ヲ馭スルコト恰モ駑馬ニ鞭ヲ加フルカ如シ、故ニ民又政府ヲ視ルコト、或ハ寇讎ノ如シ、於是政府殆ト孤立ノ勢アルニ似タリ、夫如此ヤ、何ヲ以テ天下ヲ維持セン、何ヲ以テ外患ヲ禦カン、噫危哉、臣惟ルニ、方今ノ急務ハ士気ヲ奮興シ民心ヲ固結スルニアリ、其要タルヤ官員ヲ精撰シ政体ヲ一変スルニアリ、其下手ノ処ハ先海陸軍ノ二省ヲ除クノ外、諸官省一旦空官空省ト為シ、而天下ノ耳目ヲ一洗スヘシ、然ラスンハ其精撰ノ道ヲ明ニスルコト能ハス、冗員冗費モ亦省クコト能ハス、而民心ヲ安ンシ、之ヲ固結セント欲スルモ豈得可ケンヤ、議者或ハ曰、今ヤ外患ノ大急アリ、然ルニ一旦空官空省ト為スニ至ラハ、人心洶々故サラニ乱ヲ求ムルニ似タリ、如カシ旧ニ依テ先外ヲ防カンニハト、是尋常ノ論ニシテ敢テ不可用ノ言也、抑官員タルハ唯々租税ヲ収ムル為ニアラス、民ヲ治ムル為ニ置カレシナラン、而民ニ於ケルヤ、百物百種租アリ、税アリ、民力既ニ上ニ尽スト雖、上ノ恩恵未タ下ニ及ハサルノミナラス、民心日ニ離レ月ニ疲弊スルヲ致ス、而政府ノ義務何レニアルヤ、是ヲ以テ内政ヲ改メス人材ヲ撰ハスンハ、民心益上ニ背キ、冗

員冗費モ亦随テ除クコト能ハス、民心離レ資糧乏シクシテ、而今日焦眉ノ急患何ヲ以テ防カン、孤立ノ政府何ヲ以テ民心ヲ斉フセンヤ、故ニ外ヲ防カントセハ先急ニ内ヲ治メサル可カラス、是則方今ノ一大急務ニシテ片時モ忽ス可カラサル也、夫政ヲ為スヤ、始メヲ貴フ、

閣下左相府ノ大任ヲ拝セラル、是猶創業ノ時ノ如シ、殊ニ天下ノ人心

閣下ヲ仰慕スルコト茲ニ年アリ、俯テ冀クハ

閣下速ニ大英断ヲ以テ、前ニ述ル如ク一旦空官空省トナシ、更ニ官員撰挙ノ道ヲ明ニシ、而民心ヲ固結シ、以テ天下ト与ニ焦眉ノ急患ヲ禦キ、上ハ

宸襟ヲ安ンシ奉リ、下ハ億兆ノ望ミニ答ヘンコトヲ、是臣カ流血敢テ死ヲ辞セス、

閣下ニ懇願スル所也、臣成家謹再拝頓首白、

明治七年八月　　青森県貫属士族　大蔵省出仕　佐々成家

冊子原寸　縦二四糎　横一六糎　二枚

嘉三五　横山貞彦ヨリ松方正義ヘ

支那内情ニ付

益御清務奉欽賀候、陳ハ追々御聴之通過日之大風非常之霖雨、海陸之風景荒涼寂寞、実ニ満港之禍害無、其比慣然之極、雖然時ハ出穂前ニ際シ、当管内ニ於テ作毛上障碍無之、歳収ニ拘ル天災ニ無之趣、米価頃日拾円程ニ昂貴候得共、是ハ暫時之事ニ可有之存候、却説台湾蕃地モ爾来依然平寧、唯無事ニ困居ストノ趣、柳原公使応接之模様モ結局ニ臻ルベキ勢ニ無之、互之論説全ク齟齬、彼ハ版図属国之地云々、我ハ野蛮無主国云々トノ大主意ヨリ、殊異之源因ヲ作ス也、然ニ大久保大臣昨日辺北京御到着之筈、此上結果之運ニ可相成、其報渇望罷在候、清国ニテハ不相換軍備不怠丁抹国ヨリ甲鉄艦壱艘買入、尚其後幾艘ニテモ買収セムト着手中之由、尤国内不平党ハ破烈ニ乗シ、暴威ヲ逞セムト四方ニ鼻息ヲ鳴ラシ相待チ、動スレハ暴発之色アル故、清国政府モ外患ヨリ反而内憂不可防之形勢、殊ニ頃日天津ニ屯集スル李鴻章之一軍隊

暴動、政府ニ敵対之色ヲ顕サムト為セシハ、彼地屯在之兵数壱万人之定ニテ、政府ヨリ諸之給与アルヲ、将官之輩ニテ八千人之現員ヲ徴シ、弐千人分ハ各自配受私用シ、如此奪掠之風是迄要路上ニ縦横スル故、随而下吏ニ至ルマテ交奪之悪行アルヲ、新徴ノ兵員等察知シ事ヲ起サムト、士官以下隊中密謀相企シニ、忽チ露顕シ政府之手ニテ捕縛、尋テ士官十数名・兵卒数百人死刑ニ処セラレ、一応鎮静セシ由、然ニ李鴻章ノ名声ハ弥高、漢人ハ多分傾心ノ容子ニテ、竟ニ政府ト相対スルノ時機ニ及ブモ難計、政府モ困難之期ユエ、今般大臣之談判都合克可纏トノ説ニ有之、欣躍千万奉存候、右近況拝告仕候、当港貿易平生之通ニテ、清商共聊駆引斟酌之体不相見、八月中モ四拾艘余之入舶壱万円許之収税額有之候、此段謹言頓首、

明治七年九月五日　　横山貞彦

松方頭公閣下

冊子原寸　縦一九糎　横二七・八糎　二枚

遍三六　征台事件ニ付無名氏ヨリ久光公ヘノ建言

取次者添書共三通

追加一二六ノ一

君命有所不受

是孫子ノ至難ニ臨ミ至変ニ処スルノ妙用也、桀・紂ノ朝ニ出ル命ハ、皆満朝通逃ノ小人ノ出ス命ニシテ天子ノ命ニ非ス、漢ノ桓・霊ノ朝ノ命モ亦然、宦官ノ命也、天下将ニ傾覆セントス、是至難也、祖宗ノ大典ノ壊ル、ハ至変ナリ、故ニ礼随テ行ヒ難ク彼随テ変ス、礼ノ転換ハ古人ノ難スル所、故ニ仲尼ノ言行ヲ観テ顔淵歎曰、仰之珍商鑽之弥堅在前忽焉在後ト、是ハ人ノ志行ト物ト事ト紛々翩々、見ルニ堪可ラサル者ハ分乱シテ冠履倒置ノ日ノ勢ヒ也、大体一変セントス、必ラス然ラサルヲ得ス、故ニ乾ノ九四ニ或躍在満、是革命ノ勢ヒ也、天子ノ心一定セスシテ致ス勢ヒ也、殷湯・周文皆祖典ヲ用ヒテ新政ヲ用ヒス、是桀・紂ノ命ヲ用ヒサル者ノ如シ、而シテ其実ハ小人ノ命ヲ用ヒサル也、此日ニ当リテ天子ノ口ヨリ授

ル所ト雖トモ、亦是ロヲ小人ニ借ス者ノミ、若之ヲ真命ト誤リ之ヲ用ヒハ、是君ノ悪ヲ長シ君ヲ水火ニ擠モノ也、故ニ乱政ハ逆境ノ至難、革命ノ運ハ其至変也、故ニ君命モ受ズト云スシテ有所ト云、有所ノ二字ハ小人ニ惑フノ主命ハ偽ニシテ、祖典ハ祖宗ノ真命也、何ヲ以テ真偽ヲ弁ス、曰、天命ニ従順スルコトトナルハ真ニシテ、相反スルハ偽也、若偽ヲ用ユレハ傾危ハ乃チ滅ニ入、主ハ戮辱ヲ受、是姑息ヲ以テ社稷ヲ滅ニ誘シ、君ヲ戮辱ニ進マシムル也、其紛々翩々ト転換スルニ当リテハ、聖人ト雖トモ能真偽トナルト否トヲ見ルニ難スヘシ、而シテ泰然自得以テ事ヲ決スルコトヲ得ル所以ノモノハ允執其中也、允ハ人民ノ允シ信スルコト也、故ニ人民ヲシテ允信セシムルニハ、所謂ル中ヲ固ク執守リテ疑カハサル也、中ハ忠也、此忠ヲ固ク執ント欲スレハ、恕ニ非レハ其処置ヲ運用スルコト能ハス、故ニ恕ニ由テ忠ヲ得ラル、ナリ、周公ノ坤ノ六二直方大不習无不利ト云ルハ此コトト見ユ、坤ハ順ナリ、恕是也、二ハ中位也、陰ノ陰位ニ在ハ正也、大トハ此上ニ陽ヲ戴ケハ艮トナル、臣ノ君ニ事フル象也、是臣ニシテ天下ヲ覆フ大臣ノ象トス、故ニ大ト云、是ナレハ習慣セサルコトヲ行ヒテモ利トナラサルコトハナキ也、利トハ美利ノ利ニシテ、善人ヲ進メテ天下ノ利ヲ起シ、悪人ヲ退ケテ天下ノ害ヲ除ク、毫モ天下ノ利ナラサルナシ、故ニ无不利ト云ナリ、然ハ志行忠怒(恕)ニナレハ天下ヲ利セサルハナシ、仍テ恩ヲ加ヘテ恩ノ瀆ル、患ヒナク、誅ヲ行フモ威ノ瀆ル、コトナシ、而シテ君命ヲ受サリシノ受シニ反シテ愛君ノ賞トナルコトニナル也、此一語ヲ知サレハ人臣タル者君ニ事ルノ道ヲ尽スコト能ハス、事ニ臨ミ決断スルコト能ハス、是カ為ニ後世ニ及フマテ罪ヲ得ルコトトナル也、仍テ九変ノ術ニ通スルヲ要トス、九変トハ至変ト云コトニテ、九ハ陽数ニテ至トナル、君子ヲ陽トス、君子ノ至変ヲ行フニハ、此ニ能通セサレハ態々不断禍ヒヲ後ニ貽スコトトナルトスル也、今日小人ト　主上ト議合シ玉フハ、是ロヲ小人ニ借玉フ也、故ニ有所不受也、所ハ小人ニカ、ル也、　主上ノ勅、列聖ノ

典刑ニ合シ、天命ヲ奉承シ玉フコトトナレハ、如何ナル不便アリトモ敏勉鞠躬以テ奉セサルヲ得サル也、今日ノ事モ勅ノ真偽ヲ弁スレハ何モ疑フ所ナシ、金ヲ受テ専決スル如キハ勅ニヨリテ行フト称スルト雖トモ、是其実ハ偽勅ヲ行ヒタルモノ也、然ルトキハ　主上ニ害アルコトナシ、若真トナレハ害　主上ニモ及ントス、是大関鑰ノ所トスヘシ、

文書原寸　縦一六糎　横三八糎

追加一二六ノ二

転患為利私議

伐湾ハ我ノ支那ニ暴寇貪兵ヲ加フル也、人無遠慮必有近憂日本存亡ノ大危難近キニ在モノ也、暴寇ニ金帛ヲ与ヘ其慾ニ飽シメ、以テ姑ラクコレヲ屈スルハ、仁以民害ヲ緩フスルモノ也、暴寇ニ居金帛ヲ得テ計ヲ得タリトスルハ、古ヘノ玁狁・回鶻ノ周・漢ニ於ル也、玁狁・回鶻同シク人道ヲ解スルコト能ハサル醜夷也、故ニ仁義ヲ聞モ馬耳風ナリ、故ニ止ヲ得ス金帛ヲ以テ其慾ニ飽シメ民害ヲ除ノ術トス、台湾ハ所謂大同宣府鴈門楡林ノ同形勢ニテ、彼ノ辺要ナリ、是我ヲ待ニ玁狁・回鶻ヲ以テスル也、玁・回ノ類固ヨリ醜夷故ニ、其無恥ノ不義ヲ以テ金帛ヲ貪ルモ、尚戸外ノ丐児ト殊ナルコトナシ、故ニ甚タ大患ヲ其後ニ受ルノ責ナシ、我ハ然ラス、古ヨリ堂々タル天皇ノ国ト称ス、所謂ル帝国ナル者也、而シテ今彼ノ醜夷ノ待ヲ甘ンシテ受、是帝国ノ名ヲ自カラ損スルモノ也、彼ノ金帛ヲ投与シ、我ヲ玁・回ニナシタルハ、是我ヲ術中ニ陥シイレタル也、是必ラス我帝国ノ名ヲ削ラント欲スル者也、其之ヲ行フニ当リテ先曲直ヲ正スヘシ、我ノ曲ハ三歳ノ児モ知易シ、備中漂民琉球ノ害ヲ生蕃ニ受ル、其断既ニ西郷某ノ詰ヲ解コト能ハサル所ニシテ、見ニ書翰ニ之ヲ見ル、今金ヲ受ルニ名ナシ、徒ニ民害ヲ以テス、復之ヲ詰スルコト能ハス、是我ニ辞ノ属々之ナキ証也、然ハ曲我ニ在テ醜夷ノ待ヲ恥スシテ之ニ居ル彼ト洋夷ト同シ、来リ曰ン、汝自カラ帝国ト称ス、而此待ヲ受テ辞

ナキモノハ是帝国ニ非ルコト顕然タリ、然ハ今日ヨリ同盟邦中ニ於テ帝国ノ号ヲ削ルコト当然タリ、汝ノ辞ハアラハ之ニ答ヘヨ、又曰、汝去年清朝ニ同盟ヲ乞、今年ニ及ヘハ不義無名ノ暴寇ヲ加ヘ、剰サヘ金帛ヲ貪リ去、是其事ハ強窃ニシテ、其道ハ禽獣ナリ、其平素或ハ曰神州、或ハ曰中国、或ハ曰大和魂、或曰勇義之国、其常言スル所焉ンカ、在伯来宜シク名其実ニ随ヒ、此言ヲ毫モ出スコトヲ得可ラス、同盟ノ名存シテ斯ノ如キ妄動アリ、而シテ之ヲ正サレハ後来破盟ノ禍ヒ此ニ生ス、然ハ破盟ノ禍ヒヲ醸スノ罪明白ナラスヤ、今正スニ曲直ヲ以テシ、破盟ノ兆ヲ造作スル者ヲ懲シ、後ノ戒メトナサヽルヲ得ス、宜シク伏罪ノ験証ヲ印シ、其償罪ノ物ヲ輸シ、以テ其罪ヲ同盟諸国ニ謝スヘシ、汝若シ非ヲカサリ罪ニ伏セスンハ同盟各国問罪ノ兵ヲ提ケ、其刑ヲ行ナハント欲ス、宜シク速ニ之ニ答ヘシナト、難題ヲ申シカクルトキハ、我之ニ答フルニ何ノ辞ヲ以テセン、復之ト戦フニ何ノ術ヲ以テセン、天下今日政府ノ暴虐ヲ怨ミサルナシ、新政後紛擾年トシテ之ナキハナシ、是其証ニテ之ヲ散地ノ勢ト云、人民上ニ親ムノ情散シテ上ニ(ママ)聚リ結ハス、故ニ戦ヘハ必ラス士卒離散シ一朝モ守ルコト能ハス、六親モ保スルコト能ハサルヲ散地ノ国勢ト云也、故ニ存亡ノ憂ヒ近キニ在ト云也、

按スルニ、此大患容易ノ力ヲ解コトヲ得可ラス、若解コト能ハサレハ座シテ滅亡ヲ待モノ也、曰、然ラハ如何シテ可ナラン、曰、之ヲ未然ニ防クノミ、彼モシ一使ヲ臨マシムルニ於テハ彼ニ先ンセラレ、徒ニ虚辞ヲ以テ之ニ向フコトトナル也、仍テ未然ニ我先使ヲ発シ以テ我忠恕ヲ致スヘシ、凡ソ患ヒヲ解利トナスハ兵恃ムニ足ス、徳ニ存スル也、仲尼所謂ル忠信所以進徳也、忠トハ天地間ニ立、彼我ノ間隔ナク各其君民ノ害ヲ除キ、利スルコトヲ与ヘント思慮スル也、為人謀不忠乎是也、人モ我モ上モ下モ同シク為ヨクスルコトハナス可ラスト云ハ凡庸無術ノ言也、何ソ之無ラン、忠字ノ作用ヲ知ス尽已、曰、忠ナト、云如キヨリ聖人ノ実用カクル、也、妙ハ私シナ

キヲ心トスレハ自然ニ行ハル、、我身ツメツテ人ノ痛サヲ知ハ、是彼我同病相恤ヨリナレハ中トナラサルヲ得サル也、行ヒニ常ニ之ヲ発セハ人モ我ノ志行ハ之ニ在ト信ス、是信也、忠恕信ヲ用ユレハ支那ハ固ヨリ同病ノコトナレハ服スルハ言ヲ俟ス、洋夷ハ却テ其肺肝ヲ見ラル、ヨリ膽ヲ落スヘシ、仍テ其術ヲ論セン、夫外国人ノ膽ヲ奪フハ支那ノ恨ヲ釈ニアリ、孫子ニ先奪其所愛則聴矣、是外国人ノ愛スル所ハ二国ヲ相怨ミシムルニ在ハ、支那人ヲ服スルハ同病相恤ニアリ、是共ニ外患ヲ防キ内難ヲ相援クル也、同ク内外ヲ定ムル者ヲ以テス、是忠恕也、之ヲ信ニシテ我攘夷ノ基ヒヲ定ム、善隣君子要務国家保障トハ是也、人ヲ利スルニ専ラナルトキハ、其事或ハ私愛ニ渉ルノ患ヒアリ、故百般人ノ害トナラサルト害トナルコトヲ解与フルトニ在、我曲直ヲ正シ、姑ク屈シ以テ彼ヲ伸シム、以テ其辺患ノ憂ヒナカラシメ、而シテ盟約ヲ固メ改ム、是彼ノ利スル所也、五十万トルノ金ハ中商以上ノ者ハ敢テ嗇マサル所アリ、況ヤ上タル者ニ於テオヤ、然レハ先一使ヲ急拠ニ発シ、若彼ヨリ使節ヲ致サントスルカ、或ハ外国人議ヲ発セントスルノ色アレハ、我ヨリ別ニ大使来リ処置アレハ姑ラク之ヲ緩ヘシム、是人ニ先タチ人ヲ制スル也、我若シ一歩ヲ遅クスレハ彼ニ攻ラレ、而シテ守ルモノ也、是我ノ守ル可ラサル勢トナル也、先ンスルトキハ攻守ノ勢ヒヲ変ス、却テ我攻勢トナリ彼守勢トナル、彼未タ其事ナシ、我既ニ之有、是我実ヲ以テ彼ノ虚ヲ衝也、金ヲ還シ罪ヲ謝ス、支那ト洋夷ト同シク未タ思ハサル所ニシテ、我之ヲ行、我実ニ居彼ヲ虚ニスル也、清ト洋夷ト意ヘラク、今日マテノコト日本ニハ智アル者ナシ、故ニ我術中ニ陥ルト、而シテ還金謝罪ヲ行フ、是彼ノ意外ニ出、是乖其所之応接恭敬ヲ以テス、是順徳也、彼怒ラント欲スレトモ能ハス、是柔能制剛克己復礼以テ人ニ勝モノ也、今日ハ需ノ終リノ勢ヒ也、此大難ノ海外ニ生スルヲ待テ在テ其終リニ当ル日也、故ニ其九三ニ敬慎不敗也ト仲尼ノ伝ニアリ、慎ハ機ト術トヲ慎ム也、不敗ハ害ノ除ク也、三ハ上六ニ応ス、上六ハ

事ノ終リ也、而シテ九三ニ相応シタル行ヒハ敬慎ニ在ヲ云也、九三ニ寇ノ至ルヲ致ストテ害ヲ自カラ招クトハ、上六ノ陰爻ニ対シテ云、暴猛ニシテ兵ヲ海外ニ用ユル者ハ自カラ害ヲ招クト云コト也、敬慎暴猛其徳相反ス、故ニ吉凶トナル也、今日ノ妙用ハ金ヲ還シ罪ヲ謝シ、仁義ニ居リ以テ彼ノ術穽ヲ脱スルニ在ノミ、仁者ノ天下ニ敵ナキ所以ハ特ニ此ニ在ノミ、之ヲ能行ハン者ハ独リ　見龍ノ大徳ニ存ス、凡ソ　見龍ノ性ハ剛健忠順ニシテ寛柔ヲ以テ能正シキ人ト其言トヲ納ルニ在、是ナレハ天ヨリ祐クル所往トシテ行ハレサルナシ、使節ハ先遣ハスハ薩ノ海枝氏ノ如キヨカルヘシ、窃カニ見ル所有後ニ発遣スルハ親王家ヲ戴キ、大賢者ヲ撰之ヲ輔クルニ在、凡テ被髪廃刀ノ人ヲ禁ス、真ノ日本人ヲ用ユルニ非レハ外ヲ服スルニ足ス、使節ノ鹵簿ハ都テ従前ノ諸侯ノ儀仗ヲ用ユルヲ妙トス、其発遣ニ臨テハ頗フル説アリ、

夫善隣国之宝也左伝、我先屈シテ忠恕ヲ行フ、一隣服スレハ諸隣漸クニ服ス、服スレハ与国トナリ、怨ムレハ敵トナル、是善隣ノ国宝タル所以也、与国日々ニ増ハ我威ノ外ニ張所以ナリ、徳我方寸ニ発シテ威海外ニ張、是凡庸ノ見ル所能ハスシテ、日月ト合徳ナル者ノ独リ能スル所、他人ノ害ヲ生スルハ利ヲ　見龍ニ献スル所以也、凡ソ夷人ノ愛スル所ノ最トスルハ石炭也、之ヲ奪ヘハ彼一歩ヲ進ムルコトヲ得ス、世界中ノ石炭ヲ堀ヲ禁スル、一国ノ力ラノ能弁スル所ニ非ス、故ニ善隣以テ其価ヲ貴クシ、其物ヲ漸ク減ス、各国己レニ利アルヲ知テ悦服セサルハナシ、為仁由己由人乎、天下ノ利トナルコトヲ善隣ヲ以テ開キ、害ヲ除クコトヲ己レノ人ト相親ムニ由テ行フ人ノ服不服ヲ顧リミルニ遑アランヤ、是己レノ忠恕ノ徳ニ由テ之ヲ行フ、何ソ人ノ忠恕ノ有無ニヨリテ之ヲ得ンヤ、故ニ善隣ハ威ヲ積ノ基ヒニシテ、其本ハ人ヲ親ムニ在、人ヲ親附セシムルハ忠ニ在、孫子曰、道者令民与上同意ト是也、道ハ礼也、礼ノ条目ハ皆忠恕ノ行方也、明徳ヲ明ラカニスルハ攘夷ノ妙用ヲ天地間ニ普通セシムル也、之ヲ得ルハ中ニ在、故ニ親民ヲ明徳ト至善トノ中間ニ措、

皆理屈ニ非ス、今日ノ一屈ハ明日百伸ノ源也、信ハ水ノ如シ、水源ヲ発シ、立木モ知、又山中ヨリ溪トナリ、澗トナリ、川トナリ、大海ニ入テ大波瀾ノ文ヲ成ス、凡ソ源ヲ発スル者ノ思ヒ蕩々タル、斯ノ如ナラサルナシ、賞罰黜陟其中ニ存ス、

哺ヲ吐以テ賢者ヲ招クハ己レヲ強クスル道也、愚人ハ権ヲ恃、智者ハ術ヲ恃ム、詩書礼楽ハ聖人ノ四術ニシテ、其ヲ思フ所以ハ己レヲ強クスルニ非サルモノナシ、私ヲ行フヲ柔ト云、無私ヲ行フヲ剛ト云、天地ト聖人トノ妙用ハ唯此ニ存スルノミ、己レノ輔ケヲステ、敵ニ与フ、天下ノ至愚是ニ過ルナシ、

文書原寸　縦一六糎　横一〇七糎

追加一二六ノ三
（端裏書）
「御直覧可被下候」

添書

此書昨日持参仕居候得共、差扣江入　尊覧兼引取候得共、其節筒井之事も被仰聞候間、御笑草ニ外書面共差上候、御用迹御覧流し可被下候、

九月廿日

文書原寸　縦二七・七糎　横一九・五糎

遺二三七　高知県士族仙頭孤桐ヨリ左府公ヘノ建言

清国トノ和戦問題　二通

追加一二七ノ一
（包紙ウワ書）
「奉左大臣島津公閣下　高知県士族　仙頭孤桐」

九月廿日高知県士族仙頭孤桐謹再拝白、左大臣島津公閣下、孤桐向ニ鄙言ヲ奉シ愚衷ヲ陳ブ、失礼ノ罪無所遁恐懼不知所為、然而シテ啻ニ心ニ悔ザルノミナラズ、乃復敢妄言ヲ献シ尊厳ヲ冒瀆ス、孤桐鄙言ヲ奉セショリ既数旬ヲ経レトモ、未タ和戦ノ議ヲ決シ、豪傑ヲ挙ケ精兵ヲ募ルノコトヲ聴カズ、思フニ朝廷ノ廟議既一決シ、上ミ

和戦ノ議ヨリ下モ将士兵器ノ細事ニ至ルマデ、新ニ之ヲ今日ニ講スルヲ待ズシテ、既ニ之ヲ昔日ニ断スルヤ久カラン矣、然ルニ天下ノ人匹夫匹婦ニ至ルマテ、皆企首西望シテ和戦ノ決ヲ大臣ノ一報ニ待ツ、而シテ之ヲ道路ニ聞クニ、廟堂ノ君子亦然矣ト、豈夫然ランヤ、豈夫然ランヤ、堂々タル大臣諸公ト済々タル文武将士トヲ以テ、何為ゾ如此ノ軽挙妄動センヤ、然ト雖廟議和講ニ在ル欤、上ハ敵国ノ旗章ヲ万民ニ視メスアリ、下ハ団集結隊ヲ請フ者一誥ノ之ヲ止ルナシ、将タ廟議交戦ニ在ル欤、大ハ豪傑未挙精兵未募王愾ニ敵ス可キ者ヲ見ズ、此ヲ以テ之ヲ視レバ、則道路ノ説疑ナキ能ハズ、然バ則孤桐閣下ノ為メニ痛哭スルノミナラズ、天下社稷ノ為メニ流涕長大息ニ堪ザル也、婦人ノ錦繡ヲ織ルヤ、先ツ黒白文章ヲ定メ、而后機杼ヲ施ス、衣服ヲ制スルヤ、先ツ長短広狭ヲ決シ、而后之ヲ裁断ス、若否シテ織、而后文章ノ己ガ心ニ適シ、裁而后長短ノ己ガ体ニ合センコトヲ求ムルニ至テハ、其成功ヲ視ル能ザルノミナラズ、千金ノ錦繡ヲ変シテ断片破布ト為ザル者アラザル也、故曰、前慮定ザレバ後有大患、況ンヤ国家ノ存亡和戦ノ大事ニ於ケルヲヤ、朝廷未タ和戦ノ議ヲ決セズ、猶大臣ノ口舌ヲ恃ム、何ゾ三千余年ノ帝国ト三千余万ノ人民ヲ視ルコトノ軽易ナルヤ、彼我ノ曲直、内外ノ是非ハ姑ク措テ論セズ、我帝国今日ノ勢、戦ヲ以テ滅亡ノ媒トスル欤、徐鉉三寸ノ力ヲ以テ南唐ヲ口舌ノ上ニ保スル能ザル不可不鑑也、将タ戦ヲ以テ富強ノ階トスル欤、湯武ノ牛羊黍稲ヲ以テ葛伯ノ罪ヲ盈シメ、而シテ之ヲ征スル不可不察也、不戦ヲ以テ滅亡ノ媒トスル欤、鴻溝ノ盟ヲ破リ西轅ノ兵ヲ還シ、東シ楚ノ師ヲ討ツ不可不謀也、将タ不戦ヲ以テ富強ノ階トスル欤、合従ノ約ヲ結ビ、関東ノ兵ヲ連ネ西彊秦ヲ拒ク不可不謀也、此数人者或ハ国ヲ亡シテ醜声ヲ千載ニ伝ヘ、或ハ国ヲ興シテ芳名ヲ万年ニ流ス、天ノ此ヲ偏愛シテ彼ヲ偏悪スルニ非ザル也、唯人心ノ所向形勢ノ所在ヲ審スルニ在ル而已、夫徒ニ曲直ノ有非ヲ論シ、是非ノ黒白ヲ争ヒ、而シテ彼我ノ形勢ヲ察セズ、内外ノ人心ヲ顧ミズ、

一時ノ無事ヲ粉飾セントスル者、怯懦ノ徒ニシテ忠誠ノ士ニ非ラズ、所謂之ヲ言バ口舌ヲ汚シ、之ヲ筆スレバ簡牘ヲ汙ス者也、今日人心ノ所向形勢ノ所在以テ可戦トスレバ、則何ゾ速ニ豪傑ヲ挙ケ精兵ヲ募リ、彼ヲ圧スルノ計ヲ為ザル、然ト雖兵者凶器也、戦者逆徳也、句践夫椒ノ敗不可不鑑也、以テ不可戦トスレバ則何ゾ速ニ贖金ヲ出シ、土地ヲ割キ首唱大臣ノ頭ヲ斬ザル、然ト雖王安石ガ取ントスレバ先之ヲ与フト言也、河東七百里ノ地ヲ失ヒ、終ニ取ル能ザル不可不察也、若孤桐ノ愚見ヲ以セバ贖金決シテ不可出也、土地決テ不可割也、首唱大臣ノ頭決シテ不可斬也、若此三者ヲ行バ則蕭墻ノ変・腑腋ノ難、瞬目ノ間ニ蜂起センコト、知者ヲ待テ而後知ザル也、何ナレバ則我帝国開闢以還大義ノ明ナラザル、人心ノ軽薄ナル今日ノ如キ已甚者有ザル也、孤桐請其一二ヲ言ン、壬申ノ災主上遷テ離宮ニ在ス、万乗ノ尊ニシテ衛公ノ漕ニ盧スルガ如シ、而ルニ大臣ノ邸宅ヲ観レバ輪焉奐焉、実ニ人目ヲ驚ス、大臣ハ天下ノ所具瞻ニシテ、而如此人情ノ軽薄ナル、何ゾ怪シムニ足ン、学士先生ハ天下ノ標準ニシテ後生ノ師表也、然而シテ共和政治ヲ唱ル者アリ、洋教ニ惑溺シテ国恩ヲ忘ル、者アリ、大義ノ明ナラザル職トシテ之ニ由ル、加之外敵国ノ驕傲ニシテ内兵備ノ完全ナラザル、国用ノ空乏ニシテ冗費ノ不貲ナル官員ノ奢侈ニシテ、誠実ナキ人民ノ怨畔シテ心服セザル、土崩瓦解ノ兆明ナリト可謂矣、而シテ猶区々尋常ノ策ヲ以テ不測、非常ノ大難ヲ掃ハントス、豈難ザランヤ、良医ノ極患ヲ治スルヤ、必ズ峻劇ノ薬ヲ駆使シテ膏肓ノ鬼ヲ瞬息ノ間ニ掃攘ス、日ニ焦悴シ月ニ衰弱スルノ人ニ臨ミ、尋常ノ方剤ヲ投シ、治功ヲ歳月ノ久キニ収メントスルニ至テハ、扁鵲ト雖為ス能ザル也、故曰、贖金決テ不可出也、土地決テ不可割也、首唱大臣ノ頭決テ不可斬也、速ニ戦議ヲ決シ、豪傑ヲ挙ケ、精兵ヲ募リ、全国ノ士民ヲ駆テ必死不生ノ中ニ入レ、同舟逢風ノ地ニ投シ、而テ問罪ノ師ヲ挙ケ、無礼ノ名ヲ声ラシ、南京ヲ取リ、北京ヲ抜キ、広東西ノ野ヲ蹂躙シ、内チ国患ヲ攘ヒ、外武威ヲ万国ニ

顯揚センコト、此ノ一挙ニ在矣、此之ヲ察セズシテ、国家ノ存亡、和戦ノ大事、尽ク諸ヲ大臣ノ口舌ト敵国ノ動静トニ決シ、可戦ノ勢ニ居ルモ戦ハズ、不可戦ノ勢ニ居ルモ亦戦バ、神祖在天ノ霊、聖君愛民ノ心、其之ヲ何トカ言ンヤ、且忠臣報国ノ道、智者撥乱ノ策、豈之ヲ以ヲ以テ満足トナス可ンヤ、請閣下少垂察焉、閣下ノ未出ヤ、天下ノ人皆曰、島津公出スンバ朝廷蒼生ヲ如何セント、出ルニ及デヤ児童走卒モ皆説テ曰、島津公出焉国威可振也、蒼生可安也ト、今ニシテ乃チ如此天下ノ民誰ニ因テ蘇息センヤ、孤桐眇々ノ身ハ固ヨリ之ヲ溝壑ニ期ス、唯顧念シテ不能已トコロノ者ハ上之天王アリ、下之父母アリ、豈啻孤桐ノミナランヤ、天下皆然矣、

冊子原寸　縦　二四糎　　包紙原寸　縦二四糎
横一六・五糎　四枚　　横三三糎

追加一二七ノ二
（包紙ウワ書）「奉

左大臣従二位島津公閣下

高知県士族
仙頭孤桐」

南海道高知県士族仙頭孤桐謹奉書左大臣従二位島津公閣下、孤桐頃ロ道路ノ風説ヲ聴ニ、支那政府我神州ヲ軽蔑シ、我人民ヲ陵侮シ、我都督公ニ迫リ我在台兵ヲ駆リ、遂其搏噬ヲ我八十州ニ逞セント欲スト、是実匹夫匹婦ノ愚モ切歯憤懣ニ堪ザル所、況ンヤ心志アル者ニ於テヲヤ、孤桐草莽ノ鄙夫廟議ノ所在不可知ト雖、　皇帝陛下ノ聖ナルト大臣諸公ノ賢ナルト、何ンゾ甘シテ此ノ開闢以還未曽有ノ大国辱ヲ受ケ、祖宗在天ノ神霊ヲ今日ニ羞シメ、祖宗所託ノ国体ヲ当代ニ汚サンヤ、然ト雖我ヨリ好テ兵端ヲ開キ戦争ヲ喜ニ非ズ、彼自ラ失礼ノ罪ヲ謝シ、贖罪ノ金ヲ献シ、豺狼在野ノ心ヲ捨テ、兄弟同情ノ誠ヲ効バ、則旧盟ヲ尋キ隣交ヲ修ンコト固ヨリ言ヲ待ズ、若天其衷ヲ不誘シテ版図ノ広大ヲ恃ミ、人民ノ衆多ニ驕リ、敢テ

無礼ヲ我ニ加ントセバ、則六軍ヲ挙ケ其罪ヲ問ザルヲ得ズ、然バ則我神州実ニ危急存亡ノ秋ニシテ、有智者ハ之ヲ謀リ、有勇者ハ之ニ死シ、三千年来ノ国恩ヲ九牛ノ一毛ニ期ベキノ時也、而ルニ孤桐智ハ菽麦ヲ弁ル能ハズ、勇ハ賁育ヲ追フ能ハズ、徒ニ焦心傷慮上之周室婺婦ノ所恤ヲ恤イ、下之魯国処女ノ所嘯ヲ嘯キ、夜而寝ネズ、食而甘セズ、転輾座起狂スルガ如ク酔ルガ如シ、已而慨然自奮曰、古曰、狂夫ノ言聖人択焉、今日ノ事孤桐ノ愚ノ怯ト雖黙々スル能ハズ、且忌諱ニ触レ罪過ニ陥ルモ可避ノ時ニ非ズ、孤桐窃ニ今日ノ事ヲ観ルニ二条ノ解セザル者有リ矣、曰、人心ヲ収ザル也、曰、精兵ヲ調セザル也、夫人心ヲ収ムルハ豪傑ヲ挙ルニ在リ、精兵ヲ調スルハ冗兵ヲ汰スルニ在リ、所謂豪傑也者誰ゾヤ、旧参議等ノ如キ是ナリ、所謂冗兵也者何ゾヤ、当時点検スル所ノ三民兵是ナリ、旧参議等ノ前日ニ在ルヤ、力ヲ王室ニ効シ、心ヲ国事ニ尽シ、外ハ万国ノ侮ヲ禦キ、内ハ八十州ノ乱ヲ撥ス、一朝議論合ハズ、草莽ニ退居スルニ及デ、此ニ其論ヲ種殖シ、彼ニ其説ヲ蔓延シ、隠然一敵国ノ勢アルハ、則憤懣不平ノ余、或ハ間暇髀肉ノ歎ニ出ルト雖、是此豪傑ノ常態耳、譬バ千里ノ馬徒ニ廐中ニ飽食セシメ、旬月ノ久シキ之ヲ用ザレバ、則莽踶跳躟槽櫪ヲ破壊シ圉人ヲ傷クル者比々皆然矣、馬ノ罪ニ非ザルナリ、主人ノ過也、若朝夕駕シテ之ヲ馭レ、則莽踶破壊ノ虞ナキノミナラズ、又一瞬千里ノ楽アリ、況非常ノ時ニ臨ミ駆テ之ヲ馳セ責ルニ、千里ノ任ヲ以セバ、則其恩ニ感シ力ヲ展ヘ希世ノ功ヲ奏センコト、知者ヲ待テ而後知ザル也、且人心ノ豪傑ニ従フヤ蜂蠆与螻蟻ノ如シ、蜂蠆ノ飛ヤ、一大蜂東飛スレバ衆小蜂従テ東ス、西スルモ亦如此、螻蟻ノ走ヤ、一老蟻南走スレバ衆少蟻従テ南ス、北スルモ亦如此、故ニ人心ヲ収ムルハ豪傑ヲ挙テ方向ヲ与フルニ在リ、然而シテ措テ用ヒズ捨テ問ハズ、人心ヲ収ムルノ道ニ於テ失セリト謂ベシ矣、点検スル所ノ農工商ノ如キ、已ニ進退撃刺ノ素教ナク、復敵愾武悍ノ気象ニ乏シク、廉恥ノ何物タルヲ聞カズ、銃剣ノ何用タルヲ知ラズ、平

生耳目ノ視聴スル所ハ、惟糸竹ノ声ト耒耜・算子ノ器トノミ、之ヲ集テ弾丸ノ中ニ奔走シ、銃剣ノ間ニ駆逐セシメバ、其降北センコト三尺ノ童子モ所能知也、士族ノ如モ亦昇平ノ余解職ノ後、風習ノ衰弱ヲ極ムト雖、其中ニ遴選シ桀ヲ抜キ、勇ヲ択バ農工商ニ勝ル万々ナラン矣、且兵ハ精ニ在テ多ニ在ザルハ喋々ヲ待ズ、譬バ査樓ノ上徒ニ俳優数十ノ多ヲ貪リ、或ハ侏儒技芸ノ巧拙ヲ問ハズ、之ヲ観客ノ中ニ猟取シ、之ヲ粉黛ノ色ニ文飾スルモ、俯仰舞踏ノ音調ニ合センヲ求ルニ至テハ、未嘗跋躓シテ転越ゼサル者有ラザル也、然而シテ三民ノ弱兵ヲ駆リ四百州ノ大敵ヲ討ント欲ス、冗兵ヲ汰シテ精兵ヲ調スルノ策ニ非スト可謂矣、是以孤桐窃以為ク、今日ニ在テハ常法ニ拘シ旧株ヲ守ヲ得ズ、断然非常ノ決ヲ以テ速ニ豪傑ヲ用ヒ精兵ヲ調シ、内ハ天下ノ人心ヲ収メ、外ハ勇悍ノ兵隊ヲ結ビ、大使ノ一報ニ従イ、直ニ黄海ヲ乱リ北京ニ入リ、牛尾頭ノ膽ヲ破リ十八省ヲ蹂躙シテ其罪ヲ問フノ策不可不速也、若否シテ因循無断機已ニ去リ、事又迫ルニ及ヒ、而後豪傑ヲ挙モ、人心ヲ収ムルノ道ニ於テ已ニ晩矣、而シテ豪傑モ亦謀ル能ハズ、精兵ヲ調スルモ冗兵ヲ汰スルノ策ニ於テ已ニ後矣、而シテ精兵モ亦之ニ戦フ能ハズ、是乃天下古今ノ通患ニシテ、歴史上星羅森列スル所以ナリ、抑二卵ヲ以テ千城ノ将ヲ捨テ、三民ヲ集テ不教ノ兵ヲ戦ハシ、人民ヲ死亡シ国用ヲ耗竭シ、歳月ノ久シキ変之又変内外ニ紛起センハ閣下ノ能ク知ル所ナリ、孤桐ノ寒心不能已トコロ也、孤桐未嘗一モ閣下ノ謦欬ヲ奉スル有ラズ、卒然閣者ヲ犯シテ尊威ヲ冒瀆ス、罪実無所逃、惟願ハ閣下江海無量ノ包容ヲ垂レ、杞人憂天ノ至誠ヲ憐察センヲ他非所敢望也、孤桐恐惶再拝、

冊子原寸　縦　二四糎　横一六・五糎　四枚　　包紙原寸　縦二四糎　横三三糎

邊二六　山本復一ヨリ安田轍蔵へ　二通

支那事変報告

追加一二八ノ一

長崎友人某より小生へ申越

上海九月十七日発、上野某之書状抜萃

今日天津より之来簡ニ、北京之御談判未決ニハ候得共、十ニ九は戦ト申越候、又今日之申報ニ、新彊之士兵沸騰西阿城ヲ攻城、兵四百戦死、其余ハ魯之地へ敗走、右ニ付北京より出兵セシ様子、又此頃寧波辺ハ日本ノ為メ兵ヲ備、当港之川下呉松江ニハ炮台ヲ築、一昨日兵五百出張、此外揚子江南北、鎮江焦山、南京江陰等皆砲台ヲ築立、専防戦之用意ノミ致居候、

文書原寸　縦一六・二糎　横四二糎

追加一二八ノ二

（封紙ウワ書）「安田轍蔵様　山本復一」

只今別紙之通申参候間、書抜キ差出候、

左府公ハ此義御承知ニ候哉否、不取敢先生迄差上候間、御あげ可被下候、匆々、巳上、

十月二日夜半

文書原寸　縦一六・二糎　横三一・五糎

遺三九　田中海山ヨリ左府公ヘノ内願

公ノ動静伺ニ付

（包紙ウワ書）「呈上　極御内々　田中海山」

（封紙ウワ書）「呈上　極御内々」

今般

貴大臣閣下

御国家ノ為至大至重ナル至仁ノ御建言被奉候由、誠ニ御国家ノ大幸ト謹テ奉恭祝、此上ハ定テ不日ニ至当ノ御勅裁ヲ垂サセラレ玉フト雖トモ、若又要路ノ臣等不誼ヲ謀リ奉蓋

叡明候哉モ難計ニ付、自然臨機ノ事変モ相見候ハヽ、何時モ御内命御投与可被遊下候様奉歎願候、

十月廿六日　　田中海山　敬拝

貴大臣公
閣下

二敬白、此以後時々　拝謁願上候モ憚多有之候間、以来ハ成リ丈御側近習ノ御方迄願出候間、兼テ其姓名御内示被遊下度、是又奉願候、

文書原寸　縦一六・七糎　包紙原寸　縦二四・二糎
横四八・五糎　横三二・五糎

邊二三〇　海軍拡張論　筆者不明

夫レ国ヲ護ルノ兵ヲ以スルハ何ヤ、外侮ヲ受ケズ内慢ヲ来サス、其国体ヲシテ永久確立ナラシムルヲ以テ也、治世ト雖モ苟モ戦ヲ忘ルレハ、其禍ヲ来シ其侮ヲ招クノ憂アリ、其国ヲ辱メ其国ヲ滅スノ患アリ、故ニ国ヲ維持スル者、治乱其兵備ヲ厳ニセザルベカラス、抑我国往年ハ開鎖其方ヲ異ニシ、都鄙万国ノ動静ヲ知ラス、或ハ攘夷ノ説ヲ起シ、或ハ鎖国ノ論ヲ主張ス、今ヤ時勢変遷人心異趣、偶々攘夷鎖国ヲ唱フル者アレハ則斥之、猶昔日ノ開港、尊
王ヲ説ク者ノ如キ也、何トナレハ皆此レ各国交際ニ因テ其耳目ヲ新ニシ、其見聞ヲ広スル為メナリ、故ニ各国ニ交ルヤ、愈々信義ヲ厚シ益々親睦ヲ加ヘザル可カラス、其信義ヲ厚フスルヤ阿諛佞媚ヲ以テス可カラス、巧言令色ヲ以テスベカラス、之ヲ厚スル法アリ、曰、海軍之レナリ、蓋シ国ニ立・行・司ノ三法官アリト雖モ、海軍不張則其権理ナシ、故ニ開国ト雖モ或ハ軽蔑不敬ノ意ヲ起シ、頑国ハ必ス倨傲不可忍ノ挙ヲ為シ、我正理ヲ以テ百方論弁スト雖モ明了ナラシムルコト能ハス、於是乎其交際忽チ破断シ、前日ノ信義復タ不可見、却テ彼カ蹂躪蚕食ノ暴喙ヲ逞フセシムルノ階梯トナル、是レ兵備ヲ以テ信義ヲ深シ、交際ヲ厚フセザル可ザル所以ナリ、故ニ曰、国ヲ維持スルハ兵備ヲ厳ニスルニ在リ、兵備ヲ厳ニスル

ハ海軍ヲ張ルニ在リト、伏テ惟ルニ、
皇国ト英国トハ洋中孤立ノ国ニシテ、勢海軍ヲ拡張盛大セザル可ラザルノ地形ナリ、是故ニ英ニ於テハ万方苦辛今日ノ海軍各国ノ巨擘タリ、其拡張盛大ノ極、万国其語ノ不通ナルコトナキニ至ル、是我国ノ模範タル所以ニ非スヤ、然ルニ方今我海軍費ヲ比算スル、僅ニ陸軍費ノ四分一ニ不充、其常備ヲ数フルニ八艘ノ一艦隊ニ不過、如此微々タル海軍ニシテハ自侮而人侮之ノ憂患ヲ醸成シ、或ハ倨傲軽蔑ノ罪ヲ問フ能ハス、況ヤ彼我接戦局外中立等ノ事有ルニ於テオヤ、是レ臣等ノ管見所以俯憂仰患ナリ、夫レ政ニ緩急軽重ノ序アリ、歳出入ノ得失国債ノ多寡ニ因テ軍費厚薄ノ御廟算ハ側知ス可キ所ニ非ス、然レトモ今日ニ当テ苟モ海軍御興張ナクンバ、則恐クハ第一万国御交際ノ長短利弊ニ管シ、国是ノ存亡安危ニ係リ、第二現今ノ艦船其齢可衰、自今ノ将校其才難得、日々頽敗ノ姿ニ至リ、所謂有名無実ノ海軍ニ推移センコトヲ、故ニ前顕ノ是非得失御洞察、速ニ於正院一層御興張ノ御再評ヲ以テ治乱其備アリ、国体永久確立之大基礎被為建度、非才之微衷不憚忌諱謹テ陳述ス、伏冀クハ両閣下ノ賢断ヲ仰ク而已、誠恐頓首、

文書原寸　縦一七・八糎　横一四九糎

遺二三　田上一英ヨリ久光公ヘノ建言

大臣一和ノ件

乍恐内密奉言上候、私儀ハ当時原至和（山口県士族、元陸軍大尉相勤居候由）同居仕居候処、近日山口表之光景何とナク不穏相聞ヘ、既ニ先日抔は右原同県之者と相見ヘ、至急山口ヘ引取事ヲ挙ケ可申抔相語リ居候ヲ、障子ヲ隔而候風カニ相聞申候ニ付、猶又昨年佐賀暴動之様ナル儀共ハ出来仕間敷哉と、懸念之余り不取敢同県之者共ニモ相語り申候処、鹿児島県之儀は西郷先生・桐野先生抔有之候得は、先ツ沈静之模様ニは御座候得共、外ニハ少し完（充カ）動揺仕候県々も有之との事之由ニ御座候、右は未タ確証ハ得不申候得共、禍ハ機微ノ間ニ塞キ不申而ハ難制之勢ニ立至可申、依之為

御含内々奉言上置候、惣し而天下変革之時ニ方りテハ人心ノ不居合ヨリ種々之沸騰ヲ生シ可申ハ素ヨリ当然ニテ、却而後日治定之基礎共相成可申候ヘハ、当路之諸君子何ゾ恐愕被致候筋ニは有之間敷候得共、昨年モ種々之大事件有之候末ニテ、財用之減耗、国本之衰弱、実ニ可憂之至ニ奉存候処、猶又大事ヲ醸候而は、譬ヘハ虚弱之病体ニ度々劇剤ヲ披シ候様ナル者ニテ、中々不可堪之勢ニ立至り可申、実ニ可懼之事共ニ奉存候、此時ニ際シ小臣区々之微衷唯々所願ハ大臣之一和、諸吏之精忠、一点之私心ナク、何事モ再三再四廟議ヲ凝シ、大中至正立天地而不戻質思神而無疑ト申処ニテ御施行被為在候而、縦令ヒ一二議之不合アリトモ、沸然トシテ職ヲ辞シ、退而後言スル等之事無之、所謂広ク衆議ヲ尽シ、万機公論ニ決スル之　御誓文ニ基キ、上下同治之御基礎一定仕候ハヽ、其御精神自然ト下々ニモ貫徹仕、人心之動揺モ不制シテ自ラ止ミ可申ト奉存候、自古人心之動揺多クハ上之不和ヨリ陰ニ醸候事ニ御座候ヘハ、是亦可懼之一大事ニ御座候、大臣一和、諸吏精勤、上下同治之御基礎一定仕候時ハ、民撰議院之制、法教之禁、及ヒ国内旅行雑居、太樺境界等以テ可許ハ則チ許シ、以テ可起ハ則チ起シ、凡ソ千差万別之功用経綸モ随テ可旋候得は、区々人心之小沸騰、何ソ可怖哉ト奉存候、右は実ニ愚蒙之妄言奉瀆　尊覧候儀、恐怖之至ニ奉存候得共、憂国之至情何分難黙止　御病床ニ付以書取奉言上候、狂妄之段ハ偏ニ御寛恕被遊被下候様奉伏願候、頓首百拝、

明治八年
第二月三日　　田上一英

文書原寸　縦一九糎　横二五六糎

塙三三　秋田県士族小松弘毅ヨリ海江田信義ヘ九経衍義ヲ左府公ノ御覧ニ供スルノ件

（封筒）
「海江田信義殿　閣下」

（封筒ウラ）
「秋田県士族小松直之進父隠居
第一大区三小区楢山本新町下
町四百五十二番地
小松弘毅　拝」

緘

東京府寄留茂木大助ニ付属し恭呈、大素日増春和愈
御清穆奉恐賀候、僕并豚児直之進碌々尾主、乍憚御放慮奉仰候、
久々御動静不奉御伺失敬御海涵奉願候、扨此度九経衍義
愚輯録壱冊拝呈仕候故、
左府公江御進覧被遊下度奉御願候、去夏中建白は事件も
此九経衍義愚慮中より抄出指上候ニ而、再之を瀆候筋ニ
候得共、実ニ愚慮徹底之尽力を認候事故、当節弥々甚敷
時柄ニ付奉汚電覧度奉存候、併決而達者より大観候得は、
井蛙簡間ニ而不免憂天墜之筋ニ候得共、兼而至愚之稟性
達者之一言を以て杞憂を癒之良薬を奉召承度奉存候、若
千々万々可期望事ニは兼而無之候得共、
天覧ニ被為触事にも奉存候ハヽ、誠ニ畏縮之至ニ奉存候
得共、此壱冊御斧正被遊下、御近侍様方ニ而御書直し御
進奏被遊下候得は、僕生前之望不過之と奉感泣候、且又
愚慮之内西洋説へ関する事件有之ニ付、御不審等被為在
候ハヽ、御催促次第上京可仕候、僕斯愚樗材四ヶ年以前退
隠世外之徒ニ候得共、時勢之切迫不忍見、又々不顧前後
建白仕候、宜御周旋之程奉願候儀ハ後鴻万々可申上候、
恐々拝、

三月十九日　　小松弘毅
拝

海江田信義公
閣下

文書原寸　縦一七・二糎　封筒原寸　縦二一糎
横六七・八糎　横　九糎

追加一三三　熊谷県士族大島亨ノ時事慷慨意見　二通

久光公ノ左右へ

（包紙ウワ書）
「上　熊谷県貫属高崎住
大島亨」

追加一三三ノ一

此愚存当三月中江湖新聞中江投スレ共、世人其固陋
ヲ詈リテ答書ナシ、

僕嘗テ清人ノ訳スル邪蘇創生記ヲ閲スルニ、所謂我日蓮一代記ノ如クニシテ、其説取ルニ足ル者ナシ、然リト雖西人之ヲ尊ム君ノ如ク、之ヲ親ム父ノ如キハ何ソヤ、表ニ愚ヲ示シテ裏ニ智ヲ施トキハ世人ノ畏ル、所トナル、抑邪蘇ナル者、其信意ヲ行フ者カ国法自主ノ権利ヲ免スモ、彼ノ教法却テ十戒ノ約ヲ立ツ、我皇国ノ如キ教ニ三道アリテ民ニ四類アリ、当時識者ノ笑トナル、然リト雖モ僕亦識者ノ笑ヲ笑フ、識者云フ、共和ハ人道ノ公理、自主ハ人事ノ至情ト、此言以テ我

皇上ヲ憚ラス以テ国脈ヲ罔スルニ至リ、開化ニ英ノ開化アリ、米ノ開化アリ、各国亦各国ノ開化アルヘシ、然則我皇国ノ開化アルコト論ヲ俟タス、今我皇国ニシテ共和ヲ唱レハ国体ヲ乱リ、自主ヲ唱レハ国乱ヲ醸スヤ必セリ、或曰、共和ノ国体ヲ乱ス聞コトヲ得タリ、自主ノ国乱ヲ醸ス、未タ其説ヲ得ス、曰ク、皇国ノ所謂ル士ナル者、其因襲ノ久キ其功労ノ多キト論ヲ竣タサルナリ、之ヲ他ノ三民ニ比スレハ、譬ハ魚ト鳥トノ如シ、今魚ヲシテ地ヲ鳥ニ変シメ、鳥ヲシテ地ヲ魚ニ変シメントス、其間一時ノ活ヲ得ル者、魚ニ鰻アリ、鳥ニ鴨アルノミ、他ハ信ニ哀ム可キノ甚シキ物トス、先時朝庭士ノ定職ヲ解キテ今亦其禄ニ及ハントス、士モ亦其素食ニ恥テ自ラ三民ニ至ラントス、朝庭三民ニ自主ヲ免シテ三民亦官途ニ臨マントス、士三民ニ帰サハ資業前日ニ反シ饑餓乞丐ニ至ラン、三民官途ニ望マハ甫田芒々家産傾排セン、其名甚美ニシテ其実悉ク失ハン、夫皇国ノ万国冠絶スル所謂ノ者、皇統ノ隆ト士人ノ節ト三民ノ直ト国産ノ美トニ拠ル焉、若シ共和ト自主トヲ主張セハ、恃ニ国体ヲ損害スルノミナラス、一意尊　王ノ美俗ヲ失ヒ、終ニ以国力ヲ荒センコト日ナケン、然ハ則之ヲ救ノ術果シテ如何、曰ク、儒仏ヲ抑エテ神教ニ遵守シ、三民ヲ抑エテ士人ノ節ヲ揚ケ、神教以テ国体ヲ張リ、節義以テ国事ニ死セシム、二事明ニシテ後三民各其業ニ勉メハ、国自ラ強ク、国自ラ富マン、是我皇国ノ開化ニシテ各国ニ異ナル所謂ノ者ナリ、然ルニ識者ノ論ノ如キ国家乱賊邪蘇ノ術中ノミ、斯ク頑

論ヲ唱ェ江湖諸君ノ質正ヲ乞フ者、熊谷県士族大島亨

冊子原寸　縦二三・八糎　横一六糎　三枚

追加一三三ノ二

口言ハんとしてしるす能ハさる者ハ文ノ拙なるなり、言て其当を得さるハ心の愚なる也、其愚拙を知て言ハさる可からさる者将何物たる、野人素より礼節を知らす、係る高貴之御邸をも不憚、忽然嗚呼ヶ間敷義申上候而は深恐縮ニ御座候得共、只々其愚昧之惰性御洞察被成下候ハ、幸甚不可過之、抑方今世上之形様篤ト熟考仕候処、名は開化ニして其実返而不開化を醸し、名は文明ニして其実亦文明ニも非す、外様軽薄今日ニ極り、各図算之開化を唱て頻りニ御国威を損害する事甚多シ、就中洋学者福沢諭吉なる者信ニ其巨魁ト可申哉、其無礼何物たる罪之族ニ及候共可ならん欤、愚臣過日朋友中蔵書之内同氏抄出童蒙をしへ草巻之二三十九葉猴猴の仲間之偶言に見て歎息ニ不堪、依之聊左ニ其由を云フ、

猴猴の仲間に共和政事を立てしか何れも満足する事を知らす、早々に心変して自主自由之風を厭ひなと申して、其政事の様を変んものをと思ひ、乃チ雷の神なる木星念し、我仲間に王たる者を下し給へと祈りけり、木星も兼而慈悲深き神なれハ、成丈猴猴のために災害の少からんことを思ひ、一片の木の切れを天より送り、これを汝等か王に定むへしとの命に由り、猴猴等ハ大ニ悦ひ、この木の切れを王の位に奉りて頻りにこれを敬ひ貴ひしか、漸くこれに慣れ、王の心の温和なるをよきことにして、最早敬ふ心もなく、次第になれ〳〵しく近つき、遂にハこれを侮り、斯る者ハ我仲間の王に為置き難しとて、更に又木星に請ひ、別に王たる者を下し給へと願ひけれハ、木星もこの度ハ怒り給ひ、さらハとて五位鷺を遣したり、五位鷺ハあまたの猴猴に君とし臨ミ、位に即きし其日より配下の者を捕へてこれを喰ひ、大ニ国中を悩ましけれハ、猴猴の難渋ハ以前ニ百倍しとハ思ひの外の事なりとて、又木星に訴てこの度の王をも取替たまへと歎願した

れとも、木星ハ最早この歎願之次第を聞入れすして云く、汝等か訴る所の歎願ハもと汝等か無分別より自ら招きし禍なれハ、自ら堪忍するより他に方便あるへからすと共和ハ公理、立君ハ私理の意現然たり

右寓言を抄出して皇国の童蒙を教けるなる、何等之乱法、何等の国賊、抑木の切れ、五位鷺なる者講説する、此ハ皇国中何方様江相当り可申哉、具眼の者其論ある可からす、右教草々生長之小児後来何等の獣心挾み可申、是必然之義と奉存候、然るを当時彼の民を御尊崇被為在候哉、御学則中同氏の箸相見へ申候由、霜を履て堅氷至るとか古人も申候通、乍恐後来　天皇様如何被為在候哉、我皇国を何れニ被為遊候哉、其事小なれ共其係る所尤大ならん、日夜切歯落涙之外更ニ他事無し、仰て天に訴すれ共天言す、伏而地ニ訴すれ共天亦云す、今皇国中　閣下を置て誰人ニ欤訴へん、依て今般遙ニ推茂仕区々の素情言上仕候間、愚臣か情性篤ト御洞察被成下候様仕度、　閣下天下執事衆迄呈上仕候、以下愚存書一連、他は口演を以信情申述度、悃々之至りニ不堪、謹而上言如斯ニ御座候、

謹言、

熊谷県貫属
土族
高崎住
大島享

島津従二位公
御内
御執事御中

冊子原寸　縦二五糎　横一七糎　四枚

包紙原寸　縦二五・五糎　横　三一糎

遠三三　旧秋月藩士吉田一貫斎ヨリ伊集院九郎へ

久光公西郷大久保ト不和ノ風聞ニ付

幸便ニ付熊(態)ト啓上仕候、春陽発生之節御座候処、其君上益御機嫌能天下之恐悦有志ノ者仰処ニ候、次ニ尊公御勇健御勤仕奉大賀候、然レハ先頃ハ一日万機之憚ヲ顧ス建言恐入奉存候、其末又々打重建白仕度、実ハ光然ト大政官ニ建白之文ニ相記候得共、窃ニ当時ノ御政体ヲ伺候得ハ、其

君公ノ外ハ愚存ト相違ノ事而已、万一モ寸益有之間敷、

其上建白之規則モ不案内、且一身之罪戻ハ勿論覚悟之前ニ候得共、取次頼候人ニ卒忽之譴責等有之候而ハ心底易カラス、登京モ力ニ及申サス、

君上御内覧被成下候得ハ心底相済候ト奉存、御手元様迄差出申ニ実等ヲ踰固陋ヲ憚ラス恐入候得共、当時ノ形勢傍観スルニ忍ヒス、慷慨悲憤止コトアタハズ、宜御扱取可然御披露、伏而奉倚頼候、夫天下ノ人才ハ限リ有、英明ノ君モ輔翼手足無レハ成功難ハ古今必然ノ通患ナリ、当時西郷・大久保ノ二氏ハ天下ノ撰ニシテ、虚実ハ知ス、君公ト不和ナリト、万然ラハ天下安危ニ関係スルノ大事、存亡ノ機ニシテ細事ニ非ス、御同藩ト云御手元方専御用施御尽力有ンコト急要ノ先務ナルベシ、決テ等閑ノ事トスベカラズ、勿論賢慮有ル有ン、伝聞ノ侭敢言ス、宜御海恕有ンコトヲ祈願ス、噫赫々タル神州天祖天孫ヨリ連綿タル政教、共和ノ無君無父邪政ニ致サレ、

皇統皇国危殆ノ兆有傍観スル時ニ非、今頼トスルハ其君公而已、依而寸志ノ愚衷ヲ述、万一ニモ輔助タランコトヲ祈リ願ノ外ナシ、誠恐実惶百拝、頓首敬テ白、

明治八年三月下旬記ス　　旧秋月藩士隠居　吉田一貫斉

御家令
伊集院九郎様

再啓

本文申上候通、取次人ニ迷惑ノコトヲ恐惶仕故、御手許様迄進達仕候、

君公之尊慮次第　上達シ、万ニ一ツ寸益モ候得ハ、則本意ニシテ一身之罪戻ハ聊厭所御座無候、此段為念申上置候、已上、

文書原寸（折紙）　縦一七・三糎　横四九糎

温二三　浅田宗伯ヨリ斎藤先生へ

久光公ノ近状ヲ問フ

（封紙ウワ書）「斎藤先生　侍史　　惟常　九拝

緘

過日は御籠顧毎々接高論奉感謝、其節御噂之　相公冤角独立ニ而参翼之人物無之、爾後之政令如何ト心配之旨承り込候、定而先生ニは近況委曲御承知可有之、且参議ハ持論区々ニ而一定不仕故、瓦解不日ト申事ニ有之、杞憂何分夢寐不安如何之提文相綴候、何卒痛御斧正被成下、股肱之臣御逢之節御噂被下候ハ、本懐之至、任旧知己杞生之囈語備電覧候、為天下御一閲御弾正呉々も奉希申候、万略頓首、

四月初七

琉球藩王
尚泰

文書原寸　縦一五・五糎　横五五糎

遺二三六　琉球藩王尚泰ヨリ島津忠義公ヘノ願書

対清問題藩制等旧ニ依ルノ訴願

（包紙ウワ書）
「進上
従三位様」

謹御内々奉啓上候、倍御機嫌能被成御上京候由承知仕奉恐悦候、然は当地之儀、朝廷御支配相成候付而は、若哉是迄之規則向被召替儀は有御座間敷候哉、素より　御高察御座候通海外之孤土専以旧規藩政取行上下安穏相治来、且唐江茂従往古致交通、彼是従先代重大之規模御座候得は、当地江は別条之以御取分、何卒国体制度是迄之通不相替、唐通融向茂無事故最通候様、且此以前西洋各国之船段々渡来、米仏蘭三箇国江は条約等申立難応儀共は致哀訴、何篇蒙御指揮程能取計事静相成居候次第御座候間、西洋人等江茂不差障様御処置相成候方、万端被添御賢慮被下度偏奉仰候、右之趣誠之従御内々申上度、如

斯御座候、恐惶敬白、

四月十五日　　琉球藩王　尚泰

進上
従三位様

文書原寸　縦二一・二糎　包紙原寸　縦二八糎
横五六・三糎　横三九糎

遺二三七　勝姫様御容体書　黒木清盈

勝姫君一夜憎寒発熱振慄、腰脚疼痛、小便頻数、謹拝診之脈浮虚、而数舌上灰白、是外感□(虫損、秋カ)燥之冷気、中気内傷之候、乃奉五積散続兼用真武生脈散熱漸退、小便頻数、亦頓止二三日尚守前方諸症平穏、気力如平常、嘗此君素有肝爵之宿疾矣、豈計哉、一日卒然中焦閉塞、而手足厥冷、冷汗出、是以急転沈香降気湯灸・干中脘気海天枢及足之三里三陰交、前症雖漸愈飲食全不進、精神昏乏、恰如卒中風状、諸医畏縮、而束手以為不可為、僕苟奉司命之職蒙恩寵、若不起何以報之、沈思数回少似有所恃詳之、諸症尤危篤、雖然薬食下咽無痰喘壅塞之患、且大小便分利、是佳兆也、若有薬奏効則有回生干万一乎、作大四君湯奉之佐以帰脾湯精神殆甦脈亦和、雖然舌上黒台乾燥小便短少、是虚火妄動津液枯燥之所致也、当滋化源則愈補中益気湯、加五味子麦門兼用六味丸科小便立快利、舌上亦随而滋和、是以益調進前剤飲食日進、向安可見病之千変万化、又如此裏役頭児玉氏者欣然謂余曰、今以国手之神術、君之大患豁然起焉、憶不日復故乎、余曰、未也、比之于前日則雖頗愈未在十全之事也、嗟如此症実真陽虚脱、加之年高不慎恐有反復哉、今侍医数輩既四十有余月昼夜不離病床、而奉職掌者豈有他哉、是深所以有所慮也、乞思之思之、

黒木清盈謹誌

文書原寸　縦二九糎　横一一三・二糎

追加二三八ノ一

元老院開院式次第

明治八年七月五日

元老院開院式

一　本日開院ニ付本院并内外史式部楽官員大礼服着用同院ヘ先着ス

一　午前第九時三十分

天皇御出門由緒恒例ノ如シ

一　午前第九時皇族大臣参議及ヒ院省使廳東京府長官次官大礼服着

用同院ヘ先着ス

本式ハ百官参着スヘキノ處御場所狹隘ニ付本文ノ如シ

一　儀仗兵并楽隊整列ス

一　臨幸ノ報知ヲ得テ皇族大臣及諸官員奉迎ス

一　通御ノ節儀仗兵敬礼ヲ行フ

一　樂隊樂ヲ奏ス

一　便殿ニ還御

一　式部ノ官員副議長議官書記官ヲシテ席ニ列セシム

一　式部ノ官員諸官員ヲシテ席ニ列セシム

一　式部頭

　出御ノ事ヲ奏請ス

一　出御式部頭先導朝儀ヲ引ク皇族大臣參議官内卿侍從長扈從ス

　此時諸官員敬禮ス

一　御着床扈從ノ諸員其席ニ分列ス圖ノ如シ

一　立御勅語アリ副議長議官書記官敬禮ス

一　副議長ヲ召シ勅語ノ書付ヲ授ケ給フ副議長拜受敬禮シ復席ス

　明日勅答書副議長ヨリ奏聞ス

一　入御

　此時諸官員敬禮扈從初ニ準ス

一　還幸

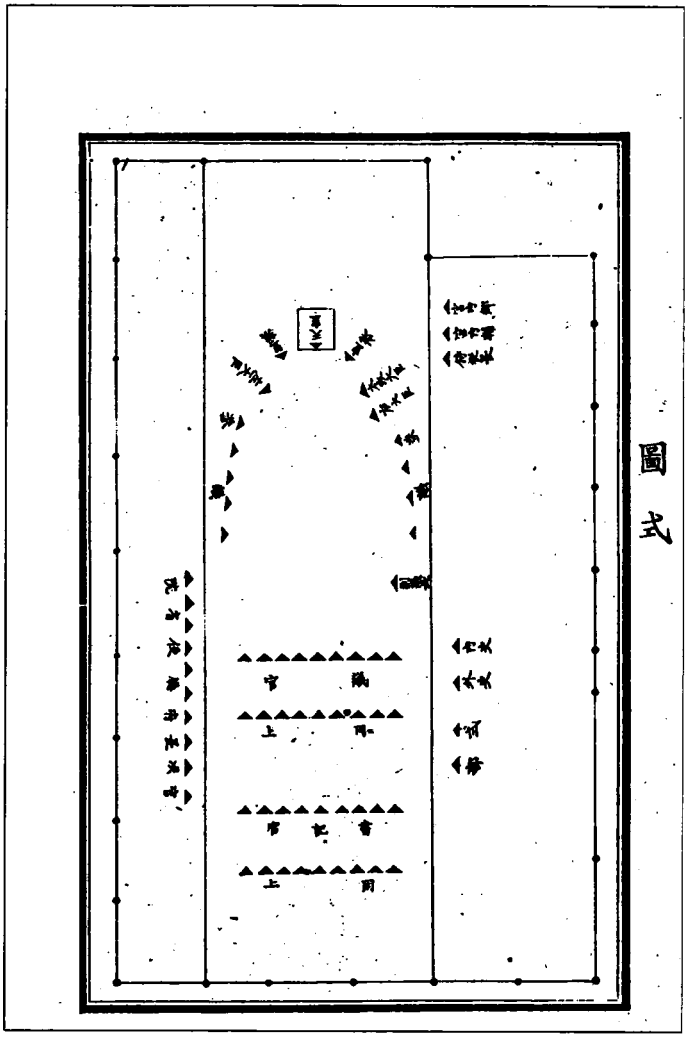
　諸官員奉送奏樂等ノ式初ニ準ス

一　諸官員退散

文書原寸　縦二九・八糎　横二八・三糎（表裏一枚）

追加一三八ノ二

図面原寸　縦二二糎　横一三・八糎



圖式

遺三九　琉球藩制改革ニ付在琉富川親方等ヨリ在外高安親方ヘノ通牒

今月十四日、松田道之殿・伊地知貞馨殿・中田鷗隣殿・種子島時恕殿・河原田盛美殿御登城、於南風御殿今帰仁王子御名代ニ而御対面、私共ニ茂出席、松田殿より唐江進貢、慶賀使并彼御封冊を被請候儀被召留、且藩内一般明治之年号を奉し、年中之儀礼等総而御布告之通遵行、且刑法担当之者并勤学人上京、且藩制改革一件等太政官より之御達書両通、御同人御示諭書等被読聞、都而三通御渡有之、至而不容易事柄ニ而被遊御憂慮、我々ニ茂至極驚痛、国中茂及騒動候、先早々為心得別紙三通相添、此段申越候、以上、

亥七月廿日　富川親方
池城親方
浦添親方
伊江王子

高安親方

文書原寸　縦二七・八糎　横六三糎

遺一四〇　田中某ヨリ左府公ヘノ建言

三大臣協力輔弼ノ件

（包紙ウワ書）「御内々言上覚」

言上覚

一本日は願通御快ク拝謁被受下、恭悦奉存候事、

一近来は御快気ニ被為在候由、御同慶奉存候事、

一一昨年来数度　御邸内江罷登、其上度々愚考書等差上、汚賢覧恐縮存上候事、

大臣閣下江今又申上候ハ憚リ多ク候得共、左ニ

一御更始以降是迄在

朝大臣ノ権乏シク、参議之勢超然タル様ニシテ、万機克ク挙カラサルカ如ク存上候事、

一今已後、三職ノ大臣方克ク御懇親ニ仰セ合レテ、叡明ナル陛下ヲ輔相シ、万機之得失ヲ御照断相成度候事、

一皇国之風形于今依然トシテ確乎存在スルハ、惟御当家御一門丈ト兼テ存念有之候事、

一不肖小人今断髪脱刀之身ナレトモ、本意ハ寸暇モ前条之国風ヲ忘却致サスシテ、存命中ハ先年　御建言之道充分相立候様祈願ニ懸、日日　御盛運ヲ待上候事、

御覧済之上御焼却奉願候、

已上、

八年八月廿一日　　田中百拝□（朱）

左大臣
島津尊公
閣下

文書原寸　縦一六・二糎　横七三・五糎　包紙原寸　縦二四・二糎　横三二・五糎

嘉一四一　朝鮮江華島事件ニ付木戸孝允ヨリ三条相国ヘ

長崎ノ電報ニ拠ルニ、前月廿日我軍艦朝鮮海ニ於テ彼レカ不意ノ砲撃ニ遇ヘリ、我艦已ムヲ得ス遂ニ進戦シ、其砲台ヲ毀チ、民屋ヲ火シ而退ケリト、朝鮮交際ノ成否ニ於テハ、我政府ノ力ヲ茲ニ用ユルコト久シ、今忽此事ニ及フ、是朝鮮遂ニ我ニ絶セリト為スヘキカ、朝鮮ノ事国論紛々連歳未タ止マス、一昨年ハ既ニ此ニ因テ政府ノ変革ヲ生シ、去春ハ又此ニ因テ九州ノ騒擾ヲ起セリ、今ヤ天下ノ議者必ス紛々競ヒ起ラントス、政府予メ一定ノ廟略ヲ立テ以テ其義務ヲ尽シ、其責ニ任セスンハアル可ラス、蓋シ去年我小田県ノ人及ヒ琉球藩人ノ横逆ヲ受ケルニ因テ、政府罪ヲ台湾ニ問ヘリ、況ンヤ今日ノ事我帝国ノ旗章ニ向ヒ、故無キノ暴撃ヲ加フルニ於テヲヤ、夫レ朝鮮ハ台湾ト異ナリ、我官吏人民現ニ其国ニ在リ、捨テ之ヲ問ハサルニ付ス可ラス、必ヤ至当ノ処分ヲ以テ我帝国ノ光栄ヲ保チ、我士民ノ安幸ヲ務メサル可ラサルハ論

ヲ竢タサル可シ、然レトモ略ヲ定ムルニ形勢情理アリ、事ヲ施スニ先後順序アリ、徒ニ世ノ議者ノ慓軽ナル論議ニ従ヒ、其流ヲ逐ヒ、其波ヲ揚可ラス、若シ政府予メ廟略ヲ立テ、其施行ノ順序ヲ一定セハ、之ヲ以テ臣ニ任セヨ、臣謹テ微力ヲ尽シ、以テ我国ノ為ニ謀ルコトアラントスル也、抑先帝ノ季年開国ノ国是ヲ定メ、之ヲ天下ニ詔セシヨリ始メテ万国ノ交際ヲ開キ、維新ノ初各国公使ヲ京師ニ延見スルニ至レリ、而支那・朝鮮ハ古来我ト相通セシ国ニシテ、又近ク隣並ニ在リ、遠洋各国相交際スルノ時ニ至リ、隣並ノ国漠然相信交セス、豈ニ公道トス可ケンヤ、於是朝議路ヲ支那・朝鮮ニ通スルノ策アリ、臣等実ニ其議ヲ翼賛セリ、己巳年十二月三日ニ至リ、臣親シク御前ニ於テ支那・朝鮮使節ノ命ヲ奉セリ、其後朝鮮ノ事葛藤未タ解ケス、故ヲ以テ歳月ヲ遷延ス、臣西洋各国ニ使命ヲ辱フシ、帰朝スルニ及ンテ支那既ニ条約ヲ完ス、而朝鮮ノ交未タ合セス、我使臣尚途ニ滞フル、征韓ノ論起ルニ至テ臣深ク内治ノ未タ洽カラサルヲ憂ヒ、内ヲ先ニシ外ヲ後ニスルノ論ヲ主張セリ、且朝鮮亦未タ明カニ征ス可キノ罪アラサル也、今則暴撃ヲ我軍艦ニ加ヘ、明カニ我ニ敵セリ、於此カ我内治ニ於テ未タ洽キ能ハスト雖トモ、亦徒ニ其内ヲ顧ミ、其外ヲ棄ルコト能ハサル者アリ、臣ノ思想亦是ニ於テ一変セサルコトヲ得サル也、然トモ事ニ先後アリ、順序アリ、今朝鮮我軍艦ヲ砲撃セリ、我兵既ニ戦ヲ開ケリ、然レトモ我釜山浦ニ在ル者猶依然タリ、未タ以テ朝鮮我ニ絶セリトナシ、直ニ兵ヲ加ユ可ラス、朝鮮ノ支那ニ於ケル現ニ其正朔ヲ奉セリ、其交際ノ親結スル、其艱難ノ相関接スル、明知スル能ハスト雖トモ、其相羈属スル所アルヤ必セリ、則必我朝鮮ノ顚末ヲ挙ケテ一タヒ之ヲ支那政府ニ問ヒ、其中保代弁ヲ求メサル可ラス、支那其属邦ノ義ヲ以テ我ニ代テ其罪ヲ誚シメ、我帝国ニ謝スルニ至当ノ処置ヲ以テセシメハ、我亦以テ已ムヘシ、若支那政府中保代弁スルヲ肯セスシテ、之ヲ我帝国ノ自ラ処弁スルニ任セハ、我乃チ初テ其事由ヲ朝鮮ニ詰責シ、穏当ノ処分ヲ要ス可シ、彼

レ若シ肯セスンハ其罪ヲ問ハサルヲ得ス、然而用兵ノ道ハ必ス之ヲ彼我ノ情景ニ視サル可ラス、則我会計ノ贏縮攻戦ノ遅速必ス其宜キヲ権リ以テ万全ノ地ニ立タサル可ラス、是其先後順序ノ間、固ヨリ匆卒ノ能ク局ヲ完ス可キ処ニ非ス、若シ朝廷臣ニ委スルニ一切ノ機宜ヲ以テシ、始終其事ニ従ハシメハ、臣当ニ努力ヲ尽シ、必ス我帝国ノ光栄ヲ損スルコトナキヲ務メントス、其機変ノ生スル所事政府ノ素略ニ於テ大ナル関渉アルカ如キハ、固ヨリ之ヲ朝議ノ決ニ仰クヘシ、請フ臣カ前後ノ論議ヲ明ニシ、以テ臣カ請フ所ヲ納レヨ、此レ臣ノ始終国ニ報スル所以ナリ、臣恐懼謹疏、

明治八年十月四日　　木戸孝允再拝

三条太政大臣公閣下

冊子原寸　縦一九・三糎　横一三・七糎　四枚

遺四二　九鬼隆都ヨリ左府公ヘ

聖上華族会館ヘ臨幸ノ件

（包紙ウワ書）
「上」
（封紙ウワ書）
「左大臣様　尊机下呈上　　従五位　九鬼隆都　再拝」

〆

口上

過日　不存寄会館ヘ
御臨幸被成下、誠ニ以恐入冥賀不極望外仕合奉存候、右
御礼申上度、乍延引　御式台迄参上仕候、万一　御在
宿為在候は、拝　尊顔尚又心事等申上度奉存候得共、
此節御用多御不在候儀奉存候間、此段申上置候、頓首、

十月十六日

文書原寸　縦　二八糎　包紙原寸　縦四二・八糎　横三九・五糎　横二八・八糎

邊一四三　九鬼隆都ヨリ久光公へ

左大臣辞職ニ付驚愕

（包紙ウワ書）「呈上　九鬼　〆」

（封紙ウワ書）「奉呈　湯島　九鬼隆都　〆」

先日以来何分出兼候処、昨日承り候得は御職掌御辞被成候由驚入、若哉速ニ　御国元江　御引為在候哉心痛奉存候、何卒　御位階丈は天下之御為暫　御辞無之様、此儀は分而御願申上候、今日罷出候而も御目通り無覚、先認取持参仕候、右ニ付候而も岩下次郎右衛門方、責而一面話仕度、甚恐入候得共出府被仕候様被命被下度、此段願置候、何茂早々頓首、

十月二十九日

文書原寸　縦　二八糎　包紙原寸　縦　二四糎　横三九・五糎　横三二・五糎

邊一四四　岩倉右府ヨリ久光公ノ使者ヘノ返答

三大臣一体同心其他

岩倉公江夜前被召被仰聞候件々、御口弁ニ而一々取覚不申候得とも、大意左之通、尤　此御方江明五日御帰殿後参上、巨細は御直ニ御熟談可被成、一昨晩は書取を以一応御相談、其上御直談と申置候へ共、書面細見候処、彼是廉立候も有之、不体裁ニ付其儀ハ取消候間、只其大目丈ケヲ申聞候旨被仰聞候、

一三公協議一体同心真ニ取結、

聖上於御前見込可申談と存候事、

一参議は文字通参り議するノ体ニいたし度候事、

一服制等制度文物ニ関候件之内、各見込ム処相違之廉尠トセス、依而之レラハ先差措キ、体裁変換之上更ニ協議といたし度候事、

一自今何ケニ付大事件ハ三公同心一体之上は、仮令外より何様之異論生候とも無泥、

聖上御前江倶ニ罷出、遂奏聞伺定候様いたし度候事、

一三公付之史官一人ッ、司らせ候ハ、、三公之間無遺洩御用弁可致と存候、尤其人ハ当分相勤候ものより採ルカ、或ハ外ニ見込有之登庸いたし度存候向は随意ニ相定度、然ル時はおのつから不遍不党之体裁ニ可立到と存候事、

一椅子・タラフル今後取入候時は、仮令内国品高料たりとも必ス日本出来ヲ取入候儀ヲ可申談事、

一タラフル上敷物、当分相用居候西洋品相古ヒ難用時は、是亦内国品ヲ相用候様同断之事、

一外国品需用禁制之布達いたし候儀は、屹と不宜と存候事、

一重立候諸官人、今より五六ヶ月も試、其上難相用人物は黜陟有之方可然哉と存候事、

一久光公思召有之儀、おのつから可被為在と奉存候間、何卒無御腹臓御論判奉伺度、兎角無御泥御論談被下候処、幾重ニも御信頼申上候旨、其方よりも呉々申上候様被仰聞候事、

一此他諸端可有之といへとも、先大体御同腹之上は寄々御熟談申上度、確乎不抜之体ヲ定ムルニハ、兎角国憲編集速ニ不取懸候而ハ、一般之大正則ニハ難運と存候事、

右条々、仮ニ大意ヲ述ル迄なり、此大意ニ御同意被下候得は浜町より帰懸三条殿江差越、存慮ヲ申込、同意ニ候得は其通、若異存ニ候ハ、強而談論スル意無之と御意候間、乍恐御内々御聞可被下参議兼任云々、今日迄も不相運哉と承居候、公思召ハ如何之御ものニ可有之哉と申上候処、速ニ相運候儀至当なり、然ルヲ斯ク遅緩スル、其所以大ニある欤ニ惣隙せるゝと御顰眉之御容子ニ被伺申候事、

文書原寸　縦一六・六糎　横一四三・七糎

邊一四五　三公ト参議ト議席ヲ異ニスルノ建議

一三公席ヲ以テ則正院ト被定度事、

一参議席ヲ更ニ被設、日々ノ事務且ツ何ソニ付議セラル

時限、正院ヘ出頭スル体裁ト御変換被為在度事、

謹而管考スルニ、三公参議一席ノ興リ、恐ク御維新兵馬楚卒ノ際、万機ノ事務非常ノ折柄ニ始リ、今日迄心付カレスシテ行レ来リタルモノナランカ、果シテ然ラハ之レ一時止ムヲ得サルモノト謂ツヘシトイヘトモ、然レ共今ヤ守成ノ半ヲ過キ、各其職ノ威厳ヲ肅整潤色シ、万機箴戒信睦ナクンハ御政体ノ叙事、必忽卒遅緩ノ憂モアランカ、然レハ此際ニ当リ宜ク議決席ヲ区域シ、鄭重ノ体トシ以テ陛級ノ順序ヲ正サヽレハ本則立ス、必職掌ノ軽重不知不識忘却シ、権限ヲ破看スルノ弊ナキヲ得サルニ似タリ、仰冀クハ御評議ノ御参考ニ御一覧下サレン事ヲ、

一今時弁官ヲ被廃大史ヲ以テ之ニ充ラル、恐ク謂レナキニ似タランカ、制度ハ時ニ因テ変換アルヘシトイヘトモ、冀ハ宜ク識者ニ御質問、果シテ当ヲ得サレハ旧ニ復セラレン事ヲ仰ク、

一大史ノ任タルヤ甚重カランカ、聖上今日ノ御行状ヲ記載シ、或ハ官中ノ事ヲ記シ、後世ノ青史トス、宜ク和漢ノ歴史ヲ鑑ミ、大史ノ大史タル人ヲ撰シ御登庸アラン事ヲ仰ク、

一正院中ヘ金穀出納ヲ司ル寮ヲ被置度事、

謹而管考、西洋各国出納ノ厳ナル、灰(仄カ)ニ聞クニ上下ノ議院ヲ置キ、之レニ於テ金貨ノ出納ヲ確定シ、之レヲ大蔵省ヘ附シ、大蔵省之レヲ以テ出納スルモノ也ト云々、皇国未タ如此ノ体ナシ、故ニ大蔵省ノ有権ニノミ帰シタリ、闕典ト曰フヘシ、元来政府ヘ上収スル金穀ハ万民ノ膏血ニシテ等閑ノ品ニアラス、宜ク之レヲ改正セサレハ、政府金穀ノ有余不足ヲ商量スル事ヲ得サルヘシ、之レヲ商量スルヲ得サレハ、国民ニ対シ不知不識不信ヲ示スモ知ルヘカラス、政府ハ闔国人民ノ標的大信義ノ位スル所ニシテ、実ニ国家ノ重事一日モ等閑ニナスヘキノ事ニアラス、旧幕府ニハ勝手方係ノ閣老アリ、二百七十余ノ旧藩々ニモ悉ク政府ヘ勝手方ノ家老アリ、然ルヲ王政ニ復

古シ、独リ大政府何ソ如斯迂遠ナル、甚遺憾ト曰ハサルヲ得ス、今日輸出入ノ釣合ヲ失シタルヨリ金貨ノ闕乏スルノ原由ニ至ル迄、則此ノ弊ニ根サスモノニテ他アルニアラスト曰フトモ誣言ニアラサルヘシ、仰冀ク宜ク至急ニ御評議アラン事ヲ、

右ノ条々実ニ管見ニシテ恐縮ノ至ニ不堪トイヘトモ、一ツノ可採アラハ雀躍ノ至リ難有奉存、御参考ノ為奉備尊覧候事、

冊子原寸　縦二八・五糎　横二〇糎　二枚

邊四四　左大臣熾仁親王以下参議諸省卿氏名

左大臣　熾仁親王

専任参議

大隈重信　兼参議　西郷従道
伊東博文（ママ）　内務卿　河村純義
大木喬任　同大輔　寺島宗則
山田顕義　同少輔　井上馨
外務大輔　黒田
同少輔　山県有明（ママ）
大蔵卿　松方
同少輔　前島
陸軍卿　品川弥次郎
海軍卿　上野
文部卿　吉川
同少輔　佐野常民
吉原重俊
大山　巌
榎本武湯（ママ）
河野敏謙
九鬼

工部卿　山尾
司法卿　田中不二麿
副議長　佐々木
議官　神田
同　林友幸

文書原寸　縦一六・七糎　横八六・五糎

遺四七　久光公退官後ノ動静ニ付田中海山ノ伺書

「(封筒)伏願
御内閲
海山
再拝」

「(封筒ウラ)(朱)□」

極御内々謹テ呈ス

旧臘海山突然トシテ一ノ事柄ヲ聞ケリ、其実否ハ知ラサレトモ事最モ緊要ニ属ス、故ニ措置シ難シ、不肖此ノ事情ニ蒙クシテ中心大ニ驚愕シ、或ハ之ヲ嘆息ス、然レトモ其事タルヤ、若シ　御深慮ニ出タルモノナラハ、亦中心安キヲ得ル可キコトアラン、仍テ其実否ヲ問ハス得聆ノ儘、是又
御国家ノ為メ伏テ
大臣殿下ニ呈ス、冀クハ静閑ノ際御参考ノ上御懇察ヲ垂レ給ヒ、後チ御焼却アラン事ヲ願フ、是蓋シ万機枢密ナルモノハ悉ク漏脱ナキヲ欲スレハ也、

一世語ニ云ク、惜イ哉、

前左府公ニシテ其侍人ニ乏シト、如何ントナレハ近頃其月日ヲ知ラス其家人奈ラ原某ハ彼ノ大ク保利某江内通スル欤、又若シクハ大ク保ヨリ便利スルカ、未タ詳カナラスト雖トモ、右云々ノ事、既ニ彷彿トシテ知ル可シ、

一夜或人此ノ実景ヲ見得タリト、或ル夜酒席ニ大ク保・大限・奈ラ原等ト座ヲ共ニシ興ヲ催シタル事ヲ見タル人アリト、

外ニ

一昨年十一月頃欽、陸軍省長官山県某ヨリ廃刀ノ建議上
申致シタル趣、未タ
御指不相成候由、
一御国家ノ事最早御手段無御座候哉、尚緩々御都合奉伺
度候事、
九年
一月　日

拝上

文書原寸　縦一三・五糎　封筒原寸　縦一三・七糎
横三八・五糎　横　七・七糎

遺一四六　久光公東京鹿児島往復日記　二通
相良量右衛門私記

追加一四八ノ一
明治七年四月十五日鹿児島
御発駕千里艦ヨリ
同四月廿一日東京　御着浜町御邸
同四月廿七日左大臣
御拝命
同八年十月廿七日
御免職
同九年三月廿日　御湯治
御暇御願済
同四月五日東京　御立浜町御邸
同四月十三日六時過　御着艦三邦丸

文書原寸　縦一六糎　横二六・五糎

追加一四八ノ二
明治九年四月五日浜町御邸
御発駕、同日横浜ヨリ汽船広島丸へ　御乗艦、同七日神
戸へ御着艦、兵庫薩摩屋へ　御止宿、同十一日同所
御発駕、三邦丸へ　御乗艦、同夜讃州多度津へ御碇舶、
同十二日未明同所御発艦、同十三日前海へ　御着艦、
右之通私記へ相見得候間、此段申上候也、

相良量右衛門

文書原寸　縦一六・七糎　横二三・七糎

遺一四九　税所仲五等ノ西郷党動静探索書　三通

「上（包紙ウワ書）　〃　税所仲五」

「上（付紙）村源蔵へ宛税所仲吾上申

征韓論派動勢探索書

並税所仲吾・亀山覚之丞等上申書」

追加一四九ノ一

一川村帰県之儀辞職ニテハ無之、集成館改制之事ニテ帰家、当日直ニ武村へ差越及長談ニ候由、

一篠原ニハ来客ヲ避ルニ託シ、親類ハ別業西之谷江有之、右ハ寓居之由、

一兵隊帰県之者共ノ話ニ、御随行人数ノ者共ヲ竹槍組ト名付、此節ノ御任官ヲ承リ不平ヲ抱キ、諸所ハ会何カ計ルノ由、サレトモ幾派モ相立居、且纔少々ノ人数何事ヲ企トモ何程ノ事カアラント嘲リ語ルノ由、

一帰県人数等一昨日（十八日）ヨリ谷山出張相始リ、昨日今日（十九日廿日）六十人計リ、明日モ六十人余ノ由、今日ヨリ宿手当等頼置候由、尤谷山辺ヨリ兵隊相勤候人数モ同ク会合之由、至急ニ上京ヲ促ノ事ト被察候、

一先達而中山氏等帰県ニ付、彼者共ヨリ探索相用、一七日中ニ中山等ノ咄総テ聞祓キ、同盟ノ者共ハ互ニ銘々為知タルノ由、夫ヨリシテ出府ヲ急ノ事ト被察候、

一近々三官以上ノ者共兵庫表ハ出掛、征韓論同服之五県人数ト集会、決議ノ上大挙ノ期限相約シ、其上兵隊人数大挙上京ノ賦ト被察、二三月ヲ限リ事ヲ揚ルト相聞得候、

一諸郷兵隊人数ノ者共ヲ、三官以上ノ者共湯治ニ名付、諸所奔走、同盟人数ハ引入方トシテ今和泉・加治木・川辺・都之城・吉利、其外諸郷ハ差越、人気ヲ鼓舞致シ、追々両三輩ツヽ各郷ヨリ出府往来致ス由、

文書原寸　縦一七・二糎　横四九・五糎

追加一四九ノ二

一佐々木弥八郎ト名越彦次、同道ニテ有川治左エ門宅江差越候由、治左エ門云、先度有吉次左エ門兄弟辺見十郎太所江会イタシ、至急上京ノ処相迫候処、至極此策可宜、イツレ西郷辺江得ト吟味ヲ遂、何分可取究トノコト也、且此後集会之節ハ酒ハ相禁シ、万一遅方ニ相成タル時ハ食事迄ハ不苦ト為申由、未上京ノ期限モ不相分ト名越ヘ咄ナリ、

但佐々木ハ桐野従弟ノ者ニテ、是ニ名越ヲ無二ノ処ニテ入置シナリ、

一蓑田勇次郎、西郷一例ニテ此節東京引取之節、跡江残シ置タル者也、下県ノ三官ヘ来春彼地ニテ再会ヲ期シ相別レシ由、外ニモ右類多ク有之由、友野一蔵ヨリ芦谷次左エ門ト申者ヘ話之由、次左エ門ヨリ名越伝承ス、

但友野モ西郷党類次左エ門従弟ニテ、名越付入探索致候也、

一友野ヨリ芦谷ヘ咄ニ、桜ノ花盛ノ時出掛、本懐ヲ達スルモ花ノ散ゴトクナラント、雑話ヲ名越伝承ス、

一橋口豊彦名越宅ヘ来リ、淵辺直右エ門先比入来温泉ヘ差越、千代ヨリ出水辺廻郷、先日帰家ノ由、近日同伴、淵辺方ヘ差越旁可相咄ト約束イタシ置候段彦二話ニ候、

但橋口事元美坂ト申兵道者ニテ候、

一豊彦云、　二ノ丸公御拝命ニ付、旧正月方為御警衛多人数上京ノ筈ト咄申候、　公ノ処ヲ名ニシテ兵ヲ募リ、大挙致ス策カト不審ニ被考候、

一桐野踊ヘ湯治ヘ差越、吉田・飯野・真幸、其外諸所ヘ致廻郷候段、佐々木ヨリ名越伝承、

一篠原モ当分湯治ヘ差越居候由、行先キ不分明、右三人ノ者トモ湯治ハ名ニシテ、旧藩代ノ時郷兵御募ノ節隊長ヨリ廻郷、旧郷隊長辺ノ処ヲ結ヒヲ付ルナラント被察候、

一月廿日探索

一桐野信作妻竹下八郎娘ノ由承リ、竹下ヘ内外出入イタ

ス六十才計ノ三味線引女ヘ内々聞合相頼、兼テ困窮者故、小仕銭等少々差ヲクリ竹下方ヘ遣シ候処、色々雑話ノ内近比桐野氏ヘ御出被成候哉ト承候ヘハ、先比ヨリ霧島ヘ犬山ニ差越、先日被帰、又々従弟別府抔列立、右同所ヘ差越被居候、又イツ比御上京被成候哉ト尋候ヘハ、既ニ近々上京ノ模様ニテ候処、其後噂無之、其内気慰ニ犬抔引諸所ヘ差越候、年明候得ハ上京ノ筈也ト話ノ由、指宿仲之助探索、

右探索之大略乍恐

奉入　貴覧候、以上、

税所仲五

一月廿二日　　亀山覚之丞

伊東隼太

文書原寸　縦一六・七糎　横七六糎

追加一四九ノ三

昨日市蔵帰後中根如此申越候、今夕参会之時　大簡公御考ニも可相成被存候故遣候也、

過刻奉言上候市之進対話之次第、罷帰大蔵大輔ヘ申聞候処、ドウヤラ淵底モ見へかゝり候様に被存候間、猶今日登　営之上

上様へも申上、市之進へも講究知申度との見込ニ御座候間、帯刀へ被仰聞候義ハ、右登　営之模様相分候迄御見合セ被下候様申上候へと申聞候、

文書原寸　縦一六糎　包紙原寸　縦一九・五糎

横一二糎　　横　二六糎

付紙原寸　縦五・七糎　横一七・五糎

追二五〇　吹上御苑ニ於ケル犬追物天覧諸組人名

犬追物手組之事　明治十二年十一月廿七日

上手組

御　　迫水伊之丞

国分友敬　　倉山季嘉

武宮俊雄　　平田吉次郎

川上義章　市来新左衛門

検見　川上十郎左衛門　喚次　倉山作太夫

次手組

島津忠亮　東郷重持

三原経備　花尚勇

安藤八郎左衛門　折田正介

村橋久成　伊地知彦七

検見　川上十郎左衛門　喚次　倉山作太夫

下手組

島津久明　川村純義

市来広治　安田定則

園田実徳　岩切実信

島津又四郎　新納常隆

検見　川上十郎左衛門　喚次　倉山作太夫

冊子原寸　縦三二・五糎　横四五・三糎　三枚

邊二五一　詠進歌詩ニ付徳大寺宮内卿ヨリ久光公ヘノ通達　詠進ナシ

歌、初雪。詩、冬晴驟暄

（封筒）「正二位島津久光殿　宮内省」

追加一五一ノ一

去廿二日付ヲ以テ詩歌詠進之義相達置候ニ付而は、書式別紙之通ニ有之候条、此段相達候也、

十三年四月廿九日　宮内卿徳大寺実則

正二位島津久光殿

追テ今般之御題ニ拘ハラス、旧詠差出候共不苦候也、

今般有位華族各自之詩歌被　召候ニ付、別紙之通御題下賜候間、詩若クハ和歌相心掛居候ハ、詠進可有之候、此段相達候也、

十三年四月廿一日　宮内卿徳大寺実則

正二位島津久光殿

追而、体制ハ何ニテモ不苦候、且来ル五日限可差出、若事故有之延引候ハヽ、其事由可申出、用紙之義は当省より可相渡候間、員数可申出候、将又書式ハ追而通牒可致候、此段副達候也、

冊子原寸　縦二七・三糎　横二〇糎　二枚

追加一五一ノ二

徴集詩歌書式

題

本官姓名上

比例

遠山霞

太政大臣三条実美上

官アル者ハ右ノコトク官ヲ書クヘキナリ、出仕御用掛准奏任ハ位階アラハ位階姓名上ト書ク、位階ナキハ姓名上ト書ク、

詩歌ノ書法随意タリト雖モ、余リ散体ニ過テ誦読シカタキ様ニハ書クヘカラス、

但色紙ノ裏ニ左ノ如ク附箋ニシテ差出スヘシ、

何省　何等出仕
御用掛
准奏任

文書原寸（折紙）　縦一六・五糎　横四六・七糎

追加一五一ノ三

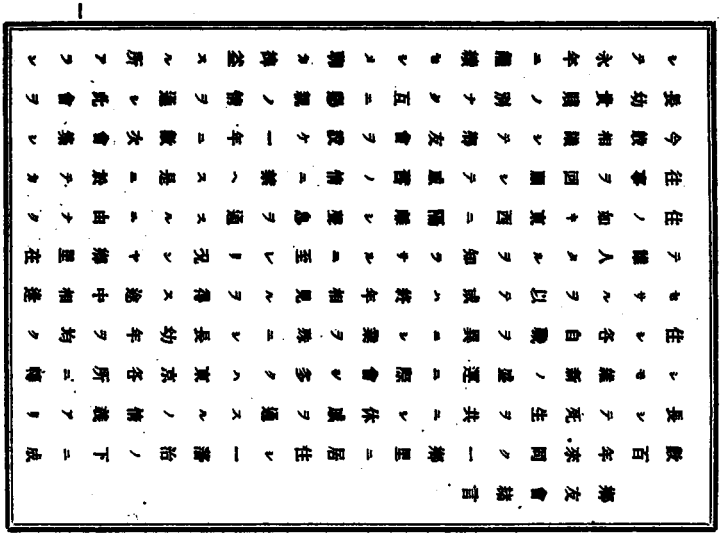
初雪歌

冬晴驟暄　詩

文書原寸（折紙）　縦二一・五糎　封筒原寸　縦二三・五糎
横五七・五糎　横　一〇糎

温二三　郷友会設立及規則役員

追加一五二ノ一



郷友会
會則

ト欲ス因テ毎月若干ノ金圓ヲ聯レテ之ヲ儲蓄レ東京郷里ヲ論セス子弟ノ才徳アル者ヲ奬勵レテ其業ヲ遂ケレメ且ハ授産ノ方法ヲ聞レ小ヲ積ミテ大トナレ近キニ リ遠キニ及ホレ漸次盛大ニ至ラレメントス庶幾クハ當時ノ情義ヲ全クレテ各家祖先ノ神靈モ地下ニ喜悅スル所アラレコトヲ諸分幸ニ其事時ヲ察レ之ヲ賞贊レテ成功ヲ遂ケレメラレ

明治十五年一月

郷友會會則

第一條　本會ハ懇親ヲ通レ情誼ヲ敦クレ會員子弟ノ教育ト授産ノ事ヲ聞レ俱ニ便益ヲ謀ルヲ以テ主要トス

第二條　本會ハ當分ノ内内幸町五番地島津家邸内ニ設ケ事務ヲ取扱フ者トス

第三條　凡ソ會員タラント欲スル人ハ姓名住所ニ姓名ヲ記載捺印レテ紹介及ビ會則等承諾ノ證トスヘシ

第四條　本會ハ會長幹事及ビ常置委員ヲ置キ會務ヲ整理スヘシ

第五條　會長ハ會員ノ投票ヲ以テ選擧レ幹事

ハ會員ヲ五部ニ分チ各部内ニ於テ三名以上六名以下ヲ公撰シ常置委員モ同シク部内ニ於テ概ネ十名ニ對シ一名ノ割合ヲ以テ公撰スルヲ法トス

但會長ハ便宜ヲ以テ常置委員ヲ增加スルヲ得

第六條　若干ノ會員郷里又ハ他郷ニアル時ハ同シク幹事及ヒ常置委員數名ヲ置キ互ニ通牒往復スヘシ

第七條　會員ハ創立費トシテ應分ノ金額ヲ出スヘシ家貧窮乏ノ人ハ出金ヲ要セス

第八條　出金ハ一時ニ出スモ五ケ月或ハ十ケ月ニ割賦シテ出スモ各自ノ便宜ニ任カス

第九條　會員在官ノ人ハ毎月維持金トシテ月俸百圓以上ハ百分一百圓未滿ハ二百分一ノ金額ヲ出シ其他有志ノ人ハ應分ノ金圓ヲ出スヘシ

但募集ノ法ハ各部ニ於テ取極メ毎月定式會日開會二時間前ニ必ス會計員ニ出スヘシ

第十條　會長事故アリテ出席セサル時ハ幹事ノ内ヲ以テ代理ヲ指定スヘシ

但都合ニヨリ幹事中ノ投票ヲ以テ

之ヲ定ルコトアルヘシ

第十一條　在京ノ會員旅行ノ節ハ出張時ヲ會長ニ屆出ヘシ

第十二條　會長ハ每一年ニ改撰シ幹事及ヒ常置委員ハ每一年ニ半數ヲ改撰スヘシ

但再撰ヲ妨ケス

第十三條　幹事委員ノ中若干名ヲ撰ミ庶務會計ノ負擔員ヲ置クヘシ

第十四條　會長ハ每月一回幹事及ヒ常置委員ノ會議ヲ開キ第一條ノ趣意ニ基キ本會ノ便益ヲ商議スヘシ

第十五條　創立費及ヒ維持金トシテ募集シタル

金圓ハ會費ヲ除クノ外ハ某ノ銀行ニ預置キ其母子計算支出消費ノ如キハ別ニ會計規則ヲ設ケ極メテ嚴密ナルヲ要ス

第十六條　每年二回總親總集會ヲ開キ幹事委員會ニ於テ決議ノ上施行シタル項目ト金錢出納ノ明細書ヲ報告スヘシ

役員職務

第一條　會長ハ本會ノ事務ヲ總括シ會議ノ時ハ之カ議長タルヘシ

第二條　會長ハ幹事及ヒ常置委員ノ中ヨリ庶務會計ノ負擔員ヲ撰ミ事務ヲ分掌セ

レムヘシ

第三條　會長ハ幹事常置委員會ニ於テ決定シタル條件モ事柄ニ依リ更ニ總會議ニ附スルコトアルヘシ

第四條　會議ニ於テ決議シタル條目ハ其緩急順序ヲ酌量シ會長之ヲ實行スル者トス

第五條　會議ニ附スヘカラスト認ムル議案ハ會長之ヲ幹事ニ議セシメ幹事モ亦應案ニ決スル時ハ其理由ヲ辯明シテ立案者ニ還反スルモノトス

第六條　幹事ハ會長ノ指揮ヲ受ケ一切ノ會務ヲ處辨シ會長ト俱ニ本會ノ便益ヲ謀スヘシ

第七條　常置委員ハ總會員ノ代人タルモノトス

第八條　庶務負擔員ハ會長ノ指揮ヲ受ケ文案記錄等ノ事ヲ掌ル

第九條　會計負擔員ハ會長ノ指揮ヲ受ケ金錢出納及ヒ調度等ノ事ヲ掌ル

第十條　庶務會計員ハ會議毎トニ閉會ノ後チ負擔ノ事務ヲ辨了スルニ非チレハ退散スルヲ得ス

議事規則

第一條　議事ハ幹事常置委員ヲ以テ議員トル毎月二十二日午後第四時ヨリ開會スル者トス

第二條　議員ハ開會時刻前ニ出席スヘシ若シ事故アリテ欠席スルトキハ時時書面ヲ以テ議長ニ屆ケ出ツヘシ

第三條　庶務負擔員ハ開會前ニ當リ來員ノ議案及ヒ欠席屆書等ヲ領取シ出席ノ現員ヲ調査シテ議長ニ報告スヘシ

第四條　議長ハ開會ノ前ニ當リ議員ノ中ヨリ答辯員ヲ撰定スヘシ

第五條　議長ハ議事ヲ開ク時限ニ先タチ其席

ニ就キ議員ヲシテ列坐セシメ然ル後議事ヲ開クヘシ

第六條　議員ノ出席論員三分ノ一ニ充タサルトキハ其日ノ議事ヲ開クヲ得ス

但至急ヲ要スル者ハ此限ニ非ス

第七條　議員ノ番號ハ每期（年一）抽籤ヲ以テ之ヲ定ムヘシ

但若坐ノ順序ハ番號ニ準ス

第八條　議長庶務員ヲシテ議案ヲ朗讀セシメタル後チ發言セントスル者ハ必ス議長ト呼ヒ議長其番號ヲ呼フヲ俟テ發言スヘシ

但議長ハ時宜ニ依リ議員ノ發言ヲ止ムルコトヲ得

第九條　議長ハ議案ニ附キ意見アルトキハ幹事ノ中ヨリ一時假議長ヲ撰ミ議長ノ席ニ着カレメ議員ノ列ニ加リテ論辯スルヲ得

第十條　議事ノ可否ハ多數ニ依リテ決定スル者トス若シ議論相半スル時ハ議長之ヲ左右スヘシ

第十一條　議員ハ議案ニ就キ修正ノ意見ヲ發スルヲ得ルト雖モ五名以上ノ同意者ナケレハ議案ト爲スヲ得ス

第十二條　議員ハ開場中並正服着ナルヲ要ス猥リニ私語シ他ノ妨害ヲ爲スヘカラス

第十三條　議場ニ於テハ其名ヲ呼ハスシテ番號ヲ呼フヘシ

第十四條　一案ヲ議スルニ當リ其本案中或ハ支節ヲ生スルトキハ姑ク本案ヲ置キ支節ヲ議スルカ又ハ本案ヲ了終セシ後チ支節ヲ議スルカ議長之ヲ議員ニ問ヒ多數ニ依リテ決スヘシ

第十五條　議事中議員事故アリテ會場ヲ去リ決議ノ後亦會スル時ハ更ニ之ヲ議スルヲ得ス

第十六條　前會ニ於テ既ニ決定セタル議案ハ次會ニ於テ再議ヲ乞フヲ得ス事實止ムヲ得サル者アル時ハ五名以上ノ同意者ヲ得意見書ヲ作リ議長ニ出スヘシ

第十七條　議長ハ庶務負擔員ヲシテ前會ニ於テ次會ノ議案ヲ各部ノ議員ニ報告シ其趣旨ヲ知了セシムヘシ

第十八條　會員中意見アル時ハ其意見書ヲ議長ニ宛テ幹事委員ノ間ニ送附スヘシ議長之ヲ議案ト爲スニ於テハ立案者ハ議員外ノ人ト雖モ議長ノ意見ヲ以テ議場ニ列セシメ又ハ答辯員ト爲スコトアルヘシ

第十九條　議事ニ臨ミ言論過激ニ渉リ又ハ人ノ毀譽褒貶ニ及ホスヲ得ス

第二十條　凡ソ會員ハ議員外ノ人タリトモ議場ノ傍聽ヲ許スト雖モ議員ト席ヲ混同シ且私語喧騒シテ議場ノ妨害ヲ爲スヲ禁ス

冊子原寸　縦二〇糎　横一四糎　一〇枚

追加一五一ハ二

一

郷友会、長　仁礼景範

郷友会幹事、

野津道貫
高島鞆之助
今井兼利
川上操六
比志島義輝
兼会計　柴直哉
板村汪
有馬純行
兼会計　井上真郷

兼庶務　池田貞賢
柴山矢八
田中綱常
石原近義
山下房親
加藤清明
兼庶務　寺原長輝
川畑種長
兼会計　柳田義猷
内田政風
吉井友實
島津久寛

二

兼庶務　谷元道之
兼会計　法元太郎左衛門
有村国冶
海江田信義
兼庶務　伊地知貞馨
兼　伊集院兼寛
兼　奈良原繁
兼会計　加藤済
高崎正風
兼　委員、

山本権兵衛
本田親秀
吉田清一
山本清實
庶務　大山綱良
萩原兵庫
瀬戸口藍
兼会計　伊集院兼雄
龍岡資峻
会計　篠原国幹

兼　大迫尚敏
兼　若松是則
兼　限岡長道

兼　島津正醇

川部純義
伊東祐啓　庶務
伊東祐亨
桜井正命
隈崎守約
末川久敬
伊地知弘一
見玉利國
庶務
伊藤東吉
東郷平八郎
百水亨
会計
荒川勇居

有馬純貫
鍋島貞祝　庶務
山本權兵衛　仝
日高壯之丞
水田親之　会計
日高正雄
上村彦之丞
早崎源吾
神宮司純粹
八木俊輔
高木安行
河原裏一

三

水藤貞瓦
谷元延清　会計
井上要之助
阪元俊一
長倉祐唐
牧之瀬行光
上田瓦貞
是枝顕行
財部彪
山下秀實
宮内盛高
藤崎供秀

菅井誠美　庶務
塩川清
末廣直方　庶務
種田盛苗
倉内末盛
坂口實行
川路利密
山口高尚
中原尚雄
竹内實正
川俣直之
瀬戸山長評

四

冊子原寸　縦二〇糎　横一四糎　三枚

白井常彬	庶務 安藤兼道
帖佐其平	坂口清輔
金丸實	川路利貞
永谷常備	池田兼規
川路科國	増山一雄
上原恕助	高橋清行
山口偉武	合計 川幡清貞
黒川晉	大山政吉
澤秀太郎	玉利清輝
川路利行	永井實行
岩倉長	室田景長
藤崎清秋	梶川十左衛門

五

丸山悉公	國田安豐
合計 重田位俊	合計 種田誠一
吉留利衛	庶務 浦生仙
町田實快	仝 田島吉四郎
坂元照信	市來政方
松永包春	酒勾醇
合計 荒田位稔	有川貞壽
岩山敬義	東郷蘇介
西 德次郎	上野吉太郎
合計 有島武	間世田吉七
庶務 奥青輔	伊集院彌二郎
合計 安田定則	庶務 赤星彌之助

六

逸二五三　阿多郷士族西田経真ヨリ久光公ヘノ三策献言　二通

県下ノ教育振興。神道興隆。陛下ヘノ時弊争諫

追加一五三ノ一

「（封筒）上」

「（封筒ウラ）阿多郷士族西田経真」

（端裏付箋）「西田経真」

謹ンテ考フルニ、我カ　神州ノ国タルヤ、地位五洲ニ冠シ、乾ニ位シ天地ノ精華ヲ鐘メ、宇内ノ正気ヲ聚メテ人ハ純正ノ資賦ニシテ、草木鳥獣ニ至ル迄皆惟レ世界ノ特秀ニシテ、而シテ然モ万国称シテ日本ト云ヒ、日東ト云フ、

天祖始メテ此地ニ降リ玉ヒシヨリ、蓁荊ヲ除ソキ不正ヲ誅シ、豊芦原ノ中ツ国ニ都シ玉ヒシヨリ、宜哉、皇統万古一姓　三種ノ神器　玉ハ以テ仁ニ象トリ、美徳温潤万古不朽ノ証ヲ伝ヘ、　鐘（義）ハ以テ智ニ象トリ、清明神霊奸邪ヲ照ラシ、万古今猶見ル可キノ証ヲ伝ヘ、剣ハ以テ神気凜々内チ妖邪ヲ駆リ、外夷狄ヲ払フ可キノ証ヲ伝ヘ、子孫相ヒ受ケ相伝ヘ、仁義礼知信ノ五教ヲ以テ綱常ヲ維ナキ醇厚俗ヲ為シ、忠武道ヲ成レ、節義志ヲ作シ、衣冠端正品用質樸赫々綿々鴻基不動コト茲ニ二千五百有余年、其間風俗或ハ変シ、或ハ移ルト雖トモ、幾クモ無クシテ復々本然醇々乎タルノ帰服スルハ、我カ国ノ万邦ヨリ秀逸スル所以ナリ、愚臣経真謹ンテ当今ノ形勢ヲ按スルニ、今ヤ実ニ然ラス、先王ノ教化トハ全ク相水（氷）炭ニシテ、愚按愚筆ノ能ク万一ヲ尽ス所ニアラサルナリ、臣久シク巖穴ニ伏シ、病蓐ニ臥スト雖トモ、感慨腔膈ニ溢レ、内ニ自ラ止ムコト能ス、聊カ聞見シ膾炙スル所ノ大略ヲ論センニ、是迄伝タヘ玉ヒシ二千五百余年来ノ　神聖ノ大教、周孔ノ正学ヲ廃セラル、ニ随テ、敢テ毀傷セサルノ大典ヲ破リテ、被髪左衽ノ胡法ニ効ラヒ、冕冠・法服・日用什器・

家屋ニ至ル迄テ惣テ咸ナ胡製ニ退ケラレ、卒ニ彬整ナル太陰暦マテ廃滅シ、是ニ因テ正士畸人ハ日々慨難スル所ニシテ、而シテ俗士懦輩ノ欣喜雀躍スルニ堪ヘザル所ナリ、是ヲ以テ風俗大ニ陵夷シ、廉恥ヲ破リ、美ヲ黻冕ニ致ザス（ママ）シテ虚飾ニ費シ、力ラヲ溝洫ニ致サスシテ利走家屋ニ労シ、盗賊ハ意ヲ縦ニシテ人ヲ誑ムキ、怪士ハロニ蜜シテ服ラニ穿窬ヲ蔵シ、既ニ白昼ヲ以テ暗夜ノ如クセント欲ス、実ニ実ニ悲シマザル可ケンカ、嗟呼、是レ何ニ者ノ猾児ノ施為スル所ト言ハンニ、近世ハ上ニ趙高・李斯・王安石ノ輩濫リニ高位ヲ覬覦シ、天朝ヲ誑サムキ下民ヲ陵ノキ、黜陟賞罰其処ヲ失シ、忠諫ノ道ヲ塞キテ、毎ニ常ニ便佞ヲ以テ色容ヲ務メ、漫リニ家屋ヲ飾リテ民ノ膏血ヲ蔑シロシ、膝ヲ猫狐ノ外夷ニ屈シテ自得ヲ為シ、禍乱災害天変ノ見ル、モ曠乎トシテ識ラザルヲ為ス、是ノ故ニ下サル者、豈ニ従ハザル可ケンヤ、習ハザル可ケンヤ、詩ニ曰、赫々師尹民俱ニ瞻爾保国者可不慎乎、臣巖穴ニ伏シ衡茅ニ臥シ、病苦交モ身ヲ攻ムト雖トモ慨難泣泗漣漓セザル能ス、而シテ又下ニ華士少正卯ナル者起リテ、上ミ　天威ヲ恐レス、下万民ヲ鼓シ、虚偽ニシテ以テ党ヲ聚ツメ、学非ニシテ而シテ博ロク行ヒ偽テ、而シテ堅ク言文ニシテ、而弁居処奔走、以テ蠢民ヲ煽動シテ怪説偽談ニ習ハシメ、大ニ与党ヲ編シテ我カ正大醇々ノ道教ヲ破リテ君臣上下ノ大典ヲ無ミシ、自由ヲ唱ヘ民権ヲ説キ、彼ニ団結シ、此ニ聚構シ、暴行不羈之レニ重ヌルニ、浮屠・祆教ノ徒、又相ヒ頡頏シ、衆ヲ争ヒ民心ヲ蠱惑シテ夷蛮腥風ノ域ニ入ラシメントス、嗟々今日ノ如キ群陰并ヒ長テ上下閉塞シテ天地否ト為リ、群陽其処ヲ得ス、日々隠避シテ天山遯ト為リ、実々鬼神モ大ニ憤悲スル所ニシテ、而シテ　皇国ノ至大変為ルコト、是ヨリ大ナルハナシ、故ニ彼ノ外夷ノ窃ニ低語シテ相ヒ賀スル所ナリ、於戯亦慨セサル可ケンヤ、於戯亦慨セサ（ママ）可ケンヤ、今日ハ是レ如何ナル日ソヤ、抑モ々又二十三年ハ如何ナル日ソヤ、苟モ　皇国　ノ士ニシ

テ而シテ数千歳ノ大沢ヲ頂ク者ノハ正気ヲ淬励シ、綱常ヲ扶植シ、名義ヲ正シ、忠孝ヲ励マシ、風俗ヲ一洗シ、邪説ヲ拭ヒ、異端ヲ遠サケ、以テ

神武隆盛ノ運ヲ興シ、国家挽回ノ功ヲ期セズンハ有ル可ラサルナリ、未タ果シテ然ラハ即チ虞渕ノ日猶ホ回ス可ク、傾下ノ水猶戻ス可キナリ、臣曽テ之ヲ聞ク、正ハ必ス邪ニ勝チ、仁者ハ必ス敵無シト、而シテ天下ハ勢ニシテ勢ハ衆ニ付キ、勢亦多フケレハ人天ニ勝、勢少ケレハ天亦人ニ勝ツ、是又今古自然ノ勢ナリ、是故ニ予カシメ党ヲ崩シ、徒ヲ散シ、以テ禍変ヲ未萌ニ防カスンハ、異日必ス桑滄ノ大変ニ至ランコト指ヲ屈シテ待ツヘシ、故ニ古ノ君子ハ能ク幾機ヲ見テ以治乱興亡ノ兆ヲ識ル、易ニ曰、知幾其神乎、幾者動之微吉之先見者也、君子見幾而作不俟、終キ日ト惟君子素ヨリ之ヲ数十年前ニ識ル、而シテ予カシメ之カ備ヘヲ為ス、故ニ事至テ而テ怪マス、難来テ而シテ懼レス、唯俗吏庸凡ノ士ニ至テハ其ノ変禍ノ已ニ形ル、ニ及ンテ始テ狂惑、戦栗手足措ク所ヲ知ラサルナリ、蓋シ今日ノ禍変タル、実ニ明治三四ニ萌薛ナセルナリ、是ヲ以テ

殿下　至誠内ニ自ラ抑ユルコト能ス、忠義慨切内ニ自ラ堪ユル能ス、　雷怒ヲ懼レス、忌讒ヲ憚ラス、熱血満腔、凡ソ三四ノ血訴献策セラル、所以ナリ、然トモ惜ヒ哉惜ヒ哉ナ、不幸ニシテ

聖上　未タ春秋ニ富マレス、咫尺妖邪閉チ、怪雲遮ヘキリ、昼夜泣血タル杜鵑ノ丹誠モ遂ニハ　天心ニ徹スルコト能ス、詩ニ云、営々青蠅止于棘讒人岡極交乱四国、又云ク、英々白雲露彼菅茅天歩艱難之子不猶ト、語ニ云ク、小人在位君子在野ト、冠冕巍々タル彼ノ此ノ君子モ卒ヒニ天山遯ト為リ、金玉ノ策、鍼灸ノ器、龍胆ノ薬モ唯空ク孝士仁人ノ遺憾ト為リ、卞氏ノ玉モ徒々山磵ノ砂礫ニ混汚セラル、ニ及ンテヨリ、荏苒茲ニ十有余年、昨日ハ滴々タルモ今日ハ已ニ澎湃シテ、桑田将ニ益々碧濁海ニ変セントス、此時ニ当ツテ黄吻耳学ノ子モ先ヲ争フテ濁水ニ沈溺セント欲ス、嗟吁悲

シマサル可ケンカ、嗟吁悲シマサル可ンカ、　愚臣経真長ク巖穴ニ伏臥シ、蓐席ニ座シテ深ク自ラ反覆慷慨惟念スルニ堪ヘス、夜々懐耿トシテ寝ヲ安ンセズ、唯肱ヲ換摩シテ幽室ニ困レムノミ、是ヲ以テ聊カ他年思慮スル所ノ微衷ヲ写シ、茲ニ階前千里、門外万里ノ典ヲ破リテ以テ砂少タル三愚策ヲ　献上セント欲ス、伏而庶幾ハ、麟鳳ノ寛仁ヲ以テ暫ラク照聞ヲ垂レラレンコト、臣誠恐誠惶頓首々々、謹ンテ其一ニ曰ク、精一温厚ノ学館ヲ県下ニ設ケラレテ以テ四方忠孝醇正ノ士ヲ集メ、子弟ヲ教化シテ以テ大道ニ導カハ、希クハ仰テ天心ニ恥ヂス、伏テ地儀ニ愧チザルノ学ニシテ、風俗モ随カツテ醇正温厚ノ域ニ入リ、国体モ随ツテ古ニ復シ、邪説邪党モ随カツテ土崩潰散ニ至ランコト日ヲ計テ待ツヘキナリ、而シテ又彼邪党邪説ト濫リニ相頡頏誹謗シテ、而シテ彼ノ天狗党書生党ノ如互相ヒ区々トシテ腕力ヲ以テスルカ如キハ、則チ愚臣ガ全ク肯シ知ル所ロニ非サルナリ、唯従容道ヲ楽ノミ、泰然トシテ天ノ定ルヲ待ノミ、臣誠惶誠恐頓首々々、謹ンテ其ノ二曰、今大ニ　神道ヲ興隆シ、之ヲ海内ニ充満セシメテ以テ我カ　神州日ノ本ノ由来大道ヲ説カシメハ、人心日々悔悟シ、邪説邪党モ随テ消滅シ、狐夷モ随テ恐怖シ尊敬センコト頭ヲ擡ケテ待ヘキナリ、臣伏テ顧フニ今急ニ海内ヲ一化センコト此ノ　神道ニ非レバ、決シテ大功ヲ成スコト無シ、而シ又タ　殿下　ノ建言ニ非レバ決シテ此ノ一大事ヲ成就スルコト能ハザルナリ、易ニ曰、無妄往吉、又曰、不蔫有孚顒、若是故ニ今殿下ノ位ト徳ト至誠トヲ以テ直チニ闕下ニ至リ、　神道ノ醇ニ醇ナル大義ヲ説キ、名分ヲ正サ、ハ、仰ヒテ聖上ノ春秋モ既ニ前日ヨリ富メルヲ以テ疾ク　殿下ノ至誠ト忠義ニ感悟アラセラレ、咫尺ノ群蝿モ俄カニ頭ヲ叩テ非ヲ悔ヒ過ヲ悛メ、昨日晦塞ノ風雲モ忽チ清明ニ復シテ

天日ノ光リモ一層外夷マテ　徳輝ヲ放タルヘシ、剰サヘ万民ノ迷ヒヲ去リ、天下両端ノ士モ醒然トシテ鴨水ノ

流レニ一洗スルカ如ク　巍々タル富士山ノ猶特立シテ在リ、神璽モ愈々光輝ノ増サルアルヲ知ランノミ、仮令事ノ採用ニ成ラスト雖トモ

天心ニ恥チス、神明ニ愧ス、剰サヘ　殿下数十世ノ高祖ニ対シラレテ全ク愧怩無カル可キコト、臣一人ノミナラス、固ヨリ鹿児島県士カ能々ク存知スル所ナリ、臣誠恐誠惶頓首々々、謹テ其ノ三ニ曰、今日ノ急務ハ争諫立言ニ過タル者無シ、蓋シ争諫ハ固ヨリ国家一日モ無クンハ有ル可ラサル者ナリ、是以テ孔聖モ天子有争臣七人雖無道不失、其天下諸侯争臣有五人雖無道不失、其国大夫有争臣三人雖無道不失、其家士有争友則身不離於令名、父有争子則身不陥於不義ト、是ヲ以テ之ヲ見ルニ、君父不義ニ当テハ臣子以テ争ハスンハアル可ス、以テ諫メスンハ有ル可ス、苟クモ臣子ニシテ、君父ニ従フコト常礼タリト雖トモ、其不義無道禍難ヲ見テ坐ラ君父ヲ罪悪ニ陥ル、其ノ不忠不孝孰レカ之ヨリ大ナラン、故ニ忠諫ニ非レハ以テ国家ヲ保ツコト無ク、以テ　君父ヲ全フスルコトナシ、以テ　君父ヲ覚悟スルコト無シ、以テ名義ヲ正スコト無シ、故ニ機ヲ見ミ動ヲ視テ、以テ速ニ争諫建言アラセスンハアル可ラ非ルナリ、仮令一言隻字モ

天皇陛下ノ聖聴ニ聞達セズト雖トモ、又機ヲ見時ヲ伺ヒ隙ヲ見テ千章万条モ続々綿々トシテ血訴忠諫シ、以テ聖聴ヲ一洗シ、且ツ　殿下　永懐ノ本志ヲ達セラレスンハアル可ラサルナリ、　殿下終世マテ之レヲ達セラレスンバ、又之レヲ世子ニ達セラレスンハアル可カルナリ、又之レヲ世子ニ遂ケラレスンバ、又之ヲ世孫ニ遂ケラレスンバ有ル可ラサルナリ、大石良雄ノ志ヲ遂ケント欲スルヤ、実ニ是ニ居レリ、蓋シ君子ノ志業タルヤ、豈ニ一朝一夕ニ之レヲ遂クヘキ者ナランヤ、豈ニ亦一朝一夕ニ之レヲ止ムヘキ者ナランヤ、近世ハ史鰌魏徵ノ徒、陸贄胡銓ノ輩、莫乎トシテ絶ヘテ踵ナシ、是レ言路塞ル故カ、天ノ然ラシムル故カ、将タ時政ノ然ラシム故カ、将タ忠諫ノ人無キカ、臣実ニ之ヲ知ラ

サルナリ、伏而庶幾クハ少シク　雷怒ヲ緩ルメテ照監ヲ垂レラレヨ、臣誠恐誠惶頓首々々、臣曾ツテ　殿下ノ蓐上ニ辛苦ヲ致サル、ト拝承シテヨリ、日夜憂愁惟念慨歎惆悵シテ訴フル所ヲ知ス、感触万端言フ所ヲ知ス、今ヤ少シク旧快ニ復セラル、否モ知聞スルニ由シ無シ、臣伏テ庶幾ハ姑クモ少間モ司命ヲ放レズ、療治ヲ忽セニ為ラレズ、味養禁養百方至極ニ尽レスンハ有ル可ラサルナリ、厚ク自愛セラレズンハ有ル可ラサルナリ、伏而庶幾クハ　殿下　今ヨリ自ラ万斤ノ美玉ニ比セラレテ姑クモ少間クモ蓐上ト雖トモ、文昌星太公・武内宿禰ノ如キ人ヲ忘失アラセズ、少間クモ緩忽怠情アラセラレス、而シテ一時ヨリモ早ク、一日ヨリモ早ク宿昔ノ老当益壮窮、当益堅ノ健康自在ノ本日ニ復セラレテ鞍ニ拠リ鬘鑠ノ姿ヲ遊ハシテ、　愚臣軟弱鄙野ト雖其ノ轡ヲ賜ハリ、履ヲ頂、カセラル、ノ日ニ至ラセラレンコトヲ、而シテ愚臣

殿下　ノ既ニ知命ノ年ニ至ラセラレテ、如斯疎暴麁粗ノ野芹ヲ献上スルハ、実ニ恐懼々々千万至ル所ヲ知ラスト雖トモ、若シ万一神断ノ中摘ヲ賜ハレナハ、愚臣又恐懼ノ中ニ欣歓ヲ存スル所以ナリ、而シテ又愚臣一人ノ幸、且ツ欣歓ニ非ラスシテ　天下国家ノ幸、且ツ欣歓タル所以ナリ、伏願フニ　皇国ノ安危ハ今日　神断ノ如奈ニ在ルノミ、愚臣布衣日夜思慮ヲ尽シ、肝胆ヲ焦シ野芹ノ微衷以テ三策ト為シ、切ニ切ニ　殿下ニ献上スル者斯ノ如シ、愚臣実ニ震懼戦栗俯伏以テ威命ヲ待ツノ至リニ堪ヘサルナリ、誠惶誠恐頓首頓首百拝、

明治十五年壬午五月九日　　阿多郷士族
西田経真
謹言

文書原寸　縦　二〇糎　封筒原寸　縦二一・五糎
横三三六・五糎　横　八・五糎

追加一五三ノ二
（包紙ウワ書）
「上　西田」

（端裏付箋）
「西田経真」

臣経真誠恐誠惶頓首々々臣

前キニ艸粗野品ヲ顧リミス、三綱ノ要条ヲ建言セリ、然ルニ猶未タ今日ノ急務タル所ノ遺漏忘落アランコトヲ恐憂慷慨ノ至リニ任ヘス、謹テ又愚衷ヲ建上セント欲ス、伏而庶幾クハ、暫ラク　雷怒ヲ収メテ　神聴ヲ垂レラレヨ、臣謹ンテ惟ルニ夫レ国家綱紀朽チ、聖教廃タレ、邪党邪説四方ニ蜂起シテ億万ノ元元風ヲ破リ、俗ヲ紊シ、異端夷狄ノ荊棘ニ濫入スルヲ見テ坐ラ寂滅ヲ談シ安閑傍観、花ニ遊ヒ月ニ酔テ、身ヲ竹林ノ徒ニ埋ムルノハ却ツテ仰テ天ニ愧チサルカ、伏テ人ニ恥チサカ（ル脱カ）、将タ天恩ニ報スト謂フヘキ者カ、人臣ノ分ヲ尽スト謂フヘキ者カ、将タ身ヲ全フスト謂フヘキ者カ、将タ天ノ時ヲ待ツト謂フヘキ者カ、臣嘗ツテ是非正不正ヲ弁知セスト雖トモ、顧フニ天神　ノ好ミシ賞セサ（ル脱カ）所ナリ、孔孟　ノ高シト為サル所ナリ、是故ニ孔孟ノ遊説スルヤ、聖教廃タレ綱紀弛ヒ、邪党邪説ノ蜂起曼延スルヲ憤トホリ、難ヲ避ケス、危ヲ懼レス、水火モ難トセス、剣陣モ趑趄セス饑寒ヲ堪ヘ風雨ヲ凌ヒテ四百州ヲ奔走、輙軻スル所以ナリ、是ヲ以テ万世ノ下誰カ孔孟ノ名ヲ埋塗スルコトヲ得ン、然ルニ彼レ素ヨリ一姓ナルニ非ス、恩沢一ツナルニ非ス、相ヒ奪ヒ相襲ソフ偽帝ニスラ、猶且ツ斯ノ如シ、然ルヲ況ンヤ

皇統綿々万古一姓隕基動カサルコト、今ニ二千五百有余年ノ恩沢ヲ受ケ、生ヲ保ツノ人臣ニ於テヲヤ、実ニ孔孟ニ愧ツルノ甚キト謂フ可ナリ、然ルニ我カ

神州ノ真民タル者ハ纔カ手指ノ外ニ出ス、吾レ先ニト夷狄ノ腥風荊棘ノ域ニ入ラント欲スルコトハ、臣前ニ前章ニ陳上スルカ如シ、然ラハ則チ此ノ風俗ヲ変化シ、民心ヲ醇一ニシ国体ヲ古シヘニ復センコト臣前ニ建言セシ、三条ニ在ラスンハ決シテ成功挽回ノ日ヲ見コト能ハサルナリ、恐レ多クモ　神断速カニ其レ之ヲ掬摘セヨ、夫レ方今ノ儒ヲ以テ自ラ居ル者ハ孔孟ノ本意ヲ

知ラス、聖経ノ本体ヲ立テス、大義名分ノ枢要ヲ識ラス、空文日々冗シテ教導ノ重キヲ思ハス、異端ヲ闢ラ(ク)ヘキ(脱カ)ノ大義ヲ知ス、況ンヤ自ラ国学者ニ居ル者ヲヤ、況ンヤ今日ノ如キ桑田碧海ノ大変ニ於テヤ、而シテ又方今ノ門閥名族ノ如キモ自ラ身ヲ尋常ニ倣シ、当今ノ風流虚声ニ賺カサレ、或ハ俗ニ陥リ、或ハ体ヲ変セラレ、数百年ノ　恩義モ日ニ疎遠ト為リ、苟メニモ聖経ヲ講セラル、ト云コトナク、却テ商売ト利徳ヲ争ハレントスルハ、実ニ慨歎スルノ甚シキニ堪ヘサルナリ、蓋シ常ニ争諫以テ是非善悪ヲ論シ、忠直以テ　公家ヲ扶持シ、文学以テ　主君ヲ教戒スルハ、其職其臣ノ分タルト雖モ、門閥威畹ノ如モ亦此ノ道ヲ尽サ、ルコトヲ得サルナリ、況ンヤ　国家滄桑ノ変ニ臨ンテハ千変万化風櫛リ、雨ニ沐シ、事ニ幹タリ、人ヲ御スルノ大任ノ門閥ヲ以テ却テ身ヲ尋常ノ列ニ貶セラル、コト、恐多モ　愚臣カ深ク自ラ慷慨憤激スルニ堪ヘザル所ナリ、伏テ庶幾クハ、前ニ陳上セシ所ノ学館ヲ建テラレ、門閥中ノ徳行ナル人ヲ其ノ幹長ト為シ、高邁純精ノ名儒ヲ以テ之カ師教ト為シ、聖経ヲ講シ、名義ヲ正サシメラレナハ、四方朝野遠近ノ忠孝ノ士風ヲ望ンテ刺ヲ投シ、人材日ニ蕃殖シ、孤疑両端ノ士モ醒然トシテ醒涼ノ域ニ入リ、邪説邪党モ随ツテ瓦解離散センコト、日ヲ計テ待ツヘキナリ、所謂日日ニ新ニシテ又日ニ新ルノ論ナリ、伏冀クハ一日ヨリモ速ク、一時ヨリモ早ヤク、咫尺列座ニ示議セラレテ土木ヲ起サレンコトヲ、伏而戦栗恐惶威命ヲ待ツノ至ニ任ヘス、誠恐誠惶頓首々々、

明治十五年壬午五月十八日　　阿多郷士族　西田経真　白ス

文書原寸　縦　二〇糎　包紙原寸　縦三八糎
横一〇九糎　横二八糎

邊一五四　鹿児島県士族旧持高地所券状下附ニ付政府ヘノ請願

寄持高地所分状受領請願ノ顛末及ビ同志諸君ノ思想

陳述アランヿヲ望ム書ヲ寄フ書

寄持高地所分状受領請願之儀ハ去ル明治十三年五月三日ヲ以テ同志八千五百有餘戸ノ諸君委任セラルヽ此ノ儀ヲ以テ地方長官ニ向テ請願書ヲ捧ゲタリ是チ諸君ト思想ヲ同フシテ請願スル第一着手トス是ヨリ先キ一地方一町村各自同盟ノ人ヒ連署請願スルアリトヽモ地方廳ニ於テハ明治九年三月故大山綱良君カ地租改正ニ付本縣内處分伺書ニ地租改正事務局総裁故大久保利通殿ノ認可等中第一條ノ趣ニ則リ寄高主カ地所ヒ有ノ權ナキ旨ヲ以テ指令セラレタリ這ノ伺書第一條中ニハ前零又給地高地ト唱フル名稱ノ地所ヲ支配シテ數百年來耕作スル名頃一組ニ名子一組ニ四五名ト稱スル百性アリ又自作地ト稱スル持地アリ此等ハ各自持傳ル地主ハ分状下附可然儀ニハ之ノ趣ナリ這ノ數百年來耕作スル名頃名子ノ數字調査ノ不納ニ出テ其實ヲ失フノ大ナル者ナルカ故ニ其地所ノ性質沿因ヲ糺シ其事實ト持主カ地所併有ノ確証ヲ挙テ正議アランヿヲ請願スト雖モ議案議ノ書ニ則リ高持主カ所有ノ權利ナキ者トノ趣ヲ以テ指令セラレタルカ故ニ明治十三年ノ春ニ至リ連合諸願

セント一緒同心シ鹿島神社敬會所ニ會議ヲ開キ同志諸君ト篤ク協議ニ亘リ深ク古今ノ源起ヲ探リ或ハ各家ノ古文書類ヲ組メテ其確証トスルノ書類ニ據リ論究スルニ所有權ノ確乎トシテ動スヘカラス爽フヘカラサルヲ探究シ而ノ前記ノ如ク十三年五月三日ヲ以テ諸願シタリキ然ルニ經令ニ於テモ尚ホ精密調査セラレ或ハ請願者中ニ數回質問討議セラレ遂ニ同年八月九日ヲ以テ請願書ニ副申シテ內務卿松方正義殿地租改正事務局総裁大隈重信殿ヘ申陳セラレタル大要ハ當縣內薩兒島藩士族寄家致所持候給地高地所ノ儀ニ付明治九年三月前縣令大山綱良從伺ノ上該給地耕作スル農民ノ所有地ト相定メ（給地ノ內自作高自作地作職地等ハ士族ノ所有地トス）地租改正事務ヲモ致着手迫々歎願ノ運ニモ立到リ居候處同十一年八月管下出水郷士族ヨリ右地所々有權ノ儀ニ付別紙甲印ノ通及出願候ニ付大山綱良指令至當ノ儀ト相認ムルニ依リ右經伺ノ旨趣ニ基キ朱書ノ通及指令置候處右指令ノ趣不致承服ネネ中零示寄各町村士族ヨリモ續々同樣ノ願書申立候者不仰候得共執レモ嘗然右旨趣ニ據リ致指令置候儀ニ有之候然ルニ今般中零管下各町村及ビ數郡ノ士族數代中ヨリ朝古書類ヲ添ヘ往古ヨリノ源因等詳細取調舊貫買録名帯候ト地券交換ノ

儀願出候ニ付尚ホ再考ニ及ヒ候處地租改正御施行以來地主定メ方ニ付テハ其原因各種ノ情實有之各府縣ヨリ經伺ノ赴モ不鮮然ルニ前件薩大山縣令上申ノ赴ハ細識ヲ不盡徹ニ相見ヘ殊ニ當廳保存ノ帳簿類ハ丁丑ノ兵燹ニ罹リ悉タ烏有ニ屬シ右高地事件書面中ノ處分ハ勿論前縣令代取扱ノ次第等尚ホ此上可取調證徴モ無之候ニ付再應下問ノ上右地所ノ原因等篤ト取調（別紙丁印管辦書戊印大山綱良及ヒ薩宮崎縣參事福山雄俶伺書等）申出ノ赴ニ據レハ薩廢兒島藩士族給地高ノ儀ハ從來官ヨリ扶米ヲ以テ給與セル他縣一般ノ樣縣ト大ニ種質ヲ異ニシ其原ニ遡レハ多クハ私費開墾ノ土地ニシテ貢賦ノ自由モ勝手ニ地選致シ且當藩ノ軍制タル兵役ヲ出スモ悉ク該地所ノ反別ニ據リ賦課セシ節ニ相見得從前藩廳ヨリ渡レ來リタル名寄帳ハ別紙古印ノ通ニ候處當藩近來ノ檢地後名寄帳引替ニ明治九年縣廳ヨリ下附セル券書ハ庚印ノ通反別何町何反（中略）其右書ハ當藩中檢地ノ結地所究竟候間券書渡置ネノ文句モ相見得加之別紙戊印前縣令大山綱良宮崎縣參事福山雄俶ヨリ追々經伺書中ニモ自費開墾ネネノ儀詳悉開陳セル如ク一種特異ノ地所ナルハ相違モ無之右等ノ事由ヲ以テ大山綱良經伺ノ上農民ノ所有ト致置候儀ニハ候得共前ニ陳スル如ク

士族中恐願ノ次第モ實ニ一理ノ存スルアリテ無餘儀相聞得前途生計ノ安危一般ノ休戚ニモ相關シ不容易節合ニ候就テハ他縣ニモ該地類似ノ地所アリテ所有權夫ヒ御指定ノ筋モ可有之候ニ付更ニ至當ノ御指揮奉仰度別紙書類各通相添此段相伺候也但地租改正ニ付テハ即今郡村ニ於テモ地價帳取調中ニテ地券ハ未タ下附不致候ネネノ赴ヲ以テ官史上村行英ヲ上京セシメ尚ホ其筋ヘ申陳セルヽ旨モアリタリト斯ノ如キ縣令ニハ士族ノ所有權アルヲ詳細取調ノ上確認セラレ大山氏カ細識ヲ盡サヽル故ニ相見得ネネ等ヲ具申セラレシニ明年十月廿五日附達第二一號ヲ以テ書面申立ノ赴其筋ヘ及稟議候處給地高ハ即チ知行縣高ニシテ名寄帳及ヒ券書等ハ其縣高ヲ証スルニ止リ土地所有ノ証ニハ無之候然ルニ九年五月第五百五拾四號（即チ前書明治九年三月地租改正ニ付稟議ノ書ヲ指サヽレタル者ナリ）示令ノ通現作人ヘ券狀下附候儀ト可心得旨指令相成候然ル此旨可相心得赴縣令ヨリ示達セラレタリ是ヲ第一回同志諸氏ト俱ニ請願ノ指令トス然レトモ來ヨリ滿足スヘキ御指令ニ非ラサルカ故ニ尚ホ深ク其源因事實ヲ探討シ而ノ同年十一月十一日ヲ以テ再願書ヲ縣廳ニ捧ケ極ルニ往昔ヨリ該地所ノ處分ニ關スル書類藩縣ノ令條等ヲ編輯セル鹿兒島日田縣

雖從縣令モ進述シタリ然ルニ縣令ニモ上京セラルヽノ好機會ヲ得ル尚ホ續々懇願シテ其筋ヘ願願者中嚴認スル旨ヲ申暢アランコトヲ望メリ然レテ經代三名モ續テ上京シ其筋ヘ源因性質ヲ陳述セレメリ此時ニ當テ縣令ヨリ同十二月六日ヲ以テ(前文參)更ニ別紙ノ通薩摩日田豫藩徽藩等相添願リニ歎願申出候ニ付偏ニ及熟考候處右高地所原因等ノ儀者先伺書中ニモ續述ノ通ニテ右地所々有セシ其明徴モ有之候ニ付此際今一應御調査ノ上愛其筋候樣更ニ御指揮仰度云云ノ赴ヲ松方大隈ノ兩鄕ニ上申セラレタリ如此地所々有セシハ其明徴モ有之トノ赴ヲ明瞭セラレタルハ縣令ニ於テモ確然士族中カ願願スル處ヲ保証セラレタルニ異ナラサルナリ然シテ縣令ニモ京地ニ於テ兩鄕ニ向テ篤ク申述セラレシヨリシテ調査ノ爲メ其筋ノ官吏六名ヲ派出セラルヽニ至レリ而ノ調査ノ官吏ハ同年三月下旬伊藤院筋一手ハ肝付郡ヲ巡回實地ニ就テ調査或ハ各鄕ニ在ル舊藩廳ノ令書類ヲ探閲セラレタリト我倫請願者ニハ直接質問セラレシコトナク縣廳ノ手ヲ經テ二三ノ疑ヲ問フレタリ而ノ歸京ノ後同年七月十四日租第五九八號ヲ以テ書面ノ赴其筋ヘ議ヲ盡尚ホ眞地ニ就キ調査ノ儀重テ稟請ニ及候末主税ノ官吏派出相成再應詳及調査候處給地高ハ土地ヲ併

セタルモノニ無之依テ其地ノ義務ヲ尽シ來リタルモノヲ以テ所有主ト相定ムヘキ儀ハ付客年九月第六百三十一號示令ノ通可相心得旨示令相成候条此旨可相心得トノ指令其ッ左ノ書面ヲ以テ說明セラレタリ薩鹿兒島藩士族給地高ノ儀各自祖先ノ開墾ニシテ高ニ連帶セルモノト陳述スレハ從來ノ門地割替ノ法アリ其割替アルニ當テハ該地ト官廩入トノ論ナク相混淆シテ更ニ割替ヲ爲スノ制ナリ故ニ今日ニ於テ該地ハ必ス士族ノ開墾ニ係ルト云フノ証據ヲ覩認メ得ス況ンヤ他ノ自作地自作高ノ如キ自稱自収ノ權ヲ有シテ其地ノ義務ヲ盡シ來リタル者トハ日ヲ同フシテ論スヘカラス加之弘化四年ノ藩令ニ御高ノ儀ハ治亂共御國役ノ根本ニテ諸士知行高モ同樣ノ事故實質等徵リニ取計候儀屹度御禁ノ事ニ候處大切ノ知行高自己ノ勝ト相心得先祖ノ勤功等ヲ以テ被下置候云云及ヒ明治三年ニ於テ近年給地高ト計リ唱相成候ニ付此節ヨリ軍役高ト被召換云云ノ令アリ是ニ因テ之ヲ觀ルモ土地ヲモ併セタルニアラサルヤ明カニシテ土地ハ全ク藩ノ進退左右スル處ニ係リ士族ハ唯其祿高ヲ收納セシニ外ナラス且今回添付セル書類ノ如キハ土地ヲ併セタル事既証ヲスルニ足ラサルモノトス云云ノ赴ナリキ這ノ說明書タルヤ素ヨリ事實ヲ誤認セラレ

シノミナラス弘化四年ノ令書ハ事實ヲ誤レルカ故ニ同十四年九月廿六日ヲ以テ再ヒ御指令又ハ説明書ノ誤レル處ヲ指シテ再願書ヲ呈レタルニ同月廿九日組第七七八號ヲ以テ書面願意ニ付テハ獄回其筋ヘ遂事議時ヲ及指令置候通ニ付此上於當廳指令スヘキ處無之候条本年七月租第五九八號示令ノ通可相心得トノ趣ヲ示達セラレタリ然リ雖モ素ヨリ敵服シ難キ御指令ナルカ故ニ不得已其筋ヘ直接ノ嘆願ニ外ナシト決論シ縣令ニ向テ直接願ノ添翰アランコヲ同年十月四日ヲ以テ相願シ處添翰ヲ下附セラレヤ故大藏卿佐野常民内務卿松方正義ノ両卿ニ向テ嘆願書ヲ携帯セシメ木藤宅明福島縣二名吐京シ舊藩主保証書ヲモ取副ヘ上申シ百方其筋ヘ哀願セリ其要領左ノ如シ前文略ス當家從來之方法請願之條々ト聊カ願願之趣無之且咱吁ノ如キハ素ヨリ町代之沼草ニ依リ名稱ヲ異ニスル例不鮮云云世之變遷ニ隨ヒ改正ハ有之候得共云云其原質ニ至テハ時々ノ名稱ニ不拘依然ト宛行位候モノニテ請願通所有地主有權ニ於テハ磨藩益黜遂毫モ制度改革仕候樣無之云云赴ナリ又舊藩吏ノ保証ノ太要：左ノ通

（給通高ハ七万石有セシル）

舊鹿兒島藩士族中貢賦致シ來リタルモノニテ其証証ハ則チ名寄帳ナリ最モ取扱上ニ於テ

七

ハ請願者中上申ノ趣意ニ相違無之云々赴キナリ然シテ本年一月十六日直達二二四号ヲ以テ内務卿山田顯義殿ヨリ左ノ赴ヲ地方廳ヘ達セラレタリ其縣管下薩摩國大隅國日向國各郡町村士族舊持高地所分狀受領ノ儀ニ付士族上原保介外六名ヨリ別紙ノ通當省ヘ直願候処右給地高所有權ノ儀ニ付テハ既ニ十分ノ調査ヲ尽シ客年六月十六日ヲ以テ地租改正局總裁連署ニテ指令並訓示ニ及候通ノ次第ニ候得共直願書ニ附添セル舊藩主舊藩吏ノ書面ニ陳述スル處ノ趣意ハ當テ調査セシ處ノ事實ニ相反シ候条右ハ別段証據ト事實トアルニ非ラサル以上ハ舊藩主舊藩吏ニ於テ如此証明ハ不相成筈ニ有之其邊筋ト取紛シ一ケ事實ニ就テ明確ニ答辨セシメ具狀可致此旨相達候トノ赴ヲ舊藩主家令ヘ縣廳ヨリ傳達セラレ又舊藩吏ヘモ同樣達セラレタリ因テ舊藩主ヨリノ答辨書左ノ如シ舊藩士族持高地所分狀受領請願數代上原保介外六名ヨリ直願ノ儀ニ付從二位島津忠義ヨリ添書而已ニテハ内務省ヨリ御調査ノ事實ト相反シ候間別段証據ト事實トアルニ非ラサル以上ハ舊藩主ニ於テ如此証明ハ不相成筈ニ有之依テ往復ヲ除キ十日間ニ限リ明確ニ答辨書具狀可致旨御達ノ赴承知仕則忠義ヘ申聞候處左ノ通申付候

八

一證書（新古名寄帳歴然トシテ今ニ存在仕候）祖先代ヨリ地所附與ノ家狀（則名寄帳ナルモノナネフ）ヲ與ヘ置キ時之御遠治革ニ從ヒ其書法變ヒ名稱ノ如キ枝葉ハ時ノ宜キニ應シ度々改正候得共地所附與ノ原實ニ至テハ祖先代ヨリ唐書畫編ノ際ニ至ル迄遺編トシテ傳更シタル儀曾テ無御座候實際取扱上ニ於テハ主任之書類ヘ委托シ置候故其他ノ証據等殘等ハ書藏庫内ニ存在シ當家ヘ保存不仕候

一事實（地所附與法依經トノ御セナル以上ハ時ヒノ改正ニ不拘原實存在スル著明ニ候）該地所々有創割後期ハ殆ント七百年ノ久シキ治亂ノ間ヲ經過シタルニ依リ其年歴等殘スルニ由ナク然レトモ度長ノ末地兵ヲ賦スルニハ各ヒ其土田反別ノ廣狹ヲ以テレ又近時ニ至リ士族ヲシテ治亂ノ間ニ仕役スル悉ク其運法ニ據ラサルハナシ是則チ事實ノ著明アル處ニ御座候右ノ通御答具狀可仕旨申付候依之御件トノ趣ナリ又書書寫ニヨリ左ノ通リ（地高地所家狀受領時願保証ノ儀ニ付御下問ノ復申元高貝島藩士族書持高地所家狀受領願願ニ付シ保証書添附仕候處右保証書ノ儀ニ付一々明確ニ答辨書取調上申可仕旨御趣ノ為遂未仕候御前私共現振上ニ於テ確認スル處ノ証據事實自地有之候得共今其原領ヲ掲テ左ニ開陳

九

仕候

一弟地高ノ儀地所併有貢賦ノ權ヲ附與セラレタル証據ハ現今ニ至リ各自所有スル地所坪付等ヲ明記シタル名寄帳ニテ是則チ地所併有ノ第一証ニ候事

一弟地高ノ内自費ヲ以テ畑地ヲ田地トナシタル時ハ增高ト相成候是則チ地所併有ノ第二証ニ候事

一撿地ノ都度々々各自所有ノ弟地高ニ應シ改正貴盛田候備有之是則地所併有ノ第三証ニ候事

一弟地高ノ内永損地トナリタル時ハ高主ニ於テハ全ク無高ト相成候是則地所併有ノ第四証ニ候事

一弟地高地ノ内長秋ニ輕リ田地破損ノ節ハ高主ヨリ依願貴盛田候是則地所併有ノ第五証ニ候事

一弟地高ノ小作人他ヘ出稼スル時ハ其高地主ノ認可証ヲ得テ〳〵書面ニ於テモ免許スル「節ハ又是則地所併有ノ第一事實ニ候事

十

一給地高ノ内畦歩分筆賣買スルモ高地主ノ聞届ニ任セ有之候是則地所併有ノ第二事歟ニ候事

一高地内ニ神社アレハ其祭祀料等高地主ヨリ支弁ス來リ候是則地所併有ノ第三事歟ニ候事

一高地所ニ候リ定額外ノ雜費類ヲ作人ヨリ相對ニ徴収セシモ有之是則地所併有ノ第四事歟ニ候事

一給地高地所ハ往古ヨリ士族中ノ所有地ニシテ作人ニ於テハ年々更換割替耕作セシメタルモノ故作人ニ於テハ全ク所有ノ權無之候是則士族ニ於テ地所併有ノ第五事歟ニ候事

右ノ外條々時勢者中ヨリ上申ノ通地所併有ノ權利ハ相違無之候仍テ今般御下問ニ付何モ証據事歟取調此段復申仕候也明治十五年三月八日(名前略)外ニ島津家々令内田政風ヨリ

諸令ヘノ書翰二通地所所有ノ權アル歟否ハ中古ノ事歟等ヲ詳記レ參考ノ爲當番主ノ保書ニ調フレタリ而ノ右復申書ニ縣令ノ副申左ノ如シ

當縣管下薩摩國大隅國日向國各郡町村士族當持高地所弥状受領之儀ニ付士族上原保介外

六名ヨリ御省ヘ直願候處右給地高地所有權ノ儀ニ付テハ既ニ十分之調査ヲ尽サセタレ共

年六月十六日ヲ以テ地租改正局録議場第ニテ御指令並諭示ニ被及候趣之次第ニ候得共直願ニ經附セル書面主管部吏之書面ニ陳述スル處ノ趣意ハ當テ調査セラレ事實ニ相反シ候條右別段証拠書ト事歟トアルニ非ナル以上ハ當事主當番吏ニ於テ如此証明ハ不相成當ニ付其後篤ト取糺ノ事實ニ付テ明確ニ答弁セシメ其状可致旨本年一月十六日付直地二二四号ヲ以テ御達之趣旨ニ付テハ夫々取糺仕候處別紙一二号ノ通答弁書且三号ノ通別陳書並出願書類類編ノ具状仕候元來該事件ハ去ル十三年八月九日公曲上申仕置候次第ニテ本ニ今回島津忠義方ヨリ答弁書ニ開陳スル通右地所ハ往古ヨリ廟議當時之際ニ至迄連々制度變更不致旨相見得士族中来ヨリ所有之道理ヲ有スル筋ト被存候ニ付事情調査仕候ハ參照可御評議ヲ遂ケセラレ至當之御指揮御下問被下度ネネノ趣ナリ然レトモ時期既代本當藩ハ在京所管ヲ神々百方參力スル所アリシニ國ヲ守リ本年五月十五日縣令ヨリ左ノ通リ達セラレタリ當下薩摩國大隅國日向國各郡町村士族當持高地弥状受領時期人員代士族上原保介外六名ヨリ別紙ノ通實願候地右ハ可採用モノニ無之候条書面却下可致旨内

務所ヨリ教相違候条議書面却下此旨相達候トノ赴ナリキ仍テ一同種々ノ疑惑ヲ生シ達書ノ赴意足セサル耳ナラス實番主實吏ノ保証書等取添具申以来殆ント八个月ノ久キヲ経テ如此何等ノ御明示モナク書面却下セラレシハ乍恐御無理ノ御措置ト雖フニ外ナレトテ重テ御採用難相成理由明瞭ナル御指令ノ挙仰候トノ赴本年六月八日ヲ以テ縣廳ニ向テ懇願セシニ同七月三十一日租第一〇七〇號ヲ以テ書面願ノ赴ハ其筋ヘ稟請ニ及ヒ候処指令スヘキ限リニ無之候条其旨可相心得書面却下可致旨本年七月十七日ヲ以テ示達相成候条此旨可相心得トノ赴ヲ達セラレタリ而シテ縣廳ヨリ懇論説セラルヽ旨アリト雖モ何分安堵ノ難キニ依リ又本年九月四日ヲ以テ何等ノ御明示モナク書面却下或ハ指令スヘキ限リニ無之トノ赴丁寧安堵致シ難トノ旨且高地所ノ性質如何ソノ御認定ナリヤ或ハ實番主書吏等ノ保証書ハ全ク証拠ナキモノト御認定ナリヤ等ノ五ケ條ヲ掲テ御明示相成候様其筋ヘ御稟請被下度旨懇願セシニ同月十一日租第一二七〇号ヲ以テ書面願ノ赴ニ付テハ是迄數回其筋ヘ稟請ニ及ヒタルモ指令セラレナル儀ニ付當廳ヨリハ稟請難及候條此旨可心得トノ赴ヲ達セラレタリ如此縣廳ニ向テ懇願スルニ稟請モセラレス然リト雖モ何分父母

視スル縣廳ニ向テ哀願スルヲ外ナキカ故ニ尚ホ重テ客月十六日ヲ以テ所有權ノ要點御摘撰一同開眉安堵ノ御明示其筋ヘ御復申被下度赴ヲ以テ嘆願セシニ同月十九日租第二〇八五號ヲ以テ書面願ノ赴ハ難及詮議トノ赴ヲ達セラレタリ斯ク數回ニ及ヒ哀願スト雖モ縣廳ニ於テモ採用セラレス如何ントモスルニ途ナキカ如シト雖モ何分其筋ニ於テ御見定ノ盛明除ナル御指令ヲ仰スレハ安堵スルヿ能ハサルカ故ニ尚ホ深ク願スル処アリテ本月四日ヲ以テ重テ御明示ヲ仰クノ嘆願書ヲ呈シタリ其要領ハ數回ノ御達書或ハ御懇諭ノ赴ヲモ拝承スト雖モ何分敬服致兼候其所以ハ所有權ノ有無其筋ニ於テ御見定ノ盛明除ナル御指令ヲ仰度尤モ御明示御仰キ開悟安堵ノ與ヘラルヽハ御責任上ニ於テ至當ナラン乎請願者ニ於テハ御明示ヲ仰クモ敢テ非分ノ願ニアラサルヘシ之ヲ假令ヒ幾回ニ及ヒ哀願スルモ時ニ不敬捨置御明示御稟請御採用無之御認定ノ理由御示達相成候様其筋ヘ御復申被成下度赴ヲ上申セリ是レ第七回ノ嘆願ナリ然シテ尚協議ヲ竭レ其情實ヲ大書記官上村行徳殿ニ縷述ニ及ヒシカ爲メニ租税課長川井保厚ニ上京ヲ命セラレ同氏ニ此ノ歎願書ヲ携帯セレメ殊ニ吾們ノ著テ熱心セシ其實態ヲモ申述メラレ本年十一月十五日同氏ハ發程セ

ラレタリ以上去ル明治十三年五月三日以来本月四日ニ至ル迄八回ニ及ヒ懇願セリト雖モ如何ソセン曾ニ願書却下或ハ指令スヘキ限リニ為之トノ赴ク迄セラルヽノミ懇願ニ於テモ前書ノ如ク近頃ニハ其筋ヘ稟請モセラレス實ニ如何トモスルニ途ナシ我曹ニ於テハ原因理由ハ素ヨリ七百年来生殺與奪ノ權ヲ掌握セル書籍主ノ保証書等モ証據トセラレス何等ノ明訓モナキハ實ニ痛嘆堪レ谷レリ然リト雖モ熟考スルニ今ヤ公明至仁ノ政府人民ノ權利ヲ保護セラレ益々文明ニ誘導セラルヽノ際爭ダカ下情ヲ擁塞セレンヤ畢竟我横請願者カ枉神ノ未タ暢サヽル処ニアリ其暢サヽルノ根源ハ我曹淺見客明痴愚ニシテ分外ノ任ニ堪ヘサルニアリテ今ニシテ同志諸君ニ對シ謝罪ノ詞ヲ知ラス組調是極レリ然ルニ同ク処ニ捕レハ同志諸君其他ニ所見所論ノアルアリト果シテ然ラン然ルニ於テハ我曹窓ニ怡悅ノ至リニ堪ヘサルナリ實クハ今後各位各自ノ愚慮ヲ遂フレ暢サル、処アリテ其筋ニ於テ明訓見定チ仰キ開悟愛培セント欲ス我們ノ愚想ハ書籍主ノ保証セラル、猶第ト七百年ノ久シキヨリ廣漠荒野ノ際ニ至ル迄時々捜地門割等アリ或ハ名唱ノ變更アリト雖モ地所々有ノ權ヲ奪ヒシヿ曾テアルヿナシ然ニ其筋ニ於テハ御見定ノ廉何レノ点ニアリヤ我

曹疑團ノ尤モ大ナル所以ナリ仍テ其見定セラル、處ノ御明示ヲ仰カント欲ス懇願ニ於テ前書ノ如キ迷書或ハ論迷セラル、ノミ實ニ洪嘆ノ至リニ非ラスヤ仍テ○来ル廿日前九時ヨリ十二時迄鹿児島新地露島教會所ニ於テ同志諸君ト會同シ是迄ノ顛末ヲ告ケ而ノ尚ホ諸君各位各自ノ愚想所論ヲ親聞センヿヲ願フ

但一事故アリテ來會セサレ難キ方ハ所論書面ヲ以テ送致セラル、モ妨ナシ然レトモ成ルヘク勉メテ來會セラレ愚想充分ニ述ヘラレ而ノ暢力アランヿヲ願フ

一去ル明治十三年五月三日以来本年十月四日迄ノ間請願寄八通御指令書等七通其外請願書二添附セル書類數十通アリト雖モ甚タ繁雜ナルカ故ニ諸君來會ノ節熟覽ニ供スヘシ

明治十五年十二月一日

書持高地所參狀受領
請願者　総代

伊集院周助　鶴島　巌　湯逸中介
上原保介　木藤定明　市来四郎
永吉　實

右仝諸願書認人

岸　章經　柴瀬善藏　四本休左工門
田尻善左工門　高島一次　西原源之丞
中島宗右工門　竹崎小中太　鶴永直之丞
久木山泰藏　~~中尾新藏~~　松永剛左工門
友野矢市　石原次郎　土師庄十郎
田原仲介　高崎能高　寺尾新藏
日高一郎　伊藤一作　鍋田十末郎
有馬十右工門　肝付九兵衛　横口繁藏
佐多直臣　三原源左工門　森岡彌助

十七

市来次十郎　~~中尾新藏~~　山内賢助
横口直之進　木原正次郎　上村納之助
佐藤右七　島津貞吉　永田直八
寄山治右工門　迫篠七

十八

諸願書認書認郡各村町
書持高地所分取受領諸願人諸代　御中

冊子原寸　縦一八・五糎　横一二・八糎　九枚

追加一五四ノ二

旧持高地所券状受領請願ニ付議案

去ル明治十三年五月ヨリ本年十一月ニ至ル迄、凡ソ八回ニ及ヒ請願セリト雖トモ、採用セラレサルノミナラス、願書却下セラレタリ、然ルヲ是形リニ黙止得サルノ場合ニ立至レルハ、第一旧藩主ノ御保証書ニ当家従来ノ方法請願ノ条々ト聊カ齟齬ノ廉無之云々、或ハ所有地主有権ニ於テハ廃藩置県迄毫モ制度変革仕候儀無之云々、其他内務卿ヨリ下問ニ対セラレタル御答弁書ニモ新古名寄帳、歴然トシテ今ニ存在仕候云々等ノ明文ヲ掲ラレタリ、就テハ同志諸君ニ於テハ如何ノ思想、如何ノ感覚ヲ起サル、ヤ、斯ク迄確タル御保証書ニ対シ実ニ遺憾ノ至リニ不耐候、然ルニ這般幸ヒ県令ノ上京ニ際シ好機会ヲ得、不取敢嘆願書ヲ差出候末、尚上村大書記官エ向ヒ、請願者中平素偏ニ懇願セル事実旁縷述ニ及ヒタル赴有之候処、同官ニモ深ク其旨趣ヲ汲取ラレ、是カ為租税課長川井保厚該書面ヲ携帯、已ニ本月十五日上京セラレタリ、于時自然何等ノ御指令可有之、万一モ吾儕ノ希望スル適意ノ御指令アラバ、素ヨリ無論ナリト雖トモ、若シ従前ノ如キノ御指令アルニ於テハ、何分幾万士族ノ固有権理ノ得喪ニ関スル軽カラサル重大ノ要件ニシテ、殆ト三載ノ星霜ヲ経過シ、精力ヲ竭シ哀願シタル其精神、全ク擯ヒスシテ徒ニ無効ニ属シ候テハ、御迭ニ嘆息ノ至リニ付押返シ、何処迄モ安堵適意ノ御明示ヲ仰カンコトヲ要ス、如何、

冊子原寸　縦二六・五糎　横一九糎　二枚

追二五　市来四郎日記抄

久光公ヨリ旧邦秘録ノ命名其他

追加一五五ノ一

一久光公御実伝　　拾冊（約壱冊五拾枚平均）

一内訌記　　二拾冊（約壱冊五拾枚平均）

右　久光公御存命中、厚キ御沙汰ヲ蒙リタルコトアルヲ以テ、隠居仕事ニ編纂スル心得ナリ、中ニモ久光公御実伝ノ如キハ、安政五年斉彬公薨去ノ際御遺命御奉

承迄草稿成レリ、

又内訌事件ハ久光公御存命中拝承ノ事柄、今日ノ史伝ニ載スル所ニテハ御勲蹟ヲ汚スコトアリテ、四郎聊カ当時ノ事情ヲ見聞記臆シ、或ハ春嶽公・黒田長博(溥)公・伊達宗城公御尽力ノ次第ヲ承リ、其材料モ已ニ三拾余冊ニ及ヒ居ルコトナレハ、充分取調置カン心得ナリ、

文書原寸　縦二四・二糎　横一六・五糎

追加一五五ノ二
(付箋)
「写

旧邦秘録

久光公御筆明治十九年六月十五日」

日記抄

明治拾九年六月拾五日曇

午后五時過、玉里御邸ヨリ御用封持セ来ル、是ハ過日正二位公江奉願置候編纂書名御見立被成下候様言上ニ及置候処、本日御家令江御下ケ相成候由ニテ為持被遣タリ、旧邦秘録ト御見立被下候、御筆ノ侭被相下候、誠ニ難在次第ニテ、実ニ旧邦ノ御機密ナル事実記載候故、右通御名付被下候トノ仰ナリトゾ、身ニ余レル難有、誠ニ千載ノ冥賀此事ナリ、

明治拾九年六月拾六日曇

磯御邸ニ出頭イタシ、御家令東郷氏江昨日御書名御下相成候段申出、然シテ従二位公江拝謁被仰付候間、右之次第共詳ニ申上候処、御満足被思召候、

正二位公書名御見立被下候御筆、東郷氏被申ニ、字体ヲ割リ小シテ是ヲ版ニ致シ、毎書ニ押候テハ如何可有之哉之旨被申聞候、如何ニモ左之事故其通取計候様申置候、

明治拾九年六月拾八日折々雨

拾二時ヨリ玉里御邸ニ出頭、　従五位公江拝謁、編纂書名御下被下候御礼御申上被下候様奉願候、尚編輯方ノ御咄申上、或ハ沖縄御漫遊日誌草稿入貴覧、緩々御咄申上、夫ヨリ御賄頂戴ノ後、　正二位公江拝謁、書名御下被下候御礼申上、且ツ東郷氏ト相談ニ及候外題

上版シテ相用度趣共モ言上致、且生麦ニ於テ英人殺害之事実御咄被下、夫等ノ御咄ノ終リニハ現今条約改正会議ノ件ニ付、御憂歎之御咄共寛々奉伺、午后四時退邸致候、

又文久元年西郷ヲ島ヨリ呼返シタル際、小松・中山・大久保等異論アリテ、予カ此節上京ハ尚不宜トノ事ニテ充分大論トナリ、翌日中山ヨリ西郷ヲ御前ニ御呼出シ被下、其不可トスル理由ヲ御聞取被下度ト申出候ニ付、其通翌日呼出シタルニ、御前ニハ乍恐地ゴロナレハ、充分諸事ニ御注意ノ上御踏出ニアラサレハ、事状ニ御暗ク、且ツ外方江ノ御気合モ有之、公武ノ間御趣意ヲ御貫キ之事可難出来トノ意味ヲ以テ種々様々ノ議論アリタリト、別冊親話記ニ記スルカ如ク詳ニ御説明被下之等ハ、世上ノ伝説史上ニ載スルコトハ甚タ稀ニシテ、或ハ誤謬ノ点甚タ多ク候、

又仰ニ、昔ヨリ三ケ国ハ貴賤共ニ人物出タルニ、其徳行ヲ記シタルモノ尠シ、只称名墓誌ノ小史アルノミ、其後人物モ尠カラサルナリ、近代小松・西郷・大久保・岩下如キ天下ノ人知ル処ノモノ輩出シタル、其為人ハ却テ他人ノ記スモノヽミ、畢竟文筆ニ拙キ故ナラン、中ニモ高崎・山田等カ如キハ其始末如何ナルカハ、予ハ其人物ヲ聞度思ヒシモ、其時分ヨリ灰(仄)カニ聞及フ処予ニ拘ハル事故、御附ケ人抔ハ家来共江厳敷申聞タルモノカ全ク聞及モナラサリキ、其輩カ為人モ人物ニ違ヒアルマシ、因テ三ケ国ノ人物伝ヲ古今共ニ記シ置度思ヘリ、予モ加勢スヘシトノ仰ヲ拝承、意外ノ仰余リニ難有奉存シ故、奉畏御請申上置候、

○旧邦秘録ノ下稿凡九百余冊（壱冊凡五拾葉）

右三拾三年拾月二日迫水久中等江引渡

冊子原寸　縦二四・二糎　横一六・五糎　四枚

遍五六　斉彬公？出馬御備人数書

御出馬御備

御城下七組諸郷三拾四組

私領七組惣人数

一上下壱万四千五百弐人

内（付紙①）（付紙②）士以上七千五百弐拾壱人

内御城下士千弐百六拾七人

（付紙③）諸郷士五千百八拾四人

私領士千拾六人

測量役絵師等弐拾人

御小人頭壱人

与力三拾四人

足軽弐百弐拾弐人

御小人五人

従卒弐千七百拾人

私領足軽弐拾八人

大工・鍛冶・石切弐拾弐人

御口之者以下御膳所働仕坊主水夫五拾九人

夫四千五拾九人

乗馬五百壱疋

内

御城下乗馬弐百九拾三疋

内

五拾弐疋騎兵方

大砲四拾弐挺

内

弐拾壱挺五百目

右同　七百目

西目東目長崎御手当、御城下備二組・諸郷二組ッ、之

惣人数

一上下千九百三拾弐人

内

士以上千三百五拾弐人

内

御城下士五百八拾弐人

諸郷士七百七拾弐人

与力拾五人

足軽七拾弐人

鍛冶六人

従卒五百六拾九人

夫三百九拾三人

乗馬三拾九疋
内
御城下乗馬拾五疋
大砲拾八挺
内
九挺　五百目
右同　七百目
二口合
上下壱万六千四百三拾四人
内（付紙④）（付紙⑤）
士以上八千八百七拾三人
内
御城下士千八百四拾九人
諸郷士五千九百五拾六人
与力四拾九人
足軽弐百九拾四人
従卒弐千弐百九拾弐人
夫四千四百五拾弐人
二口合
乗馬五百四拾疋

内
御城下乗馬三百三疋
二口合
大砲六拾挺
内
五百目　三拾挺
七百目　三拾挺
右之外調練場大門口・新波戸・弁天波戸・祇薗洲五ヶ所之御台場は勿論、其外御城下諸所之固有之賦御座候、

「（付紙①）
一物主六人大目附以上
一大砲物主壱人大番頭
一小物主并騎兵小頭拾六人組頭
一御使番拾弐人　」
「（付紙②）
壱万四千五百弐人
一日六合賦ニシテ三拾日分
中白米弐千六百拾石三斗八升
納米ニシテ三千五石三斗五升四合」

「(付紙③)惣籏数
百弐拾七本
内
三拾八本御旗本
六拾八本諸郷
廿一本私領　」
「(付紙④)一物主九人　大目附以上
一大砲物主　大番頭四人
一小物主并小頭弐拾弐人組頭
一御使番拾九人　」
「(付紙⑤)壱万六千四百三拾四人
一日六合賦ニシテ三拾日分
中白米弐千九百五拾九石壱斗四升
納米ニシテ三千四百弐石九斗九升壱合余」

文書原寸　縦一四・五糎　横一六二糎

遺二毛　皇基保護憲法制定ノ件

皇基保護ニ関スル大件

一万世不拔ノ大憲法ヲ制定シ、

天皇陛下全国ノ臣民ト共ニ之ヲ遵奉スルノ誓盟ヲナシ玉フ事、

一皇統ハ天祖ノ神勅ニ基キ万世一系タルヘキ事、

一皇子ナキ時ハ皇女ヲ以テ皇嗣トスル事、

一皇子皇女ナキ時ハ皇族中至親ノ人ヲ得テ皇嗣トナスヘキ事、

一皇国ノ土地ヲ外国人ニ売ル可ラサル事、

一兵馬ノ大権ハ天皇陛下ノ掌握スル所ナリ、一日モ佗人ニ借ス可ラサル事、

一皇族ハ幼年ヨリシテ海陸軍校ニ入リ、学業何々ニ至ル者ヲ以テ海陸軍ノ長官ヲ命ス、

一和戦ノ決ハ天皇陛下ノ特権ニアル事、

一天照皇太神宮ヲ皇城ノ中央ニ建宮スル事、

一勅奏判ノ諸官ヲ新ニ拝命スル者ハ、何々ノ誓文ヲ記シ、神前ニ於テ指血ヲ印シ誠意ヲ表スル事、

一大祭大節ニハ　聖上群臣百僚ヲ率ヒ参拝、当日人民ノ参拝ヲ許スル事、

一国家至重至大ノ事件ハ必ス大廟ニ於テ議決スル事、

一学政ヲ正ス事、

一皇国略史ヲ著作シ、官私学校入学ノ生徒ノ初読ニ供スル事、

一宗旨ノ所分、

冊子原寸　縦二七・五糎　横二〇糎　二枚

遠二六　安田轍蔵ヨリ浜町邸払下出願ノ件

（包紙ウワ書）「上申」

歎願上申

浜町御払屋敷之儀、最初上村源蔵を以余程以前奉願置、尚又過日風聞承知仕候ニ付、乍恐御直ニ奉願上候処、其節ニ至り候得は御勘考モ被為下候様被為仰下候ニ付、深く難有奉存候処、既ニ先日弥御払ニモ相成可申儀承知仕候ニ付、又候寔ニ奉恐入候得共、御直ニ奉願上候処、何程出金可仕哉被仰付候間、余り御直答モ奉恐入候故被為仰付候通、上納可仕候様奉申上候間、定而私江御払可被仰付候様心待ニ罷在候処、奈良原幸五郎より入札払云云申聞候ニ付、実は驚入候得共、河野立介を以尚又人情互慈之云云書面を以奉願上候得共、何之儀モ御沙汰不被為在候由承知仕候故、寔ニ奉恐入候得共一向歎願奉申上候、乍去迚モ私江御払下不為下候訳合モ被為在候得は、無是非次第ト奉存候間、迚モ入札モ無用ニ奉存候故、此節は一切取止可申奉存候、乍併無此上御仁慈を以如是奉歎願候情実不便ニ被為思食、万一歎願之通被仰付候得は、無窮之御仁慈ト深く難有奉存候、何分舌上万々上申恐縮之余り願意貫通不仕候故一紙奉差上、伏而御仁慈之程奉歎

願候、誠恐誠惶謹言、

九月一日　　安田轍蔵

御左右

御中

文書原寸　縦一六・八糎　横　九八糎　包紙原寸　縦二五糎　横三五糎

遠二五　暦者勤水間喜藤太「御移徙吉日撰定」上申

（包紙ウワ書）「御移徙吉日」

御移徙吉日

二月廿五日　巳刻未刻

三月朔　日　巳刻申刻

右之通相撰申上候、以上、

二月十八日　　御暦者勤　水間喜藤太

文書原寸（折紙）　縦一六・五糎　横四七糎

包紙原寸　縦二八・三糎　横四一・三糎

遠二六　江戸堅山八郎ヨリ京都小松帯刀ヘノ暑中見舞

不被捨置　尊書被　仰付難有拝見仕候、甚暑之砌御座候処、益御機嫌能被為入恐悦御儀奉存候、於爰元　御尊兄様益御勇健、諸御稽古御絶間なく御出精被遊　御事ニ御座候、扨其御地茂益御静穏ニ而、調練抔賑々敷御盛之由、無此上御義と乍恐奉大慶候、田中も着仕候得共、いまた緩々御目見不仕、夫故爰元之形行も御承知不被遊との御事、色々御繁務と奉心察候、爰元至而静穏申上程之事頓と無御座、不時ニ　御覗等被為在候間、歩行抔も出来不申候、四九之調練は朝五ツより夕け迄ニて、甚敷執行ニ御座候、随分能相揃申し候

御一条追々近寄、遠からす御発しニも相成可申、御座も結構ニ御成就ニ相成、　御引移も被為　在申候、御洩申上程之義も無御座、世上ハ例年よりも賑々敷、大川筋抔

余程繁栄之由、噂而已承計ニ而能々御洩申上事も当時ニ而は六ヶ敷御座候、御文り御品物抔御送りニも相成可申候事なから、則相届候様可仕、少しも無御遠慮被　仰聞被下たく奉存候、暑中御窺且貴翰之御礼為可申上、如斯御座候、

恐惶謹言、

六月廿九日　　堅山八郎　利器

小松帯刀様
御近習衆

追啓、乱筆を以前後不定之文面、甚以奉恐入義ニ御座候得共、宜様被仰上可被下候、扨先度御下り候砌、於京都ニ御頼被下候由ニ而、美人其後相知不申候間、肝付甚左衛門殿江尋越候処、此地江さし下し候段被申遣候間、諸所相糾候へ共頓と相知不申候、適々御心ニかゝられ被成下候御事故、万々難有拝領可仕候処、いか様之間違ニ御座候哉、甚残念至極恐入候仕合御座候、何卒右之処宜様御不都合不相成よふ御取成御頼申上候、尚書余追々御窺可奉申上候、以上、

御取次衆中

文書原寸　縦一六糎　横一一九糎

邊一六一　九鬼隆都ヨリ久光公ヘ

源頼朝真像入覧ノ件

（封紙ウワ書）（朱）「内呈　〇」　少輔隆都拝

〆　」

先日立花氏承合候処深所存有之、態ト差扣居候由、余人多御合力申度衆有之旨咄作得無覚束、此儀拝謁無之而は難申上候、其後御足痛等之御模様、如何大弓御案思申上候、

頼朝公真像借受入尊覧候、

其余短冊二枚入置候、委曲拝　顔之砌可申上候、頓首、

七月廿八日

文書原寸　縦二七・三糎　横三八糎

遺一六三　和漢兵卒ノ年齢、旗、貝、太鼓役等ノ件

和漢兵卒之年齢、旗、貝、太鼓役等之事

一本朝大宝令、二十以上為丁、六十以上為老云々、又年満六十免軍役、又天平宝字年簡之詔ニ、二十二以上為成丁、

一漢土三代農兵之時分ハ夫役・軍役共二十歳より六十歳迄、漢之時分ハ二十三歳より五十六歳迄を成丁、司馬晋ハ十六歳より六十歳迄、拓拔(跋)魏ハ十八以上六十五以下成丁、北斉ハ二十ニ而兵となり六十ニ而免ス、唐之初ハ二十一以上六十以下、玄宗太平之末ハ二十五以上五十五迄、宗明之賦役も格別之相違無之、

一西洋ハ二十歳より三十九歳迄、国中十一分之二より十二分之二之半ハを軍兵ニ定、又百分ノ一を取ルニ不過、雖然十六歳より軍事之館ニ入れて調練する法なり、又夫卒ハ四十歳を為極、

一西洋レジメントウ隊(二千人ノ備を云)に旗一本也、即国王之徴号あり、隊列之中ニ四百人之隊長是を捧く、外ニ五人之守旗兵を撰ひ旗隊を作シ、即旗を請取候趣かしむるに、老練之長官(二百人ノ隊長)戦兵二百人に太鼓等之楽者を伴ひ、旗を請取旗手ニ授ケ、隊列之中真ニ置、太鼓・ラッパを鳴シ整列之所ニ至れハ、馬上之者ハ都て下馬、歩兵ハ手銃を卸シ、屹と礼敬する法也、又又戦終て旗を収むるも前法に同し、万一戦ニ旗を敵に奪取られたる事あれハ、旗手ハ勿論守旗兵共格別官を落とし、其部伍ニ入事を禁す、又格別之勲功もありて其官ニ復する事あり、

一レシメトウ隊之鼓長ハ旗手同官なり、太鼓等之役者ハ銃兵同格之者ニ而、功ニより一等二等之階級有り、

一義家之旗指秩父十郎武綱、

一頼朝之旗指畠山次郎重忠、

一家康之貝之役大久保彦左衛門、

一忠久公御旗之役本田御旗指左衛門尉、

一氏久公御旗之役北原彦七郎、

一氏久公今川了俊ニ旗之故実を被遊御尋候、御答ニ御旗

之事は其陣に一流之外ニ無用事候云々、

一義久公御旗之役梶原新兵衛、御旗指瀬戸口藤兵衛、又御旗之役三原右京亮、御旗指色紙金右衛門、

右は太底之取調ニ御座候得共、旗を尊ひ数本不相用事は勿論、太鼓役等ニ至迄西洋さへ能々其軽重取分申候、尤多之旗を用候事ハ、天正此かたの戦専甲越流之事ニ候、旗指は勿論、貝太鼓役も余程格別之ものと相見得候、併天正以前之戦ニ太鼓用たるもの候哉、太鼓役之儀未相分候得共、家康之貝之役より致推考候へハ、定而士分以上ニは相違有御座間敷候、

文書原寸　縦一六・三糎　横二一〇糎

遺一六三　京都公卿実名書

竹屋正三位　光有
三室戸正三位　陳光（カヅ）
倉橋正三位治部卿　泰聡
清岡正三位式部権大輔　長潤
桑原　為政
沢　為量
唐橋　在光
山井　氏暉
高松　保実
錦織　久隆
藤井　行道
堤　哲長
北小路　随光
交野　時万
慈光寺右馬頭正四位下　有仲
油小路　隆晃
武者小路　公香
桜井　供愛
梅園　実紀
小倉　輔季
堀河　康隆

清岡（従四位上 大学頭）　長説　六条　有義
町尻　量衡　三室戸　和光
高丘　紀季　竹屋（左衛門佐 正五位下）　光昭
六角　博通　油小路　隆董
倉橋（左馬頭 従四位）　泰顕　梅園　実静
石野　基佑　四条　隆平
吉田　良義　藪　実方
樋口　静康　冷泉　為柔
園池　公静　唐橋　在綱
中園　実知　風早　公紀
高辻　修長　堤　功長
竹内　惟賢　梅小路　定明
慈光寺（大膳権大夫）　右仲　藤谷　為遂
五条　為栄　沢　宣種
長谷　信成　東坊城　任長
小倉　長季　桑原　輔長
外山　光輔　高松　実村

武者小路　実世
河鰭　実文
三室戸伊勢権介　和歌治光
清岡　長延
　　光善
北小路蔵人　大江俊堅

文書原寸（折紙）　縦一二糎　横三四・五糎　二枚

遍二六四　御陵修補ニ付戸田越前守ヨリ幕府ヘノ建言
（端裏朱書）「壬戌」

別紙

御陵御修補被　仰出候得は、私儀為冥加右御用相勤申度、全数代之御高恩ヲ奉報度微衷ニ御座候、尤右御入用筋之儀、

公辺御散財不相成様家来共江申付工夫為仕度、私儀茂元来勝手向不如意ニは御座候得共、斯る御時節御為筋ニ相成候儀ニ付、如何様ニ茂力ヲ尽し、一家中粥を啜候共尊敬心切ヲ心懸、修補可仕候、尤

公辺御役人御出張ニ而は彼是御手重ニ相成、御入費茂不少、又

御陵被馬（為）在候国之村里之場所之者共自然迷惑可仕、私江被

仰付候は重役共先立、風雨寒暑ニ茂苦心奔走仕、謹而修補可仕候、斯奉願候儀、是迄之流弊ニ習ひ、寸功を以後賞ヲ心懸候事ニ無之、又名聞之為ニ茂無之、全国家之御為ヲ存、此度被　仰出候流弊御一洗之一端ニ茂可相成哉之存込候儀御座候、尤尋常之御用筋ニ而は兼々必至困窮之勝手向中々難相勤候得共、別紙ニ申上候通、国家之御為筋士気振起之基と奉存、又国持衆ニ対し候而茂御譜代之家筋ニ而此節一廉之御為筋不相勤儀、赤面之次第ニ付、必至之窮迫不顧奉願候儀ニ御座候、

且攘夷之節ニ至り候は、

御陵御用中ニ而茂早速先途仕、報国之働仕度奉存候、何卒微忠之処

御賢察被成下、
御陵御修補御用被
仰付被下置候は、冥加至極難有仕合奉存候、尤数ヶ国
数所之御儀に付、急之修補相整下(申)間敷、積年之丹精を
以成就仕候様心懸可申候、此段奉願候、以上、

戸田越前守

文書原寸　縦一六・五糎　横一四八糎

遺一六五　日本全国地図枚数覚書　久光公

一摂河両国二水合流図　八　一枚(朱、以下同ジ)「〇」
付城泉和江播丹紀淡、八国境一覧
一東都殿中略図　三　〃　「〇」
一浪速金城略図　五　〃　「〇」
一慶元両陣備建図(冬三枚 夏二枚)　五枚(六十八 六十九 七十一 七十二)　「〇」
一筑前国福岡博多略絵図　六十一　一枚　「〇」
一志摩国図　十五　〃　「〇」
一紀伊国細絵図　五十四　〃　「〇」
和勢之内紀州領附
一播磨国家島絵図　三十八　〃　「〇」
一蝦夷国絵図　三十六　〃　「〇」
一長門国萩城下絵図　四十七　〃　「〇」
一肥前松浦郡五島絵図　六十五　〃　「〇」
一常陸国大絵図　廿六下　〃　「〇」
一備前国〃〃〃　四十　〃　「〇」
一備中国〃〃〃　四十一　〃　「〇」
一備後国福山城下図　四十三　〃　「〇」
一河内国大絵図　十一　〃　「〇」
一和泉国〃〃〃　十二　〃　「〇」
一但馬国〃〃〃　五十　〃　「〇」
一丹後国〃〃〃　四十九　〃　「〇」
一丹波国〃〃〃　四十八　〃　「〇」
一近江国〃〃〃　廿七　〃　「〇」
一播磨国〃〃〃　三十七　〃　「〇」

一大和国〃〃〃　十　〃　「〇」
一摂津国〃〃〃　十三　〃　「〇」
一山城国〃〃〃　九　〃　「〇」
一伊勢国〃〃〃　十四　〃　「〇」
一近代内裏御築地構図　二　〃　「〇」
一参河国大絵図　十七　〃　「〇」
一遠江国〃〃〃　十八　〃　「〇」
一豊後国〃〃〃　六十二　〃　「〇」
一伊豆七島及相武房総海岸全図付無人島図　二十一　〃　「〇」
一越後国大絵図　三十四　〃　「〇」
一佐渡国絵図　三十五　〃　「〇」
一信濃国大絵図　三十　〃　「〇」
一上野国〃〃〃　三十一　〃　「〇」
一下野国〃〃〃（朱、以下同ジ）　三十二　〃　「〇」
「一武蔵国〃〃〃」　廿三　〃　「〇」
「一美濃国〃〃〃」　廿八　〃　「〇」

「一下総国〃〃〃」　廿五　〃　「〇」
「一相模国〃〃〃」　廿二　〃　「〇」
「一安房国〃〃〃」　廿四　〃　「〇」
「一甲斐国〃〃〃」　二十上　〃　「〇」
「一伏見桃山城郭之図」　六　〃　「〇」
「一二水合流図」　七　〃　「〇」
一中昔京師地図　一　〃　「〇」
一筑前国大絵図　六十　〃　「〇」
一淡路国略図　五十五　〃　「〇」
一阿波国略絵図　五十六　〃　「〇」
一伊予国略図　五十八　〃　「〇」
一讃岐国略絵図　五十七　〃　「〇」
一豊後国日田郡細見図　六十三　〃　「〇」
一土佐国略絵図　五十九　〃　「〇」
一周防国〃〃〃　四十五　〃　「〇」
一長門国〃〃〃　四十六　〃　「〇」
一肥後国〃〃〃　六十六　〃　「〇」

一肥前国〃〃〃　六十四　〃　「○」
一美作国〃〃〃　三十九　〃　「○」
一江府旧幕城郭図　四　〃　「○」
一安芸国略絵図　四十四　〃　「○」
一備後国〃〃〃　四十二　〃　「○」
一因幡国〃〃〃　五十一　〃　「○」
一石見国〃〃〃　五十三　〃　「○」
一出雲伯耆隠岐国〃〃〃　五十二　〃　「○」
一壱岐対馬国〃〃〃　六十七　〃　「○」
一尾張国〃〃〃　十六　〃　「○」
一駿河国〃〃〃　十九　〃　「○」
一若狭越前両国〃〃〃　三十三　〃　「○」
一飛弾国〃〃〃　廿九　〃　「○」

文書原寸　縦一六・八糎　横九四・五糎

遍二六六　詩人中島櫻隠ニ付

櫻隠先生中島規。字景寛。一字士成。号櫻隠軒。又有画餅居士錦荘翁之別号。著櫻隠軒詩集。鴨東詞。錦荘随筆。

出于天保三十六家絶句中不書何所之人長崎僑屋中雑題詩囊無一物筆無花歳晏空思鴨曲家野鶴閑雲能守否主人流落在天涯即知京地之人

文書原寸　縦三一糎　横九・五糎

遍二六七　伊勢神宮以下奉献米記録

伊勢両宮　二百石
内侍所　五拾石
石清水八幡宮　百　石
賀茂社　百　石
鴨　社　百　石
南都春日社　五拾石
城州松尾社　五拾石
城州平野社　五拾石
城州稲荷社　五拾石
般舟院　五拾石

泉涌寺　五拾石
城州 吉田社　三拾石
城州 大原野社　三拾石
城州 梅宮社　三拾石
城州 貴布禰社　三拾石
江州 日吉社　三拾石
祇園社　三拾石
北野社　三拾石
和州 大神社　三拾石
和州 大和社　三拾石
和州 広瀬社　三拾石
和州 石上社　三拾石
和州 丹生社　三拾石
和州 龍田社　三拾石
摂州 住吉社　三拾石
摂州 広田社　三拾石
勢州 伊雑宮　三拾石

尾州 熱田宮　三拾石
豊州 宇佐宮　三拾石
紀州 熊野社　三拾石
雲州 杵築大社　三拾石
総州 香取社　三拾石
常州 鹿島社　三拾石
信州 諏訪社　三拾石
筑州 筥崎宮　三拾石
筑州 宗像社　三拾石
筑州 香椎宮　三拾石
城州 上御霊　弐拾石
城州 下御霊　弐拾石
城州 仁和寺　弐拾石
和州 東大寺　弐拾石
和州 興福寺　弐拾石
城州 延暦寺　弐拾石

江州園城寺　弐拾石
城州東寺　弐拾石
城州広隆寺　弐拾石
城州水無瀬社　三拾石
和州東大寺大仏殿龍松院　拾　石
城州清荒神護浄院　拾五石
（朱、裏表紙ニアリ）
「壬戌九月」

横帳原寸　縦一八・三糎　横四七・五糎　三枚

遺一六　三潴県権令岡村義昌免官ノ件

三潴県
権令
岡村義昌

人物浮薄、然れとも木戸・伊藤・大隈等と別懇故ニ、聞得は多分可宜哉と甚懸念之趣ニ承候事、

参事
水原久雄

人物正義、県下人民ヲ愛シ曲直分明之所置、其宜キヲ得、数年県地之事ニ黽勉、夫故人心之纏宜敷、此人万一県ヲ放れ候様罷成候而は御都合不宜趣ニ承候事、

右は、岡村は一昨年拝命入県以来不体裁之取扱屢々有之、一同不心服区長共より県情今般内務卿迄上申、夫故態と出府之指令有之、去月廿日京着為相成よし候得共、いまた為何儀も達無之由、万一両人共転官、又は免黜様之事ニ罷成候而は不相済事候間、若此末内務卿より上告いたし、右之運共ニ候ハヽ、可相成は水原丈は居残之処、御注意被成下度内願仕候之事、同県士族蜂谷岩枕と申ものより仰頼仕候事、

文書原寸　縦一六・七糎　横六二・五糎

遺一六九　和歌一首　読人不知

見そなハす
　弓矢のわさに
　　おほかたの
たけきこゝろも

引おこすらむ

文書原寸　縦二八糎　横一九・二糎

邊二七　大砲ノ種類利鈍ニ付取調書

附剣銃切下ノ件

一先達而鑄造被仰付候弐百目軽砲弐挺、惣成就為仕、去月廿五日鑄製方より一挺は砲台取離、浜馬壱疋ニ駄負仕差廻、一挺は砲台不取離附属之侭四人ニ而別而軽く調練場まて担ひ届け、内実は三人ニ而担ひ宜候得共、釣合不宜無致方四人ニ而為担申候、只管軽便向ニは無申分、至極之良砲ニ可有御座奉存候、以来数里ニ運送候共、右之手当を以差廻候へは、聊も無遅滞相調可申奉存候、若砲手押越事ニおひても、三人ニ而安く運転可相成事ニ御座候、尤平地にて候ハヽ壱人片手押自在ニ出来申候、只今迄西目東目繰出御備組ニ相賦御座候五七百目筒之儀ハ、弾勢は成程強事候へ共、運送方殊之外手間取、五六人ニ而も自在引廻方難相成、剰山坂嶮道平地柔滑之処、且砂地ニおひては力不及、無致方押夫外ニ五六人も相重め不申は廻転も不仕、左候へハ右様之処にて、急戦変隊之場合ニは迚も放発相整兼、別而難事ニ御座候、其証拠ニは吉野原調練等之節も、先ッ在夫手当より仕砲一挺拾三四人賦付運送仕候、中々接戦之場所へ打手之人数而已ニ而は六ケ敷奉存候、右等之場合ニは此節弐百目軽砲は少人数ニ而自在ニ運送可相成、勿論放発ニおひても手早ニ相成、接戦急務之要砲ニ御座候、

一右弐百目軽砲、去月廿六日調練御見分相済候上、砲術練達之人数相掛、射場江的相建、百六拾間之距離より鉄実弾五発数玉弐発宛打方為致、装薬は重砲弐百目江賦与仕候分量を以て四拾目より三拾五匁迄ニ而打試仕処、一挺は弐発的中仕、三発ッヽ的近きニ弾着し、一挺は三発的近ニ弾着し、弐発ハ跳躍（トベリ）仕的下ニ弾着仕候、数玉之儀ハ弐挺ともに宜同様ニ有之、然処右薬量ニ而は、放発之折砲頭沈低（サガリ）して砲後身少々跳起（アガリ）仕候、此訳

合は全重砲之薬量を以軽砲ニ装用仕候理合御座候、依之再ひ四拾目・三拾五匁、或は三拾目・弐拾壱匁、拾八匁迄相試候得共、不相替右同様ニ有之、夫より拾五匁にて打試候処、聊も砲頭沈低不仕、弾道正敷弾勢も夫程相替不申候へ共、射場手前より跳躍し、然共実要向ニは無疑宜御座候、以来ハ右之考を以放発仕候得は差支之廉有御座間敷奉存候、西洋各国も当今野戦ニは軽六封度加農（壱貫弐百目ヲ云）を携用仕、重六封度砲よりも格別薬量相減、其上来侵之敵遠近ニ従ひ、装薬袋を四品ニ区別仕、一は百八拾七匁、一は五拾七匁、一は弐拾弐匁、一は拾八匁六分と相究御座候、然は軽重砲之薬量増減的例も御座候へは、杜撰之訳筋ニも無之、折角精密ニ取しらべ打試仕、其成行巨細奉申上候事、

一御先代様於江戸鑄造被仰付置候ボート（ハシ舟ヲ云）忽砲も、此節打試方仕候処無申分御座候、玉業は此節榴霰弾三発相試共ニ能出来、此業合は敵群集之中江打込候得は、放発并迸発ニ傷害し、弾中の小丸又人数余多を害し申候、製作之訳合は空鉄弾之内へ四匁玉百計を納れ、溶解硫黄を添入仕候得は凝結いたし、其上中心ニ空隙を取り発薬拾匁余を塡入仕、火門に鉄螺を廻施し、其上ニ錫鉛合和之物ニ而右鉄螺同様之仕掛を設け、是ニ火門を通し鉄螺之上に箝螺可仕者ニ御座候事、

一右之通弐百目軽砲ボード忽砲打試方仕候処宜御座候間、此内奉伺候向ニ而弐百目軽砲四挺・ボード忽砲弐挺、都合六挺ニ而大砲隊一組ニ被仰付可然奉存候、ボード忽砲は五七百目野戦筒よりも玉業宜御座候、

一剣筒之儀も当分は筒惣長三尺三寸ニ取究御座候間、此前按排向不便利ニ有之、台は只今通ニ而筒之長三尺ニ切縮候へは、別而按排向宜、殊ニ手軽相成可然奉伺、先達而一挺三尺ニ切縮於調練場ニ打試為仕申候処、三尺六寸筒・三尺三寸筒と共ニ町数之弾劣聊も無之、成田彦十郎江も右之通三尺ニ切縮め否可有之哉申聞候処、格別是社と申難事は無之段申出候、然は台ハ当分通、筒は三尺ニ御切縮有之候へは、別而手軽ニ相成打前ニ

も宜御座候、

一剣筒之儀は以前より磨きニ仕、兼而少々鑢入等御座候へは磨方ニ手間取、年分ニは相応人手ニも相及可申奉存候間、此節筒三尺切縮方被仰付候ハ、、無残色付ニ被仰付可然哉ニ勘考仕候、左候得は第一筒之保ちニ宜、且は銃も薄く不相成、其上欠量不仕、打前ニも掛念無御座候、

一於鑄製方出来相成候剣銃之剣之儀、形状ハ舶来通候へは、都而頭之方迄金焼仕、惣体之金焼ハ迚も鍛冶共難相成との事候而、無致方右通御出来相成バ、実場之所ニは些被向兼候付、此以来ハ剣は不相用様如何奉存候、譬へ銃頂江すけ込置候とも要用薄く御座候、西洋軍船図ニも剣は取去り候向も相見得申候へは、於此方は殊更無相用方宜御座候半、其場合ニは携刀相用ひ可然事ニ奉存候、

一胴乱之儀もかれ緒を肩ニ不負、急火管入同様之仕掛ニ相拵へ、皮緒を以腰間ニ巻付、真鍮金物を以動揺不仕様締付候へハ可然、左候へハ何も掛念無御座候、尤胴乱は弐拾四発入ニ相拵可然哉ニ奉存候事、

文書原寸　縦一六・三糎　横四〇七糎

遺一七　日向国諸県郡本庄村古墳発掘品図解

日州御料諸懸(県)郡本庄六日町百姓川添弥右衛門農業之節、古物に堀(掘)当り候一件、

一弥右衛門居宅より三町余南方しやうせんし原、畠の脇に高サ一間三四尺、廻り五六拾間計の丸岡有之、其竹木の根先畠江差入相障候ニ付切除之ため、且用水旁小溝堀通し置候、然処正月十九日朝、右溝浚として弥右衛門差越三尺計茂堀候得は一ッの穴に堀当り、則其内江入候処、長三間・横一間・深サ五六尺計の穴にて図の如く有之、最初は板にて栫たるものニも候哉、只今ニ而ハ都而土計ニ而、右形之侭空所ニ相成有之候、且元来朱塗ニ而茂候哉、今以四方は朱相残居候、其空処之内に鎧二領・鏡大中小三面・剣三本・刀七本・袋鑓

之ことき鉾二ツ・矢の根ことときの品并曲玉・小玉類余多有之、弥右衛門持帰候得共、其身百姓之事ゆへ何之思慮もなく、折柄土蔵修甫の砌にて右の品々鍛冶の者江持越、右鉄を以釘を作度旨申ニまかせ槌に当候処、今の鍛冶の手ニは及かたき堅鉄之由ニて、其沙汰茂相止候、

一本庄之来由は委難相知候得共、上古は御料を本庄并御庄と申たる之趣、彼地通俗に申伝候、

一六日町より十町余を経て、高岡深年村之内、上古伊東家支配之寺院有之、山伏面高善哉坊功によつて高岡の地に属し、今以面高真寿院持来候、其節之鐘も持伝来候、其鐘の銘に寛喜三年（至寛政元年八百年余）諸懸の御庄と有之候、中古ハ本庄六日町を高日村と申たる由申伝え候、

一安徳天皇入水、実は日州江御落居、本庄にて崩御之旨俗説に申来候、此説に就て堀出し候品は三種神器、其外御譲の品と申触候得共、其所寄無之候、

一堀当り候場所より二町余西に剣の壟（フカ）稲荷之社有之、犬之塚とも申触候、又犬之塚ハ剣之壟より東の方とも申候、何れ右之辺にて候、若安徳天皇陵を院の塚と申伝、又ハ犬の字を書違候哉、土氏（民カ）とものの事故文字に疎、院の字を犬之字に誤候哉、犬之字之音をとり剣之壟と申来候哉、先は院の塚・剣の壟両所之由、剣の壟は十握の剣を埋候場所、院の塚は陵と土俗に心得居候由、

一堀当り候穴は段々詮議も候処、彼是と趣を以て宝櫃を其侭埋たるものと相見得候、然れとも奥歯の如きもの一有之たる由、然とはいへとも陵とハ相見得難く宝櫃の説所寄近き欤、

右之外無所寄説は多く有之候得共、略之、

以上、

日州御料諸懸郡本庄六日町百姓川添弥右衛門農業之節堀出し候古物之正写之図

瑪瑙玉鼠色

瑠理玉十果　瑪瑙玉茶色

曲玉

白光アリ雲母ノ如シ

博古図曰、漢三神鑑、径五寸、重一十両有、半銘五十六字

古鏡之裏

大如図

博古図曰、漢虎龍鑑、径四寸一分、重九両、無銘

古鏡之裏

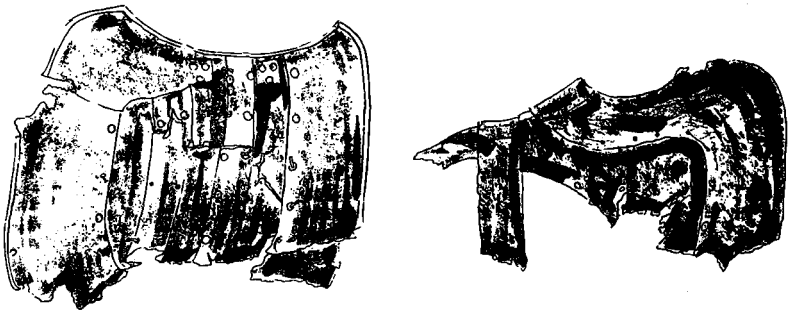
大如図

四神鑑

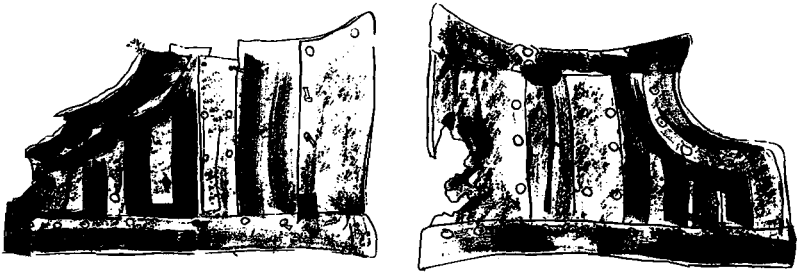
古鏡之裏

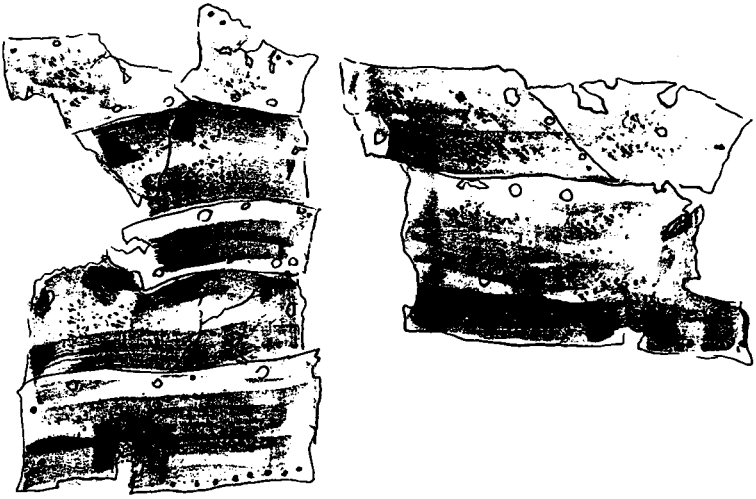
大如図

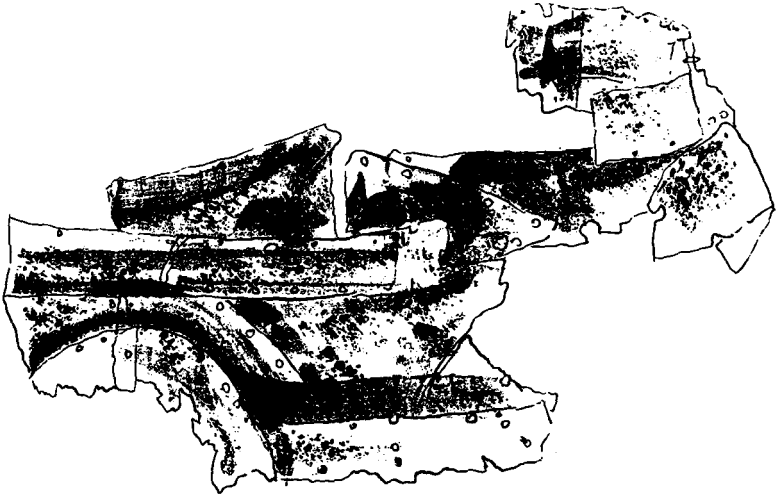
鎧ノ鉄札類之朽損シテ僅図ノ如残レリ、大サ何レモ如図

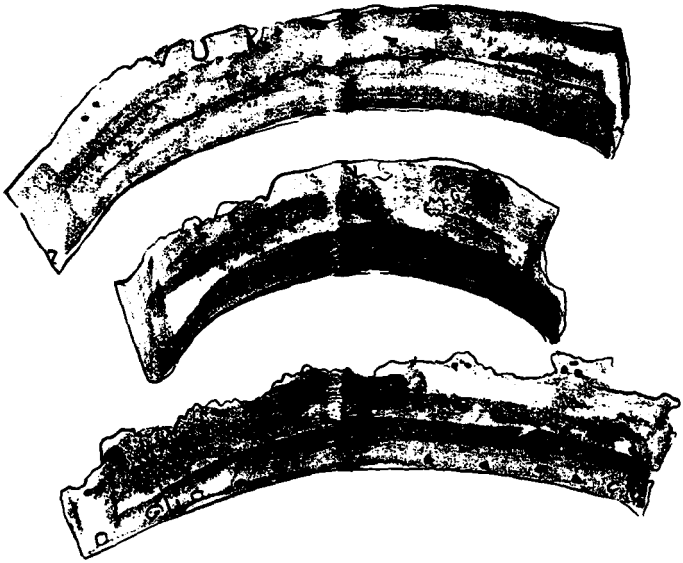


年代不明









年代不明

刃物之朽残リタレハ何品共不分明
少シ凸ニテ両刃ノ如ク見ユ
大如図

今之鑓ノ石突之如シ

壱寸計篦入有之

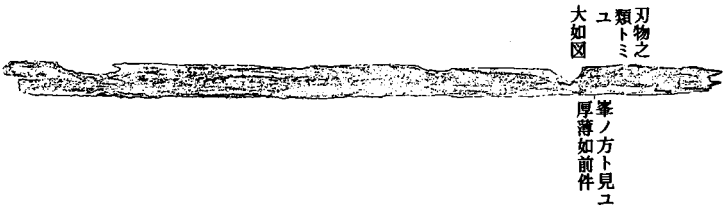
刀ナルヘシ
峯ノ方厚
所ハ三分計
モ有リ、厚
薄不定
大如図

刃ノ
方ト
ミユ
大如図

此間朽少シ、鉄亦慥也

峯之方トミユ
厚キ所二分モ
有ヘシ

此間朽少シ
前ニ同シ



本庄しやうせんし原ニ而諸品堀出候穴内之形り図

一土中之形図之通屋形ニ有之候得共せき板等朽捨り穴の形のミ如図有之候、

一穴上双方都而へんから朱之色ニ有之、落シ見候へは其通朱色ニ有之、落候下は黒土ニ而候、

文書原寸　縦二七・八糎　横八三六糎

遍三　窮士救助士気振興ニ付大番頭等ヨリ建言　二通

追加一七二ノ一

米拾壱万七千石余

但御高免本并給地出米、御蔵々納り米高

米壱万四千石余

但本行拾壱万七千石余之外、

右石数ニ相掛候壱石ニ付壱斗弐升位、当分之落米凡之石数

内

米七千石余

代銭八万四千貫文余

但石ニ付拾弐貫文替、金ニして壱万五百両余

右壱万四千石余之落米を半減ニして、壱石ニ付六升落之算当ニ而、右を御物江取納いたし、御払之上諸向書役・小役人等御心附并御人撰を以被仰付候下代・蔵役人苦労銀、又は桝取給分、其外下代・蔵役人方入払ニ付、諸雑用迄一切之用途ニ被振向置候様、尤御払米直成、年々高下不同茂御座候得共、凡之見当を以相立置申候、

残り

米七千石余

右当分之落米壱万四千石余之半方ニ而、以来取納被差免候得は、百姓共一廉之御救助ニ罷成可申候、

金九千五百両余

内

金七千三百五拾両余

但

諸向書役・小役人等江御心附被仰付候蔵方下代・蔵役人八拾四人分附属料、去ル巳年より去々未年迄三ケ年、平均

（付紙）「本文ニ付、去申年御心附被仰付候蔵方附属料之儀は、例外之高料ニ而、本文平均ニ難取用見除申候」

金千弐百六拾両

但御人撰ニ而被仰付候下代・蔵役人八拾四人分、壱人前ニ付金拾五両宛苦労銀

金四百弐拾両
但　桝取八拾四人分、壱人前ニ付金五両宛同断、
金四百七拾両
但　御蔵々諸雑用并桝取御心附料等巨細之儀分兼候付、
御払米之代銀高、凡之見賦を以相立置申候、
差引
金千両残り

文書原寸　縦一六・七糎　横一三三・五糎

追加一七二ノ二

先年より窮士御救之為、諸下目付・書役等繰廻を以被仰付候得共、当時ニ至り急変之御用ニ難立而已ならす、飢寒之苦堪兼候者茂有之由ニ付、以来文武之道相励、士風致振起、御救助之詮相見得候様被遊度被思召上候条、御家老中厚評議之上、大番頭・御小姓与番頭・御趣法掛之御役々等江吟味被仰渡、是非良法取調可申出旨御書取を以被仰出趣、謹而奉承知、誠ニ難有尊慮之程徹心肝奉感服候、依之深勘弁仕候処、斯ル大綱之儀は何れ本不立して枝葉間ニ逢之儀迄ニ而は、迚茂士風興起之趣法相立申間敷、然は邦本ニ相立候農事をすゝめ、耕耘之功ニ依り五穀豊熟之力を以国を富し、四民飢渇之苦難を相遁れ、各産業を励ミ、就中士は清廉之俗ニ化浴し、忠孝文武之道を重し、其芸ニ遊ひ候ハヽ、決而士風振起之境ニ至り候はん欤、然処勧農方之儀、以前より厚御手を被召附、天保之度御改正有之、夫より以来追々百姓困苦之廉々被相除候得共、今ニ至り下代・蔵役人附属勤ニ付、御蔵々取納米計方意外之取扱相残居、農家之大害此一事ニ限り候得共、右は是迄諸向書役・小役人等御扶助之道、外ニ無之処より曲而御変革ニ茂不被為及、夫形被召置候処連々流弊押移り、既ニ昨年附属之儀茂無例高料ニ而益聚歛(斂)可致増長勢ニ臨ミ、百姓塗炭ニ可陥は必然之儀ニ而士風之頽零実ニ歎息之次第、夫而已ならす、海防之御警衛、粮米之御用意専一之御時節ニ候処、右之

一弊より御手当存分行届兼候訳茂有之、旁以不軽御事候付、当今之機会を不被為失御心附、蔵方附属勤之儀以来御引取有之度、左候而諸向書役・小役人等御心附之儀は、等級ニ応し夫々相当之員数金子を以被成下、下代・蔵役人之儀は別段御人撰を以勤方被仰付、御扶持米并苦労銀被成下、勤方ニ付而は取納米計方を初、其外憲法之御仕向屹と御規定被居置候様、夫ニ付而は年々歳々余計太分之御入価ニ被為及候儀ニは候得共、右は別段取調、別紙を以申上候間何卒御英断之上、宜御所置被為有度、左候ハ、百姓共別而難有競立、混々農業相励ミ五穀出来増、公民豊饒ニ全備いたし候様罷成、窮士御取救之上勧善懲悪之御取扱、猶又

御徳政を被施候ハ、弥以士風振起いたし、乍恐

御国家永久御盛栄ニ被為至候はん欤と奉存候事、

（貼紙）

「本文下代・蔵役人・御小姓与より相勤候儀茂程久敷由ニ候処、時世押移、風俗相衰候ニ随ひ、以前より種々之悪習茂有之、尤米銭手形売買之計らひ、都而商人共江相馴候儀ニ候得は自然と士風ニ茂押移候儀共、夫々心得有之候面々は嘆息いたし居たる由候得共、御所帯方御難渋之砌、別段御手茂為付兼哉ニ候得共、幸今般別段之御金筋茂有之、殊ニ第一士風振起之儀被仰出、不軽御時節柄ニ候得は、縦令少々故障之廉有之候共、此節は以

御英断士風興起、百姓御救之為、本文通被相改度儀と奉存候事、」

文書原寸　縦一六・七糎　横三〇五・五糎

遺一七三　久光公へ献上ノ「筆」一本

（包紙ウワ書）

「上」

（筆略ス）

筆原寸　二四糎　一本

包紙原寸　縦四六・二糎　横三三・四糎

遺一七四　大和国南部五郡村高帳

（表紙）
「五条村附
宇智郡
葛上郡
高市郡
宇陀郡
吉野郡
五郡村高帳
」

葛上郡

一高百四拾四石九斗四升弐合　佐田村
一高弐百弐拾弐石四斗六升五合　小殿村
一高弐百拾弐石三斗三升七合　桜井村
一高三百三拾石四升八合　福西村
一高五拾八石弐斗壱升七合　水野村
一高百三拾九石五斗壱升三合　神通寺村
一高百弐拾六石壱斗弐升八合　舟路村
一高三百三拾五石六斗五升　朝妻村（伏見カ）
一高百七拾弐石弐斗八升四合　僧堂村（ともカ）
一高七百四拾七石六升六合　南郷村
一高百四拾三石八斗五升九合　下茶屋村
一高九拾九石三斗壱升八合　鳥井戸村
一高弐百弐拾弐石壱斗四升八合　東持田村
一高百六拾五石八升五合　西伏見村
一高弐百弐拾六石四斗弐升壱合　西北窪村
一高百九拾四石四斗四升三合　北窪村
一高百九拾八石七升壱合　高天村
一高百三拾六石七斗七合　極楽寺村
一高弐百拾五石八斗五升六合　井戸村
一高弐百九拾五石弐斗九升　名柄村
一高三百拾弐石五斗弐升　豊田村
一高百弐拾六石六斗九升六合　関屋村
一高八石四斗弐升　南宝村
一高四百石　条村
一高百弐拾石五斗八升五合三勺四才　今住村
一高三百八拾五石六斗弐升三合　稲宿村
一高六百四拾石七斗弐升　戸毛村
一高百弐拾弐石五斗六升四合　樋野村
一高五百弐拾九石九升壱合　古瀬村

一高三百五拾石　朝町村
一高三百拾六石弐斗弐升五合　奉膳村
一高拾七石三升六合　重坂新田
一高百五拾弐石四升　重坂村
一高弐百七拾壱石六斗五升弐合　東佐味村
一高百八石九斗壱合　内谷村
一高三百拾壱石八斗四升六合　南佐味村
一高弐百九拾四石三斗四升九合　五百家村
一高弐百五拾五石六斗三升六合　林村
一高百七拾四石八斗八升　〃　西木坂村

高市郡

一高六百八拾五石壱斗壱升四合　奥田村
一高四百五拾九石九斗六升壱合　吉井村
一高百五拾六石六斗七升四合　萩本村
一高千拾四石五斗七升弐合　常門村
一高九百六拾六石弐斗七升七合　〃　川西村
一高三百八拾八石四斗三升五合

宇智郡

西阿田村
一高百八拾七石七斗五升壱合　東阿田村
一高百弐拾七石五斗壱升四合　西佐名伝村
一高四百五石壱斗四升　東佐名伝村
一高百三拾三石九升八合　山田村
一高三百五拾五石九斗三升八合　原村
一高百六石四斗八升弐合　車谷村
一高百弐拾九石弐斗五升弐合　湯谷市塚村
一高百拾三石九斗七合（升カ）六合　六倉村
一高三百四拾五石壱斗三升弐合　牧村
一高四拾九石弐斗弐升五合　御山村
一高百三拾七石九斗六升九合　表野村
一高三百四拾弐石八斗弐升六合　中村
一高百弐拾弐石八斗八升六合　樫辻村
一高九百弐拾六石六斗八升五合　二見村
一高拾石六斗壱升三合　上野村
一高三百六拾三石五斗弐升弐合　大沢村
一高弐百九拾四石八斗八升弐合　上之村

一高三百五石七斗九升八合　上中村
一高弐百八拾五石八斗壱升五合　下中村
一高四百拾壱石四斗参升八合　釜ノ窪村
一高弐拾四石五斗五升　新町村
一高三百八拾壱石弐斗四升四合　五条村
一高百七拾石七斗三升九合　須恵村
一高百八拾壱石四斗　大島村
一高八百弐拾六石五斗弐升五合　今井村
一高千弐百九拾壱石五斗弐升三合　岡村
一高五百六石七斗三升八合　近内村
一高弐百九拾八石七斗弐升六合　居伝村
一高弐百三拾四石六斗三升八合　出屋敷村
一高四百六拾弐石五斗　〃小和村

宇陀郡

一高九拾三石八斗五升壱合壱勺　大沢村
一高弐百弐十石三斗八合三勺　稲戸村
一高弐百八石壱斗七升九合四勺　小和田村
一高六百九拾壱石七斗八升弐合弐勺　古市場村
一高弐百七拾壱石七斗三升四合九勺　松井村
一高百三拾壱石四斗四升五合　東郷村
一高百弐石七斗五升四合四勺　入谷村
一高三百九石五斗壱合六勺　下芳野村
一高三百石六斗三升八合四勺　上芳野村
一高百八石七斗七升三合八勺　岩端村
一高八百五拾四石壱斗六升六合弐勺　宇賀志村
一高四百拾八石六斗八升弐合五勺　佐倉村
一高百九拾石四斗九升八合　□(駒カ)帰り村
一高七百三拾石七斗八升弐合九勺　上田口村　下田口村
一高百九拾九石九升三合三勺　室生村
一高百六拾弐石四斗九升七合三勺　黒岩村
一高八拾弐石五斗八升三合弐勺　角川村
一高三百八石六斗壱升弐合　山粕村
一高三百弐拾四石六斗五升壱合　掛村
一高四百六拾五石八斗壱升五合九勺　長野村

一高三百九石三斗八升壱合壱勺　小長尾村
一高四百四拾四石弐斗壱升壱合弐勺　今井村
一高弐百七拾石八斗弐升九合六勺　塩井村
一高百八拾七石三斗弐升四合弐勺　葛村
一高四百三拾弐石八斗四升壱合三勺　伊賀見村
一高三百九拾九石三斗九升九合八勺　太郎生村
一高千六拾弐石六升弐合　神末村
一高七百石九斗三升弐合三勺　菅野村
一高五百六拾九石壱斗壱升壱合六勺　桃俣村
一高五百六石六斗七升八合弐勺　土屋原村
一高五百弐拾三石五斗壱斗壱合（升カ）　吉野郡広橋組　広橋村
一高六百拾壱石壱斗六升五合　四村
一高四百弐石七斗八升壱合　立石村
一高百弐拾六石三斗八升九合　栃本村
一高弐百弐石八斗七升五合　杣谷村
一高百七石三斗七升三合　椎原村

一高百五拾八石弐斗弐升　梨子堂村
一高百四拾壱石四斗壱升九合　石堂谷
一高弐百弐拾七石八斗六合　平原村
一高百六拾七石七斗六升三合　唐戸村
一高百三拾八石壱斗五升六合　尼ヶ生村
一高百拾弐石三斗九升七合　八津川村
一高百拾弐石三斗八升弐合　汗入村
一高百九石壱斗弐升四合　鹿場村
一高八拾九石六斗七升　小古田村
一高八拾弐石壱斗九升四合　南山村
一高三百弐拾七石六斗七升八合　黒木村
一高弐百七拾八石九斗六升九合　西山村
一高弐百七拾四石四斗八合　谷村
一高百六拾四石壱斗四合　長谷村
一高百三拾七石壱升六合　貝原村
一高百九拾壱石壱斗四升三合　丹生村
一高百六拾九石八斗六升七合　笠木村

一高七拾九石九斗九升弐合　桂原村
一高百拾六石五升八合　長瀬村
一高六拾三石九斗壱升壱合　御吉野村
一高七拾三石六斗八升八合　堂之原村
一高百五拾壱石五升八合　寺戸村
一高百五拾八石四斗七合七合（升カ）　粟飯谷村
一高弐百五拾三石六斗七合　西谷村
一高百三拾石八斗八升三合　鳥住村
一高五拾弐石壱斗七升八合　槙尾村
一高百七拾三石九升　脇川村
一高弐百五拾弐石六斗五升七合　中戸村
一高百七拾七石弐斗八升五合　赤滝村
一高百弐拾七石弐斗弐升　洞川村
一高弐拾九石三斗壱升九合　北角村
一高四拾六石五斗三升九合　中越村
一高拾四石弐斗壱升八合　南角村
一高四拾五石四斗四合　川合村

一高弐拾八石壱斗八升弐合　沖金村
一高八拾八石七斗九升八合　中谷村
一高弐拾六石五升弐合　沢谷村
一高弐拾九石七斗五升三合　小原村
一高四拾五石三斗九升三合　沢原村
一高百弐拾石六斗四升四合　日裏村
一高五拾弐石六斗壱升壱合　五色村
一高百弐石弐斗五升三合　坪之内村
一高百拾八石弐斗壱升五合　九尾村
一高弐百六石四升三合　栃尾村
一高弐百拾三石六斗八升壱合　和田村
一高百石四斗七升弐合　籠山村
一高九拾四石七斗八升八合　庵住村
一高百五石六斗五升弐合　山西村
一高百三拾九石九斗八升八合　広瀬村
一高五拾壱石七斗四合　滝尾村
一高百七拾七石九斗九升七合　塩野村

一高七拾九石五斗三升五合　塩谷村
一高千拾九石五斗五升壱合　下市村
一高百四拾四石四斗五升弐合　芦原村
一高六百六拾三石壱斗壱升七合　新住村
一高五百六拾四石四斗三升七合　栃原村
一高三百六拾石壱斗壱升壱合　百谷村
一高弐百拾石五斗弐升三合　赤松村
一高百九拾五石七斗六升五合　湯川村
一高弐百七拾石壱斗六升三合　平沼田村
一高百三拾三石六斗壱升　新子村
一高百九拾弐石八斗九升九合　湯塩村
一高百四拾五石八斗弐升五合　滝村
一高九拾石九斗弐升　江出村
一高百三拾七石七斗四合　神野村
一高九拾弐石七斗七合　向加名生村
一高四百拾弐石三斗八升四合　善城村
一高百七拾三石壱斗壱合　大堀村

一高弐百四拾弐石五斗七升九合　奥谷村
一高百六拾弐石八升六合　夜中村
一高五拾石九升七合　老野村
一高弐百五拾石八斗八升九合　北曽木村
一高九拾石壱斗三升四合　和田村
一高七拾八石九斗壱升四合　柳瀬村
一高弐百六拾石八斗三升五合　大日川村
一高三百弐拾六石八斗三升壱合　黒淵村
一高百拾八石壱斗六升四合　川岸村
一高百弐拾弐石壱斗七升弐合　城戸村
一高百六石五斗四升五合　陰地（陸カ）村
一高百弐拾四石弐斗弐升弐合　津越村
一高百弐拾壱石弐斗六升四合　大峯村
一高百七拾九石七斗七升弐合　檜川迫村
一高弐百九拾五石弐斗弐升七合　坂巻村
一高弐百三拾三石七斗六升弐合　西野村
一高百拾壱石弐斗三升八合　立川渡村

一高八拾六石五斗三升五合　永谷村
一高九拾九石六斗弐升壱合　本谷村
一高百拾壱石三斗八升　宗川野村
一高三百三石弐斗七升弐合　茄子原村
一高弐百七拾石三斗六升六合　平尾村
一高百九拾五石壱升弐合　川股村
一高九拾五石五斗五升九合　日裏村
一高百五石八斗八升七合　迫村
一高百四拾弐石八斗弐升六合　阿知賀組野々熊村
一高六拾壱石九升四合　瀬之上村
一高百六拾七石五升九合　岨村
一高六拾三石九斗八升九合　上村
一高百拾三石壱斗壱升五合　中屋村
一高弐百四拾八石六斗弐升四合　中村
一高五拾三石三斗九合　岡村
一高八拾石六升四合　原野村

一高四百四拾石九斗九升三合　下市より出作〆
一高四百拾五石七升七合　飯貝村
一高三百七拾六石四斗三升　丹治村
一高弐百弐拾九石六斗六升三合　橋屋村
一高百四拾四石三升　左曽村
一高三百六拾四石七斗壱升四合　六田村
一高五拾九石四斗五升八合　増口村
一高三百七石六升　上市村
一高三拾七石壱斗六升三合　左室村
一高百五拾石四斗弐升七合　御園村
一高八拾弐石五斗七升　象谷村
一高百拾石七斗六升弐合　菜摘村
一高百六拾四石七斗三升三合　国栖郷樫尾村
一高百弐拾七石弐斗九升八合　大野村
一高百九石九斗三升四合　窪垣内村
一高百弐拾八石七斗三升壱合　新子村
一高百九拾弐石八斗弐升九合　南国栖(栖)村

一高百五拾九石弐合　野々口村
一高百九拾四石壱斗壱升八合　小村
一高三百弐拾壱石三斗七升九合　東川村
一高百五石弐斗八合　西河村
一高百六拾四石七斗弐升五合　大滝村
一高六拾三石四斗六合　寺尾村
一高弐拾八石五斗七升弐合　塩谷村
一高百弐拾四石六斗六合　迫村
一高百八拾壱石三斗五升九合　高原村
一高五拾八石三斗五升四合　人知村
一高百弐石六斗四升六合　白屋村
一高七拾石六斗八升六合　井戸村
一高百六拾五石四升四合　武木村
一高七拾壱石弐斗六升九合　碇村
一高五拾七石弐斗六升　下田古村
一高四拾四石壱斗壱合　白川渡村
一高九拾弐石六斗六升弐合　中奥村

一高九拾壱石三斗弐升九合　和田村
一高四拾八石壱斗八升三合　神野谷村
一高七拾七石六斗七升五合　柏木村
一高五拾壱石六斗壱升壱合　上多古村
一高弐拾九石七斗七升六合　上谷村
一高弐拾六石九斗四升弐合　大迫村
一高弐拾七石八斗三升三合　伯母谷村
一高三拾石四斗弐升八合　入ノ波村

北山郷

一高五拾六石八斗八升壱合　西野村
一高四拾壱石六斗壱升四合　小瀬村
一高五拾三石六斗五升五合　栃本村
一高七拾三石七升壱合　川合村
一高百弐拾石四斗七升五合　白川村
一高弐百四拾三石九斗七升七合　池原村
一高百三拾四石六斗七合　池峯村
一高百弐拾八石六斗三升七合　南垣内村

一高百六拾五石五斗六升八合　浦向村
一高百四拾九石弐斗弐升三合　佐田村
一高弐百石四斗八升壱合　桑原村
一高四拾六石壱斗弐升八合　大瀬村〃
一高四百三拾九石八斗弐升七合　今木村
一高弐百拾五石八斗四升三合　楢井村北方
一高弐百六拾六石壱斗　馬佐村
一高七拾四石三升四合　北六田村
一高弐百弐石七斗壱升九合　新野村
一高百四拾四石八斗九升八合　檜垣本村
一高百弐拾四石六斗八升九合　畑屋村
一高九拾弐石七升八合　鉾立村
一高百九拾弐石五斗八升八合　大岩村
一高弐百三石六斗八升四合　西増村
一高百四拾弐石八斗八升八合　西子股村(俣)
一高百九拾石壱斗五升六合　東子股村
一高拾石三斗三升六合　矢走村

一高六百弐拾九石弐斗五升三合　下淵村
一高八拾八石九斗八升八合　楢井村南方
一高百四拾壱石六斗六升八合　宮滝村
一高三拾四石五斗三升五合　三津村
一高三百九拾五石三升壱合　河原屋村
一高三百弐拾石四斗三升八合　山口村
一高拾石八升六合　越部村
一高弐百弐拾九石三斗五升　佐々羅村
一高四百三拾七石四斗五升九合　中増村
一高四百九拾七石六斗五升壱合　田原村
一高三百八拾七石九斗九合　上片岡村
一高三百弐拾七石九升弐合　下片岡村
一高三百三拾弐石五斗壱合　栗野村
一高九拾五石八斗八升弐合　牧村
一高弐百七拾五石四斗壱合　大野村
一高四百八石七斗壱升三合　色生村
一高弐百六拾壱石弐斗五升四合　入野村

一高三百八拾五石九斗五合　津風呂村
一高弐百八拾七石弐斗九升壱合　木津村
一高百拾八石六斗弐升七合　杉谷村
一高弐百九石三斗六升八合　平尾村
一高四百七拾石四斗四升八合　大熊村
一高三百八石六合　谷尻村
一高三百九拾石四斗九升九合　平野村
一高拾弐石三斗三升四合　滝村
一高四拾弐石九升六合　萩原村
一高百七拾七石八斗壱合　鷲家口村
一高百八拾五石八斗五升四合　小栗栖（野カ）村
一高弐百弐拾弐石七斗六升九合　中黒村
一高弐百八石五斗三升六合　三尾村
一高百六石八升四合　挟戸村
一高八拾三石四斗三升九合　大豆生村
一高四拾六石九升七合　麦谷村
一高百五石三斗七升四合　伊豆尾村

一高五拾九石壱斗八升六合　木津川村
一高三拾五石六斗弐升八合　日裏村
〃
十二村郷之内野河組
一高千百八拾七石壱斗三升壱合　平川村
一　柞原村
一　中村
一　上村
〃
迫組
一　北又村
一　今西村
平村
弓手原村
大又村
〃
川波組
池津川村
中津川村
紫園村
立利村
〃

一高弐百五拾壱石弐斗九升五合

船川郷

中井侍所村
中峯村

一郷組

今井村
中原村
坂本村
〃小代村

野長瀬組

猿谷村
辻堂村
堂平村
飛養生村
宇井村
殿野村
引土村
清水村
閉君村
〃

十津川郷

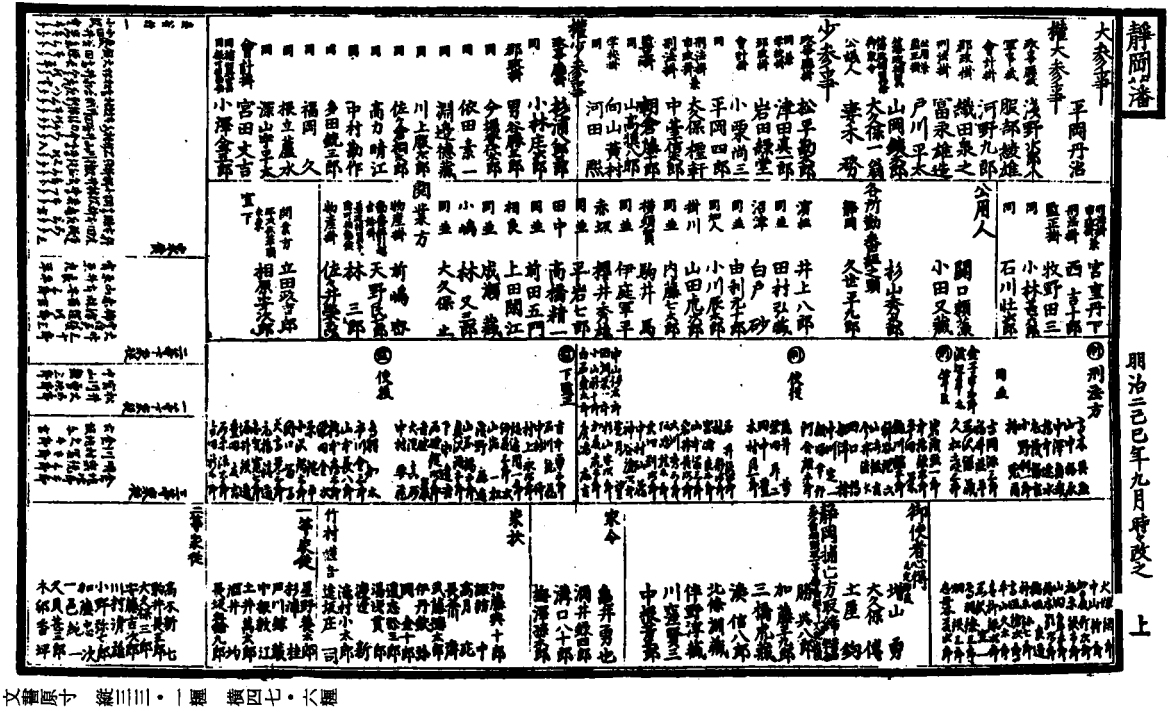
長殿村
沼田原村
小川村
宇宮原村
谷瀬村
上之地村
林村
高津村
山手村
内野村
五百瀬村
三浦村
杉之瀬村
惣谷村
篠原村
〃河瀬村

清之原村
川津村
風屋村
滝川村
内原村
野尻村
山崎村
池穴村
湯之原村
小井村
小原村
小森村
武蔵村
大野村
上葛川村
神山村
小川村

高滝村
山手谷村
折立村
玉井川村
竹筒村
七色村
込ノ上村
樫原村
山手村
谷垣内村
桑畑村
垣平村
猿飼村
垣内村
樫尾崎村
田良原村
長井村

冊子原寸　縦二四・二糎　横一八糎　三〇枚

玉垣内村
出谷村
今西村
中之村
大谷村
小山手村
小坪瀬村
迫西川村
上葛川村
中　村
下葛川村
那知合村
〃


靜岡藩
明治三巳年九月時改之　上
大参事
平岡丹治
權大参事
浅野治木
服部徳雄
河野九郎
織田泉之
少参事
松平勘解
津田真一郎
岩田録堂
小栗尚三
平岡四郎
太保樫軒
中堂復郎
朝倉摩郎
山高信八郎
向山黄村
河田熙
杉浦愛郎
小林庄郎
今福俊郎
依田素一
渕辺徳蔵
川上厚之郎
佐々木弘郎
高力晴江
中村勤作
多田銀三郎
福岡久
根立蘆水
源山寧太郎
宮田文吉
小澤金平
公用人
宮重丹下
西十郎
牧野田三
小林吉郎
石川壮郎
関口頼蔵
小田又蔵
杉山孝郎
久世平郎
井上八郎
田村弘蔵
白戸砂
由利光七郎
小川辰郎
山田虎郎
内藤七郎
駒井馬
伊庭軍平
樺井喜雄
平岩七郎
南橋精一
前田五門
上田関江
成瀬義
林又三郎
大久保土
天野民蔵
林三郎
佐々木栄
前嶋密
立田政之郎
相原孝次郎
刑法方
野倉
御使者心得
大久保
土屋
勇
偶
鈞
静岡捕亡方取締
加藤泰治郎
三橋求蔵
沈徳測蔵
伴野清蔵
川窪雪三
中根芳郎
家令
亀井勇也
潤井敬四郎
清口十郎
塩澤清郎
家扶
竹村徳吉
遠藤小文
遠坂庄司
一等医員
三等医員
小澤金平
宮田文吉
源山寧太郎
根立蘆水
福岡久
多田銀三郎
渕辺徳蔵
依田素一
小林庄郎
杉浦愛郎
向山黄村
河田熙
朝倉摩郎
中堂復郎
太保樫軒
平岡四郎
小栗尚三
岩田録堂
津田真一郎
松平勘解
織田泉之
服部徳雄
浅野治木
平岡丹治
大久保一翁
幸木
秀
山岡鉄舟
戸川平太
富永雄造
河野九郎
各所勤番
静岡
久世平郎
杉山孝郎
小田又蔵
関口頼蔵
小林吉郎
牧野田三
西十郎
宮重丹下
相原孝次郎
立田政之郎
佐々木栄
林三郎
天野民蔵
前嶋密
大久保土
林又三郎
成瀬義
上田関江
前田五門
南橋精一
平岩七郎
樺井喜雄
伊庭軍平
駒井馬
内藤七郎
山田虎郎
小川辰郎
由利光七郎
白戸砂
久世平郎
井上八郎
田村弘蔵
津田真一郎
岩田録堂
小栗尚三
平岡四郎
太保樫軒
中堂復郎
朝倉摩郎
山高信八郎
向山黄村
河田熙
杉浦愛郎
小林庄郎
今福俊郎
依田素一
渕辺徳蔵
川上厚之郎
佐々木弘郎
高力晴江
中村勤作
多田銀三郎
福岡久
根立蘆水
源山寧太郎
宮田文吉
小澤金平

文書原寸　縦三三・一糎　横四七・二糎

少參軍學校掛

向山黃村
河田熙
津田真一郎

○一等教授
漢　中村敬太郎

同格
漢　望月萬一郎

○二等教授
漢　宮原壽三郎
佛　長田鏈吉郎
英　名村玉八郎
同　外山捨八郎
佛　田中周吉郎
英　坂越五郎八
漢　長谷部吉志

○三等教授
漢　岡田源藏
同　冨山謙平
英　秋山鉦三郎
漢　長谷六三郎
英　安田春夫
佛　小野藤吉郎
漢　若林誠三郎
同　上山菅恒一郎
同　岐元一郎
同　滝川清三郎
同　古賀錦壽吉
前　日下

○世話心得
漢　清水治郎吉郎
同　岡村勇吉
同　吉田清三郎
同　松田鉦次郎

漢　芹澤藏
同　三浦小吉郎
同　杉浦憂藏
同　嶋立元
佛　櫻井豊次郎
英　名倉平
漢　花房吉
同　牧野駒吉
英　月田桂吉郎
漢　仁木叡次郎
同　山本欽三郎
英　筧慕次郎
同　小宮山勇次郎
佛　成島謙吉
同　田中文吉

○三等教授
漢　小田切鐵一郎
英　神原振一郎
佛　小出

學問所御組頭

木平謙一郎
同　勘方
中俣識
同　調役
中山董一郎
星野欽吉郎
同　調役並
中嶋莊一郎

同　調役下役
爲貝誼一郎
名林榮三郎
矢部彦造
同　海保吉
今田忠三

同　下番
服尾善藏
楊本崇次郎
諸野軍右衛門
小林利八
篠田彦次郎
中山今右
村瀧孔次

追加一七五ノ四

（包紙ウワ書）「製造銀」

（裏ニアリ）「正銀六分　目方五目六分

製銅四分　」

包紙原寸　縦三五糎　横二四・五糎

追加一七五ノ五

御手扣　　私事

先般一時憂疑切迫ノ情ニ勝ヘス、左府公御忠恋（廉）ノ御深慮ヲモ伺ヒ奉ラス、軽忽不敬ノ暫言ヲ以妄ニ尊厳ヲ奉冒瀆候段、退テ省悟仕汗縮恐懼ノ至ニ奉存候、追々貫日ノ御忠誠、頑愚ト雖モ御批答ヲ俟スシテ疑団感悟氷釈仕、実ニ難有奉存候、不敬ノ罪ヲ顧ス奉願候段、深ク奉恐入候ヘ共、聊奉申上度次第有之候間、御病間ノ砌拝謁被仰付被下候ヘハ難有奉存候、此段宜被仰上被下度奉願候也、

四月十二日

一大区三小区有楽丁二丁目
一番地松平忠和殿邸内寄留
稲川直清

文書原寸　縦一五・八糎　横二七・三糎

追加一七五ノ六

優渥ナル　勅語ヲ賜ヒ、臣等感激ノ至ニ堪ヘス、今日ノ時局ニ方リ、応分ノ力ヲ致スハ固ヨリ臣民ノ義務ナレハ、此際進テ微力ヲ尽シ、以テ聖旨ニ副ヘ奉ランコトヲ期ス、

文書原寸　縦一九糎　横三二糎

追加一七五ノ七

○大蔵省ヘ御指令案

伺之趣、第　号公布之通可相心得事、

但株式取引所ニ合併設立候義ハ不相成候事、

（朱）「株式取引所ハ別立可致事」

○公布案　内務省案文ハ掛紙之通、

従来各地方ニ於テ米油限月売買差許置候処、今般詮議之次第モ有之、右限月売買ハ一切差止候、尤自今人民結社米穀仕切売買致度者ハ、大蔵省ニ於テ検査之上可差許候条、本年百七号布告株式取引条例之方法ニ倣ヒ、会社規則取調、地方官ヲ経テ同省江可願出、此旨布告候事、

但同今限月売買有之候分ハ、当限月内ハ取引不苦候事、

右は大蔵省伺米油相場会社廃興処分之儀ニ付、内省務(ママ)省へ御下問之上、財務・内務法制合評、十一月廿四日上申候事、

文書原寸　縦二七糎　横三九糎

追加一七五ノ八

明治七年十月

大臣　　議長

参議　　臨時御用取調掛

内務省

内史

大蔵省伺統計表調製ノ義致審按候処、右統計表ハ全国ノ歳入出ヨリ貨幣并ニ公債ノ員数・戸口・地方面積・物貨産出ノ多寡・輸入輸出ノ贏縮・裁判訟獄軽重罪人ノ増減・邏卒民口ノ適否・外国交際ノ往来・海陸兵員及ヒ兵器・軍艦・商船・城堡等ニ至ル迄、凡一切財政・民政・兵政・司法等施行セシ既往ノ実跡ヲ淹(ママ)綜表出シ、以テ国家行政ノ緩急・立法ノ増減ヲ斟酌審定スルニ当テ、既往ニ鑑考シ将来ニ準擬スル一大必要ノ者ナレハ、太政官ニ職員ヲ設ケ之ヲ調製セシムル、固ヨリ政体ノ至当トス、且其実跡ヲシテ詳覈明備ナラシムルハ、則大検査ノ職務ナリ、本年三月正院中ニ政表課ヲ置レシ目的ハ、遂ニ将ニ此盛大ノ事業ニ立至ラムトスルノ基礎ヲ建設セラレシ所以ナルヘシ、然ルニ大蔵省ニハ尚検査・統計ノ二寮依然トシテ旧ノ如ク職掌二派ニ分レ、官制重複、啻ニ体裁ニ於テ

不適当ナル而已ナラス、冗費又少カラス、蓋シ是迄検査・統計ノ二寮ヲ大蔵省ニ隷セラレシハ、御維新ノ初内国ニ政規区分シテ、夫々一緒ニ帰趣スル者多カラス、是ヲ以財政・民政トモ同省ニ併管シ、而シテ検査・統計等ノ職掌両政ニ関係スルヲ以テ、自然ニ其支職ニ被据置シモ一時権宜ノ御処分ニシテ、永世不変ノ職制ニハアラサルヘシ、方今御政規モ追々其区分ヲ明カニシ、各其一緒ニ帰趣シ、旧冬内務省ヲ置キ、専ラ民政ヲ掌ラシメ、大蔵省ニハ専ラ財政ヲ掌ラシム、是今日ノ大蔵省ハ往日ノ大蔵省ト大ニ異ナル所以ニシテ、同省伺ノ援拠タル従前統計寮事務章程ハ、其改定スヘクシテ未タ改定セサル者ナレハ、後日迄確乎不易ノ者トハナシガタシ、且夫議政・行政・立法ノ三大権ヲ全有スルハ太政官ニシテ、諸省ハ其下ニ列置シ、分テ委托ノ権ヲ有ス、其之ヲ総攬スルハ太政官トス、所謂国家行政立法上一大必要ノ事件ヲ太政官之ヲ主管セサレハ、総攬ノ大権ニ於テ其体裁ヲ得タリト云フヘカラス、就テハ大蔵省中検査・統計ノ職務ヲ引揚ケ太政官ニ移シ、以テ大検査寮ヲ置キ、統計ハ寮中ノ一課ニ被定、而シテ各省使府県ノ施行スル所ヲ検査シ其実跡ヲ詳覈シ政表調製セシムレハ、政体上ニ於テ本末軽重ノ分別確然相立、以テ永世不変ノ職制タルヘクト存候、因テ大蔵省ニハ左案ノ通御指令ニ相成可然、尤右ノ旨趣御裁可ニ相成候ハ、職制章程ハ別段詳細取調上申可仕候、此段仰高裁候也、

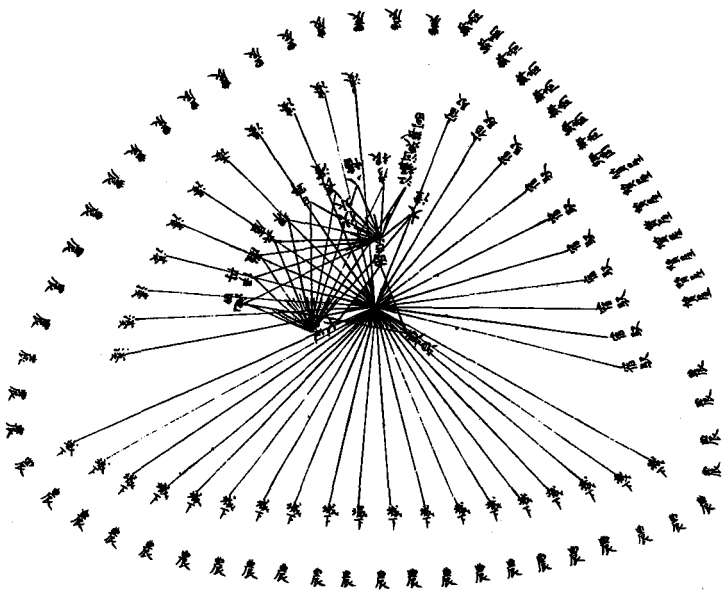
御指令案　　大蔵省

伺之趣、詮議之次第有之難聞届候事、

冊子原寸　縦二七・七糎　横二〇糎　三枚

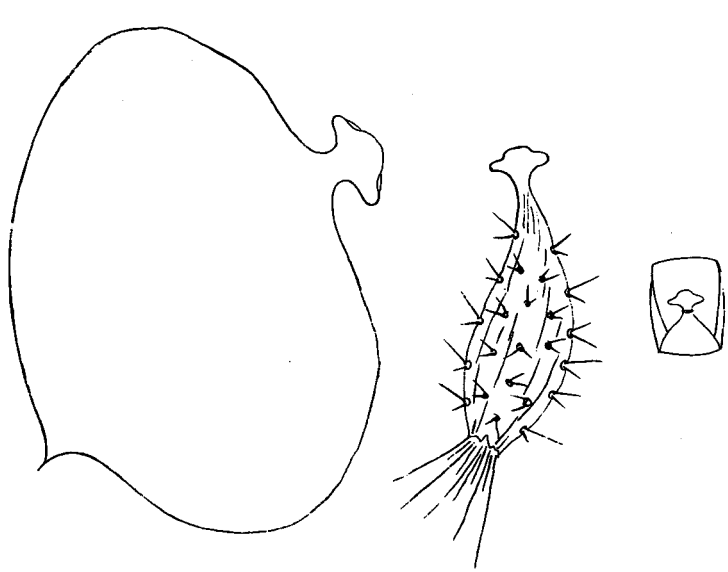
追加一七五ノ九

文書原寸　縦三四・三糎　横四七糎



追加一七五ノ一〇

文書原寸　縦三五糎　横四七・五糎



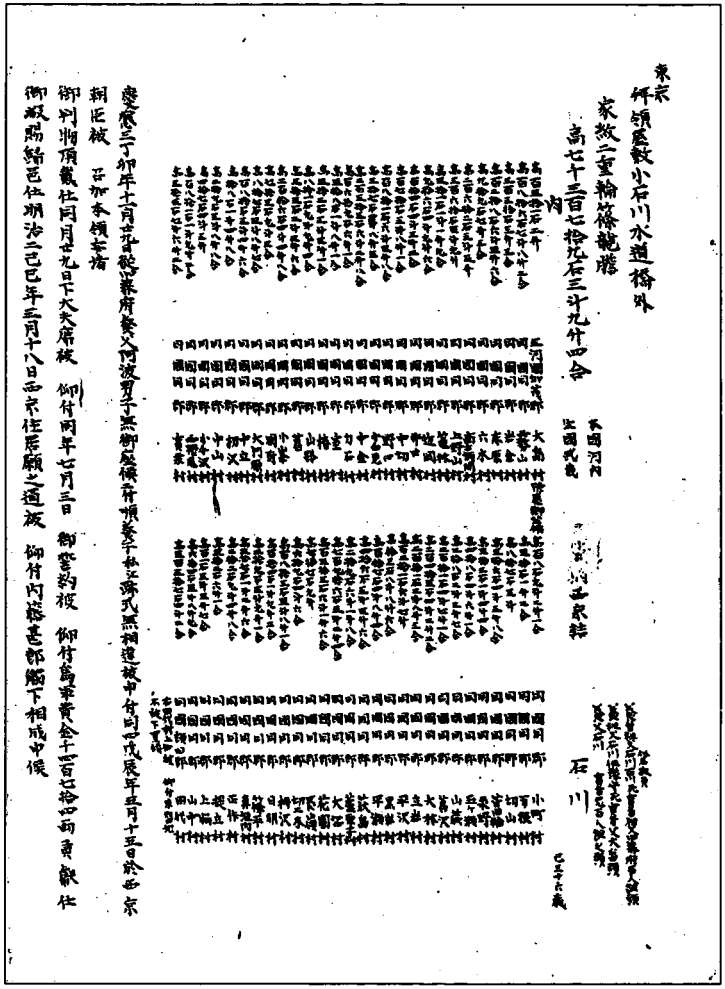
今般神官教職分離之發令相成候ニ付テハ在京同志中前後杞憂不尠該事實筆紙ニ盡シ難キ大節ニ有之就テハ將來　皇基ヲ維持シ國躰ヲ保護スルノ赤心ヲ以テ既ニ全國ノ有志ヲ團結スル爲メ謀テ及御通報候國教同盟會ヲ愈具隆シ永世不拔ノ精神ヲ結合シ後來ノ目途モ相立度其他百般及御協議度事情有之候間霜雪ノ艱苦ヲ厭ハス御出京御會同有之候ヘハ御互道ノ爲メ抃躍ノ至ニ候間此段開申候條御部下一般ヘ御報告希望候也

明治十五年一月

有志總代
吉岡德明
古川豐彭
芳村正秉
宍野半
本居豐穎
平山省齋
鴻雪爪

神官官國幣社
神道事務分局　御中
直轄教會

追申折田年秀ハ內務省御用掛拜命候ニ付通署ヲ除キ候



東京
仟領長敷小石川水道橋外
家数二重輪筬橋範疇
高七千三百七拾九石三斗九升四合
内
不国河内
生国武蔵
小石川
巳年生

慶應三丁卯年十月廿日能勢摂津守殿入阿波野子黒御屋敷幷順番等十枚之渡式黒相道被申付同四戊辰年五月十五日於西京
桐匠被　召加本領七拾
御判物頂戴仕同月廿九日下大夫席被　仰付同年七月三日　御警約被　仰付為軍費金千百七拾四両貸獻仕
御感賜錦邑仕明治二巳巳年三月十八日西京住居願之通被　仰付内務卿部屋下相成申候

追加一七五ノ一三

正院現費調

一金三拾四万五千三百七拾弐円　月給

一金壱万六千円　三大臣外国接待費

一金七千七百九拾三円八銭八厘　写字生并小使給料

一金四千弐拾五円　外国人給料

一金六万千六百八円六拾壱銭弐厘　院中諸費

但四月ヨリ七月迄現費平均高ノ内弐万四千円ヲ減

合計　金四拾三万四千七百九拾八円七拾銭

右定額常費ニ可相立分

一金四千四百円　御用滞在手当　現今渡高ニテ推算

一金五千百円九拾弐銭壱厘　恩賞　明治七年現費

一　明治七年現費無之　諸省官員正院御用ニ付内外出張旅費

一　明治七年現費無之　千円以上ノ営繕費

合計　金九千五百円九拾弐銭壱厘

右額外常費ニ可相立分

一金四万三千九百九拾九円三銭　岩倉家地所家作買上代

一金壱万円　右御買上ノ上営繕費凡見積

合計　金五万三千九百九拾九円三銭

右臨時費ニ可相立分

三費総計

金四拾九万八千弐百九拾八円六拾五銭壱厘

外

金八千九百七拾三円　印書局七月八月諸費相渡候分除之

文書原寸　縦二七糎　横四〇糎

第九拾七號　　使府縣

皇國地誌編輯例則幷ニ着手方法別冊ノ通相定候條右ニ照準シ精覈調査致シ地理察ヘ可差出此旨相達候事

明治八年六月五日　　太政大臣三條實美

追加一七五ノ一四

皇國地誌編輯例則

第一號

村誌

本誌・全村ノ景狀ヲ知ランヲ欲ス・故ニ本例ニ照準シ・細密ニ之ヲ記シ・遺漏ナカランヲ要ス・

某國某郡某村・枝村・新田・

本村・古時某郡某郷ニ屬シ・年號干支（年號干支詳ナラサル者ハ・年號ノ項ト記スヘシ・下皆之ニ倣ヘ・）本郡ニ屬ス・或ハ古時某村ノ稱ヲ用フ・年號干支月日改テ本村ノ稱ニ改ム等ノ類・

本村・元同郡某村ト一村タリ・年號干支月日分テ兩村トナル・

或ハ元某々兩村タリシニ・年號干支月日合テ一村トナルノ類・

疆域 東ハ同郡某村ト、用水或ハ何々ヲ以テ界シ、西ハ某國某郡某村ト、隄防ヲ以テ界トシ、南ハ某山某嶺ヲ境トシ、某郡某村ニ隣シ、北ハ某川中央ヲ境トシ、某郡某村ニ對スル等ノ類。

幅員 東西幾里、南北幾町、廣狹大差アレハ、廣處。面積幾方里、面積實測ヲ經、分明ナレハ之ヲ記ス、否ナレハ暫ク欠ク。

管轄沿革 年號干支ヨリ某氏之ヲ領シ、年號干支某氏某所ニ移リ、某氏之ニ代ル等ノ類、德川氏以來、地頭領主ノ遷替ヲ記スヘシ、然レトモ古記明瞭ニシテ、古昔ニ沂リ得ヘキ者ハ、明瞭ニ記スヘシ、但古記ノ書名ヲ細錄スヘシ、下皆之ニ倣ヘ。

里程 某縣廳、縣廳所管ノ縣廳ヨリ何方幾里、縣廳ニ直隸セサル者トイヘトモ、其里程ハ記載スヘシ、某支廳、支廳所管ノ支廳ヨリ何方幾里、縣廳ニ直隸スル者ハ、支廳里程ハ記載セサルヘシ、四隣村、町、宿、町、ヨリノ距離ヲ記スヘシ、元標、標ヘ幾町等ノ類、近傍有名ノ宿町アレハ、亦其宿町ヨリノ距離ヲ記スヘシ、

但里數ハ、元標ヲ明記スヘシ、

地勢 東南某山ヲ負ヒ、西北某水ヲ帶フ、運輸便利、薪炭乏シカラス等ノ類、

地味 其色赤黑、其質美惡、稻粱ニ宜シク、桑茶ニ適シ、或ハ水利ニ便ニ、或ハ時々旱ニ苦シム等ノ類、

稅地 田、幾町、畑、幾町、宅地、幾町、山林、幾町、原野、幾町、總計、幾町等ノ類、

飛地 本村ノ何方、何村ノ內、田、幾町、畑、幾町、ノ類、

字地 某、本村ノ東ヨリ西ヘ連ル、或某橋ノ西、某寺ノ前等、東西幾町、南北幾間、

貢租 地租、米幾石、金幾圓、賦金、金幾圓、總計、米幾石、金幾圓、等ノ類、納稅有之ハ、本文ノ例ニ倣ヒ、記出スヘシ、郡例亦同シ、

戶數 本藉幾戶、華族幾戶、士族幾戶、平民幾戶、寄留、幾戶、上ニ倣ヘ、社幾戶、官幣何社、幾座、國幣何社、幾座、

小社幾座。寺幾戸。某宗幾宇。某宗幾宇。總幾座。總幾宇。總計幾戸等ノ類。

但明治八年一月一日ノ調ヲ記スヘシ。

人數

男幾口。華族幾口。士族幾口。平民幾口。女幾口。上ニ倣ヘ。總計幾口等ノ類。他出寄留幾人。男云々。女云々。外寄留幾人。同上。

但同上

牛馬

牡牛幾頭。牝牛幾頭。總計幾頭。牡馬幾頭。牝馬幾頭。總計幾頭等ノ類。

舟車

蒸氣船幾艘。百噸以上幾艘。百噸未滿幾艘。帆走船幾艘。上ニ倣ヘ。日本形船幾艘。千石以上幾艘。千石未滿五百石以上幾艘。五百石未滿二百石以上幾艘。二百石未滿五拾石以上幾艘。五拾石未滿荷船幾艘。漁船幾艘。遊船幾艘。總計幾艘等ノ類。

牛車幾輛。馬車幾輛。人力車幾輛。荷車幾輛。大八車幾輛。小車幾輛。總計幾輛等ノ類。

山

某山。高幾丈。周回幾里。村ノ何方ニアリ。嶺上ニ三分シ。東ハ某村ニ屬シ。南某村ニ屬シ。東北本村ニ屬ス。山脈東西某山ニ連ル。或ハ孤立ス。或ハ樹木蔚然。或ハ樹木生セス。或ハ登路幾條。一ハ本村ヨリ紆折シ。某谷ヨリ上ル。高幾里幾町。易ニシテ遠シ。一ハ本村ヨリ某村字某處ヲ經テ上ル。高幾十町。險ニシテ近シ。或ハ溪水。幾條深淺廣狹ノ大凡。及某川ニ入ル。或ハ某田ノ用水ニ歸スル等ノ類。凡一村ヨリ四五村ニ連ナルマテノ山ヲ數ス。六七村以上數十村ニ連ナルモノハ。郡ノ條下ニ詳記ス。○高低周囲詳ナラサル時ハ。從來ノ稱スル所ニ從テ。之ヲ記スヘシ。下皆之ニ倣ヘ。且名稱所ニヨリテ異ナル者ノ如キ。某町ニテハ某山ト稱シ。某村ニテハ某岳ト稱スル等。注意記載スヘシ。某岳。上ニ倣ヘ。某丘。上ニ倣ヘ。某峠。上ニ倣ヘ。

川

某川。幾等河ニ屬ス。深淺ハ最深處最淺處及渡橫等ノ必用ノ處ヲ記ス。廣狹同上。緩急長短如何。清濁鹹淡如何。舟筏通否如何。隄防有無如何。村字某所ヨリ出。何方ニ流レ。某河ニ入ル。其間幾町。或ハ某川ノ支流。又ハ某村ヨリ來リ。某村ヲ經テ海ニ入。某街道ニ屬ス。木村ヨリ幾町。深淺幾町。廣狹幾等ノ類。某渡。某街道ニ屬ス。木村ヨリ幾町。深淺幾町。廣狹幾町。橋ノ何方。某川ノ上流ニアリ。渡船幾艘。又ハ

官渡私渡窄渡歩渡等ノ類。**某橋**。某往還ニ屬ス。同上梁シタ村何方某川ノ下流ニアリ。或本村ニアリ。某村ニ通ス。水ノ深淺廣狹橋ノ大小長短及ヒ狹製木製土造石造等ノ類。**某溝**。本村字某ニアリ。起リ某ニ至リ某川ニ入ル。長幾町。幅幾間。田畝水ヲ溜下ス。或ハ某ニアリ。起リ某ニ至リ幾派ニ分チ田ニ入ル。長幾町。幅幾間。田幾町ノ用水ニ供ス等ノ類。

某堀。上ニ倣ヘ。

森林

某林。或ハ官有ニ屬シ。或ハ民有ニ屬ス。東西幾町。南北幾町。反別幾町。村ノ何方幾町ニアリ。某樹多シ。圍凡幾丈。長之ニカナフ。間某樹アリ。或ハ大樹ナシ。又ハ處々疎松ヲ生ス等ノ類。**某森**。上ニ倣ヘ。

原野

某原。或ハ官有ニ屬シ。或ハ民有ニ屬ス。何方何町ニアリ。東ハ何村。西ハ何村。南北坪之樹木ナク。唯芽萠アリ等ノ類。

某野。上ニ倣ヘ。

牧場

某牧。或ハ官有ニ屬シ。或ハ民有ニ屬ス。何ノ方ニアリ。東ハ何村。西ハ何村。南北坪之牝牛幾頭。牡牛幾頭。總計幾頭。牝馬幾頭。牡馬幾頭。總計幾頭等ノ類。

礦山

金山。高幾丈。周囲幾里。本村ノ何方何町ニアリ。何方何村。何方何村上ニ同シ。坑物發見ハ年號干支ニ起リ。既ニ幾年ヲ

經。一ヶ年出高幾貫。其質極テ佳。或ハ佳ナラス等ノ類。**銀山**。上ニ倣ヘ。○其他銅鉛錫石炭硫黄砒石硅石等皆之ニ倣ヘ。

但

出高明治七年ヲ以テ記ス。休山。廢山ハ休廢セシ年月ヲ記ス。

湖沼

某湖。村ノ何方幾町ニアリ。東ハ某村。西ハ某村。廣幾町。深幾尺。周回幾里。**某池沼**。東西幾町。南北幾町。周回幾町。村ノ何方ニアリ。村ノ用水トナス。又某川ト通スル等ノ類。

道路

某街道。幾等道路ニ屬ス。村ノ何方。某村界ニアリ。何方某村界ニ至ル。長幾町。幅幾間。馬路幾間。道敷幾間。某樹ノ並木アリ。或ハ某處ニアリ。東ニ折レ。某處ノ支道アリ等ノ類。**某往還**。上ニ倣ヘ。

揭示場。本村東口。或西口ニアリ。幾町ニアリ。

堤塘

某堤。某川ニ沿ヒ。村ノ何方某村境ニアリ。何方某村境ニ至ル。長幾町。馬路幾間。隄敷幾間。且水門幾所。水量定杭ノ長短。樹堅樹竹ノ有無及ヒ修繕費用ハ官ニ屬シ。民ニ屬ス等ノ類。

港

某港。幾等港ニ屬ス。東西幾里。南北幾町。深干潮幾丈ニアリ。幾丈ニ至ル。何方ニ向フ。暗礁ナク。出洲アリ。村ノ何方ニアリ。

何風ニ宜シカラス。一ケ年出入船數幾何出入貨物幾何修繕費用幾分ハ官ニ屬シ幾分ハ民ニ課ス等ノ類。

出崎

某崎。或ハ長沙。或ハ嶮巖村ノ何方ニ斗出スル幾町斗出ノ處名ケテ某トイフ燈明臺アリ或ハナシ暗礁アリ或ハナシ等ノ類○巨岳ノ名號アル者ハ記ス。

島

某島。東西幾里南北幾町周回幾里。村ノ某濱ニアリ。何方海上直徑幾里ヲ隔ツ家數幾戸人數男幾口女幾口合計幾口樹木アリ。稻粱アリ。島民男ハ漁獵ヲ以テ生ヲ立女ハ紡績ヲ以テ業トス。舟行某樹又ハ某岩ヲ以テ標目トナス等ノ類。

暗礁

某礁。東西幾町南北幾間深干潮幾丈幾尺村ノ何方幾町ニアリ某崎又ハ某港ニアリ幾許ヲ隔ツ。礁標アリ。或ハナシ等ノ類。

燈明臺附燈明船

燈明臺。高サ幾丈光明何色海上幾里ヲ照ス村ノ何方某山又ハ某岬ニアリ等ノ類。

釣

燈明。上ニ燈明船。上ニ

瀧

某瀧。高サ幾丈幅幾間某山ニアリ出ツ。或某所ニアリ來リ。村ノ何方某所ニ落ツ下流某川トナル等ノ類。

温泉

某湯。湯質某氣ヲ以テ混成ス。何病ニ宜シ。浴場幾所逆旅幾戸一旗浴客大凡幾人等ノ類○原素ヲ試驗セシ者ハ詳記ス。

冷泉

某泉。温泉ニ

公園

某園。或ハ官有ニ屬シ。或ハ民有ニ屬ス。東西幾町南北幾町村ノ何方ニアリ。當某藩侯某氏ノ築ツトコロ。某氏東京府貫屬タリ。由テ公園トス。樹木深鬱。山水幽美等ノ類。

陵墓

某天皇陵。封土ノ高低。境内ノ廣狹大凡幾町村ノ何方某山ノ麓ニアリ。陵上古松アリ。又ハ五輪塔アリ等ノ類。

某皇后陵。上ニ

某皇太子陵。上ニ

某皇妃墓。上ニ

某皇子墓。上ニ

某皇女墓。上ニ

某村ニアリ。年號干支月日官軍賊ヲ某城ニ敗リシ時某藩士某之ニ死ス由ヲ此ニ葬ムル等ノ類。

招魂墓。上ニ

某氏墓。村ノ何方某所ニアリ。墓苔石ヲ蝕シ文字詳ナラス。或ハ碑石ナシ。嚮古柏一株アリ。石垣之ヲ繞ル。某氏ハ某帝ノ時何等ノ事蹟アリ。某ヶ兩帝ニ歷仕ス。年號干支月日卒シタル爵某官傳ハ某書ニ詳ナリ等ノ類。事蹟當記等傳ハラサレハ言傳ヘヲ以テ之ヲ記ス。

社

某社。社格幷社地東西幾町南北幾町。福積幾町。本村ノ何方ニアリ某神ヲ祭ル。延喜ノ時名神大社タリシニ其後兵亂

ニ過ヒ。祠廟寺廟ス。明治幾年ニ幣社ニ列セラレ。再ヒ舊觀ニ復ス等ノ類。祭日何月何日社地中老樹等アレハ之ヲ記ス。**招魂社**。某村ニアリ。年號干支某役ニ戰死セシ某ナ數氏ヲ祭ル所ナリ等ノ類。

寺

某寺。東西幾町。南北幾町。面積幾町。某宗。某寺ノ末派ナリ。村ノ何方ニアリ。年號干支僧某開基創建ス。其後衰微セシヲ以テ。年號干支僧某更ニ之ヲ中興ス等ノ類。坊中支院有之者ハ。其數及名ヲ記ス。**某堂**。上ニ做ヘ。**某庵**。上ニ做ヘ。

社寺ノ文書碑銘等。事實年月等ノ考據ニ供スヘキハ節錄シ。或全文ヲ寫スモ可ナリ。

學校

官立中學校幾所。村ノ何方某所ニアリ。生徒男幾人。女幾人等ノ類。**人民共立中學校幾所**。上ニ做ヘ。**官立小學校幾所**。上ニ做ヘ。**人民共立小學校幾所**。上ニ做ヘ。

村會所町。東西幾間。南北幾間。面積幾坪。村ノ何方ニアリノ類。

病院

官立病院幾所。村ノ何方ニアリ。醫員幾人。一ヶ年病客大凡幾人等ノ類。**人民共立病院幾所**。上ニ做ヘ。

電線

線路。某道路ノ右ニ。某地ノ左ヲ過キ。某村ニ達ス。長幾里。**電信局**。村ノ何方某所ニアリ等ノ類。

郵便所

郵便役所。村ノ何方字某所ニアリ。坪數若干。**郵便取扱所**。上ニ做ヘ。**蒸氣船回漕會社**。上ニ做ヘ。

製絲場

某所。村ノ何方某所ニアリ。坪數若干。

大工作場

造船場。村ノ何方某所ニアリ。幾艘以下ノ船舶ヲ造ルヘシ等ノ類。

古跡

某國府址。東西幾町。南北幾町。村ノ何方字某所ニアリ。殘廢尚存ス等ノ類。**某城址**。村ノ何方ニアリ。東西幾町。南北幾町。五角形ヲナシ。或ハ回字形ヲナス。石壁猶存シ。遺溝斷壕ヲ樓ス。今ニ至リ土ヲ盛ツモノ。往々古城具ヲ稱ス。年號干支某氏之ヲ築キ。年號干支某氏之ヲ攻ム。克タスシテ去ル。年號干支之ヲ毀ツ等ノ類。○與廢舊記等。傳ハヲキレハ。古傳ヲ記スヘシ。但書記ノ外。古傳等ハ。明瞭ニ記入スヘシ。**某戰場**。年號干支。民ノ戰フ所ナリ。

其後某ヶ兩氏亦此所ニ職ヲ村ノ何方ニアリ。今桑田トナル等ノ類。古關跡。大抵上ニ倣フ。古宅跡。年號干支某氏之ニ居ル。某氏某寨ニ住ヘ。某役故將某氏ヲ斬ル。其後故アリテ此地ニ隱遁ス。某氏ノ傳ハ何書ニ詳ナリ等ノ類。

某驛寺跡。大抵上ニ倣ヘ。

名勝

某山。村ノ何方ニアリ。風景絶奇。或ハ何ヶヲ以テ稱セラル等ノ類。

物産

動物。質ノ美惡如何。出來高ノ多少。幾何某地ニ輸送ス等ノ類。植物。上ニ倣ヘ。器用。上ニ倣ヘ。

飲食。上ニ倣ヘ。其他製造物。上ニ倣ヘ。

民業

男。農桑ヲ業トスル者幾戸。或ハ薪炭ヲ業トスル者幾戸。或ハ漁獵ヲ業トスル幾戸ノ類。女。織紝ヲ業トスル者幾人。或ハ蚕繭ヲ業トシ。或ハ製茶ヲ業トスル幾人ノ類。

第二號

郡誌

本誌ハ。全郡ノ景狀ヲ知ルヲ欲ス。故ニ本例ニ照準シ。一町村ニ關スル小節目ヲ畧シ。務メテ全郡ノ大勢ヲ摘記スルヲ要ス。

但一郡宛ノ圖ヲ製シ。一町一分曲尺ノ割ヲ以テ仕立。村界ヲ正シ。各村小名及社寺橋梁等。漏サル樣記載スヘシ。且方位ヲ記シ。總テ北ヲ以テ上トナス。最小ノ郡ハ二三郡相合スルモ亦可ナリ。尤製圖凡例。後ニ相附ス。

某國某郡　本郡。古時某郡ト稱シ。年號干支改テ本郡ノ稱ヲ用フ。或ハ舊某郡ノ字ヲ用フ。年號干支改テ某字ヲ用フ等ノ類。

本郡。元同國某郡ト一郡タリ。年號干支分テ兩郡トナル。或ハ元某々兩郡ナリシニ。年號干支合テ一郡トナル等ノ類。

疆域　東ハ某國某郡ニ隣レ。國境表ヲ以テ界トナシ。北ハ某國某郡ニ接ス。某河ヲ以テ堺トナス。西南ハ某郡ニ連ル。某山脈ヲ以テ堺トナス等ノ類。

幅員　東西幾里。南北幾里。面積幾里等ノ類。面積實測ヲ經テ分明ナレハ。之ヲ記ス。否ナレハ暫ク他日ヲ俟ツ。

管轄沿革　足利氏執政ノ時。某國守護某ニ屬シ。其居城アリ。織田氏ノ時。守護某氏ヲ亡シ。其臣某氏ヲ封ス。豐臣氏ノ時。某氏功ヲ以テ某國ニ轉封シ。郡城廢棄シ。地ハ官有タリ。德川氏ニ至リ。某臣某氏ノ采邑トス。德川氏大政ヲ奉還セレノ後。某氏采邑ヲ返上シ。明治二年己巳以來。某縣ニ屬ス。明治四年辛未更ニ某府ニ屬ス等ノ類。

里程　村誌ニ倣フ。

地勢　西南海ニ面ス。海口岬角アリ。奥方ヨリ突出シ。嚢ノ口アルカ如シ。東北某山アリ之ヲ圍ム。其山險隘。然レトモ牛馬往來運輸絶セス等ノ類。

氣候　郡ノ西北ハ山ヲ負フ。氣候夏炎冬寒。寒暖計極暑凡幾十度。極寒凡幾十度。東南ハ海ニ面ス。氣候夏涼冬暖。寒暖計極暑凡幾度。極寒凡幾度等ノ類。

風俗　淳朴古ヲ存ス。又剛愎豪ヲ好ム等。且家產ノ如キ富者七分ニシテ。貧者三分ニ居ノ類。

地味　村誌ニ倣フ。一部肥沃異ナレハ、某方肥沃、某方磽瘠等ノ類ヲ詳細記スヘシ。

郷莊　古時幾郷ニ分ナ、某郷幾村ヲ管シ、村名ヲ書入ヘシ。下皆之ニ倣フ。某郷幾村ヲ管ス。今幾郷ニ分ナ、某郷幾村ヲ管シ、某郷幾村ヲ管ス等ノ類。古時荘園保里等ノ稱アルカ、又ハ數村ヲ合セ某組ト稱スルカ如キハ、之ニ倣フ。

町村數　町幾何、驛幾何、村幾何、枝村幾何、新田幾何、總計幾何等ノ類。

官用地　某縣廳某村ニアリ。某縣支廳某村ニアリ。○總テ村誌ノ例ニ倣フヘシ。其他海陸兵屯巡査邏卒屯所等ノ官用地等、亦同シ。

縣廳等ハ、附例縣治ノ例ニ據リ、記載スヘシ。

税地　田幾町、畑幾町、宅地幾町、山林幾町、原野幾町、總計幾町等ノ類。

貢租　地租米幾石、金幾圓、總計米幾石、金幾圓等ノ類。

但金納、此米幾何明治八年十月一日ヨリ十一月十五日マテ最寄市町平均直段、米壹石金幾何ヲ記ス。

戸數　本籍幾戸、族幾戸、士族幾戸、平民幾戸、寄留幾戸等ノ類。上ニ倣フ。

人數　本籍男幾口、族幾口、士族幾口、平民幾口、女上ニ倣フ。總計幾口等ノ類。他出寄留幾人、男云々、女云々。

寄留男幾口、女幾口、總計幾口等ノ類。

牛馬　牡牛幾頭、牝牛幾頭、總計幾頭、牡馬幾頭、牝馬幾頭、總計幾頭等ノ類。

舟車　蒸氣船幾艘、百噸以上幾艘、百噸未滿幾艘、帆走船幾艘、百噸以上幾艘、百噸未滿幾艘、日本形船幾艘、千石以上幾艘、千石未滿五百石以上幾艘、五百石未滿二百石以上幾艘、二百石未滿五十石以上幾艘、五十石未滿荷船幾艘、漁船幾艘、游船幾艘、總計幾艘、牛車幾輛、馬車幾輛、人力車幾輛、荷車幾輛、大八車幾輛、小車幾輛、總計幾輛等ノ類。

山川　六七村以上ニ關渉スルモノヲ擧ク。數郡ニ及ヘハ、各郡ニ重

出ス。

某山。某村ヨリ起リ某村ニ至リ山脈左折シテ更ニ某村ニ至ル等ノ類第一號村誌ノ側ニ做ヒ其大勢ヲ舉ク。下同。○山嶽以下郡中ニ有名ナル者ヲ拔萃シテ又之ヲ舉クヘシ。某嶽上ニ做フ。某丘上ニ做フ。

某川。幾等河ニ屬ス。某村某山ヨリ發シ某川ト稱シ某村ニ至リ某川ヲ合シ某村ニ至リ某ヶ所川ヲ合シ某川ト稱ス。某郡某町ニ屬ス。村誌ノ側ニ做フ。某橋上ニ某溝上ニ做フ。某堀上ニ做フ。

湖沼林野ノ類。數村ニ跨ル者亦同シ。

道路

某街道。幾等道路ニ屬ス。某郡鬼ヨリ本郡ニ入リ本郡ノ何方某村迄幾里夫ヨリ某ヶ幾村ヲ經テ某村ニ至ル幾里。左折シテ某々幾村ヲ經テ某國某郡某村ニ出テ某港或ハ某府ニ達シ其兩涙ニ分ルヽ者ハ某村ニ於テ分レ一涙ハ某道ト稱ス。又某往還ト稱ス。各其本條ニ辭ニス等ノ類宿驛及間ノ猶等里數一々注明スヘシ。某往還上ニ做フ。

某路或何越。餓道上ニ馬車道上ニ做フ。

港灣

某港。幾等港ニ屬ス。某村ニアリ此港年號干支開ク所當時一ヶ年出入スル所ノ船舶千石以上數十艘ニ過ヤス。今ヤ日ヶ出入スル處百ヲ以テ數フヘシ等ノ類。

燈明臺附燈明船　燈明臺。某村ニアリ等ノ類本村ニ詳カニス。釣燈明上ニ做フ。燈明船上ニ做フ。

島

某島。某郡ニ屬ス。某村又ハ某岬ニヨリ何ノ方海上直徑幾里東西幾里南北幾町周回幾里某々幾村アリ戶數幾戶人口幾人。男幾人女幾人米穀ニ宜シ或ハ專漁獵ヲ營ス岸東某樹アリ高幾丈許船ノ標目トス等ノ類。

社

社幾座。官幣大社幾社國幣中社幾社小社幾社等ノ類。招魂社上ニ做フ。

寺

寺幾宇。某宗幾宇某宗幾寺等ノ類。堂幾宇上ニ做フ。庵幾宇上ニ做フ。

學校

官立中學校。某村ニアリ等ノ類。人民共立中學校上ニ做フ。官立小學校上ニ做フ。人民共立小學校上ニ做フ。總幾所。

病院

官立病院。某村ニアリ等ノ類。人民共立病院上ニ做フ。總幾所。

電線

線路。某郡某村ニヨリ某村ニ至リ某道路ニ沿ヒテ之ヲ架ス某郡某村ニ入ル等ノ類。電信局。某村ニアリ凡幾坪等ノ類。

郵便所　郵便役所、某村ニアリ、凡幾坪共幾所ノ類。郵便取扱所、上ニ倣フ。蒸氣回漕會社、上ニ倣ヘ。

製絲場　某所、某村ニアリ、凡幾坪共幾所ノ類。

大工作場　造船場、某村ニアリ、凡幾坪共幾所ノ類。

物產　動物、某村ニ生スル者ハ佳ナリ、某村ニ生スル者之ニ次ク、某村ニ生スル者之ヲ下トナス、合計一ケ年幾何ヲ出ス、某國ニ運送ス等ノ類。植物、上ニ倣フ。器用、上ニ倣フ。飲食、上ニ倣フ。

民業　各村ニ載スト雖モ、尤民ノ生理ニ益アル者ハ重収ス。男、郡ノ南方幾十村、多クハ山林ニ属ス、故ニ其民采薪燒炭ヲ業トスルモノ幾村、木具製造ヲ業トスルモノ幾村、其生ヲ營スル難シトイフヘシ、然レトモ或ハ富民多シ、西方幾村多クハ平田ニ属ス、故ニ其民農耕ヲ業トシ、或ハ桑茶ヲ業トス、其生ヲ營スル易シトイフヘシ、然レトモ或ハ貧民多シ、東方海ニ面シ、江ニ沿フ、漁網ヲ業トスル者、航海ヲ業トスル者幾村、北方ニ至テハ、其地原野多シ、牛馬ヲ牧シ、東南ハ桑茶ニ宜シ、ヲ生トナス、戶口殷富ナラス等ノ類。女、女皆之ヲ業トス、地開ケ、家富ム、面シテ風俗ハ則侈ナリ、西北土地瘠塞、夏秋ハ麻稗ヲ作リ、冬春ハ苧葛ヲ織ル、地僻シ、家窮ス、面シテ人心敦穆、君長ヲ敬シ、父老ヲ愛ス、風俗喜ミスヘシ等ノ類。

人物　本郡ヨリ出テ、名ヲ天下ニ著ス者、及孝義忠節ノ類ヲ始メ、民ノ爲ニ利ヲ興シ、村里ニ功アル者、便宜ヲ以テ取調、其鄕貫專業ヲ記載スヘシ。

但諸英傑ノ記傳ニ彰著スル者ハ、其傳ヲ載スルニ及ハス、

第二號附例

各郡ノ内左ノ件々有之地ハ、此附例ヲ照準シ取調ヘキ事。

縣治

某縣。全國或ハ某々幾郡ヲ管ス、

縣廳、第幾區某地某町ニアリ、坪數若干經緯度ヲ記ス、東西幾町、南北幾町、市坊ト郊村ノ區域ヲ分チ記スヘシ、

町數、合幾何。

某町、第幾區ニ屬シ縣廳ヨリ何方ニシテ東ヨリ西ニ通ス、或ハ某町ヨリ南ニ折レ某町マテヲ云ノ類縣廳ヨリ次第シテ記載ス。

戸數、合幾何、内士族幾戸等、各村例則ノ如シ、

人數、合幾何、同上。

城地陣屋

舊藩城下等ノ地ハ、後ノ城地ノ條ニ照シ合セ、記載スヘシ、

某、舊藩城下、或ハ陣屋ト稱スル地ハ、何年某藩ヤ、何年藩ニ屬シ、何年藩率還ス等、沿革ノ大凡ヲ記シ、且何山ニ據ル、某川ニ沿フ等、形勢、東西幾町云々、前條ノ如シ、

町數、并各町位置ヲ記ス、戸數人口等、皆上ニ同シ、

宿町

某、何村ニ跨ル、東西幾町、南北幾町、何道往還ニ係ル、東口ヨリ西口マテ幾町、道幅幾間ヨリ幾間ニ至ル、

町數戸數人口ヲ尋ル、上ニ同シ、

右三項ニ屬スル區域等ヲ記載スル、各村例則ニ倣フ、

縣及大邑、舊藩城下等、詳細ノ圖ヲ附ス、編ヲ郷誌中製圖ノ例ノ如シ、但一町三分ノ割ヲ以テ製スヘキ事、

第三號

着手方法

第一條

地方官適宜ヲ以地誌事務ヲ擔任セシムル人員ヲ撰定シ其姓名ヲ地理寮ヘ可申出事

第二條

闔國一般可取調ハ勿論ニ候得共重大ノ事業一舉ニ成功難致且費額ノ程限モ有之ニ付便宜ニ任セ一郡或ハ二郡ヅヽ着手可及事

但精々督勵致シ一郡成稿ノ上ハ地理寮ヘ可差出事

第三條

調査方法ハ例則ニ照シ實地ニ參シ行文ノ雅俗ニ不拘實明晰其

要ヲ得セシムベキ事

第四條

地誌關渉ノ圖書等採集ノ儀ハ遺漏ナク勞求シ書目ヲ以テ可屆出事

但舊記等民間ニ存在スル者往々散佚ニ歸シ終ニ徵古ノ助ヲ欠ニ至ル尤注意搜求スヘキ事

車子氣十　第一九・五圖　第一四圖　一四效（第四號十　第二九圖　第三九圖）

第百拾號

讒謗律別冊之通被定候條此旨布告候事

明治八年六月廿八日　　太政大臣三條實美

讒謗律

第一條

凡ソ事實ノ有無ヲ論セス人ノ榮譽ヲ害スヘキノ行事ヲ擅發公布スル者之ヲ讒毀トス人ノ行事ヲ舉ルニ非スシテ惡名ヲ以テ人ニ加ヘ公布スル者之ヲ誹謗トス著作文書若クハ畫圖肖像ヲ用ヒ展觀シ若クハ發賣シ若クハ貼示シ人ヲ讒毀シ若クハ誹謗スル者ハ下ノ條別ニ從テ罪ヲ科ス

第二條

第一條ノ所爲ヲ以テ乘輿ヲ犯スニ涉ル者ハ禁獄三月以上三年以下罰金五十圓以上千圓以下（二罰ヲ併セ科シ或ハ偏ヘニ一罰ヲ科ス以下之ニ倣ヘ）

第三條

皇族ヲ犯スニ渉ル者ハ禁獄十五日以上二年半以下罰金十五圓以上七百圓以下

第四條

官吏ノ職務ニ關シ誹毀スル者ハ禁獄十日以上二年以下罰金十圓以上五百圓以下誹謗スル者ハ禁獄五日以上一年以下罰金五圓以上三百圓以下

第五條

華士族平民ニ對スルヲ論セス誹毀スル者ハ禁獄七日以上一年半以下罰金五圓以上三百圓以下誹謗スル者ハ罰金三圓以上百圓以下

第六條

法ニ依リ檢官若クハ法官ニ向フ罪犯ヲ告發シ若クハ証スル者ハ第一條ノ例ニアラス其ノ故造誣告シタル者ハ誣告律ニ依ル

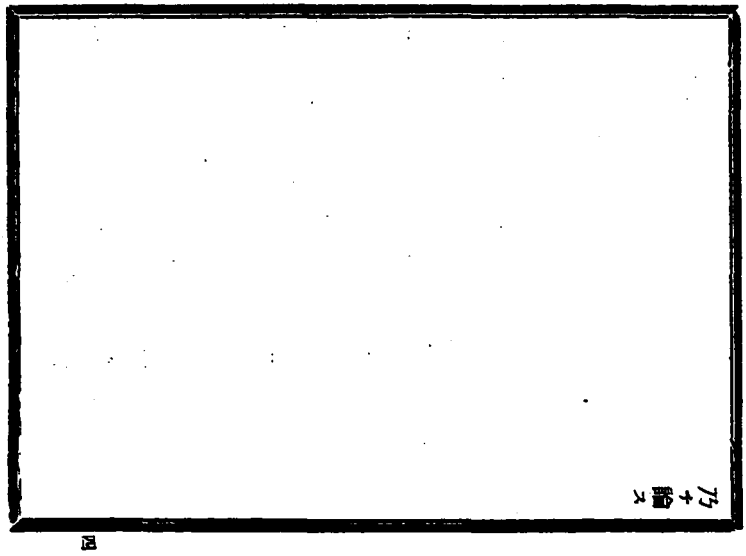
第七條

若シ誹毀ヲ受ルノ事刑法ニ觸ルヽ者檢官ヨリ其事ヲ糾治スルカ若クハ誹毀スル者ヨリ檢官若クハ法官ニ告發シタル時ハ誹毀ノ罪ヲ治ムルヿヲ中止シ以テ事案ノ決ヲ候チ其ノ被告人罪ニ坐スル時ハ誹毀ノ罪ヲ論セス

若シ事刑法ニ觸レスシテ單ヘニ人ノ榮譽ヲ害スル者ハ誹毀スルノ後官ニ告發スト雖モ仍ホ誹毀ノ罪ヲ治ム

第八條

凡ソ誹毀誹謗ノ第四條第五條ニ係ル者ハ被害ノ官民自ラ告ルヲ待テ


申子原子
縦一九・五糎
横一四糎
四枚
乃チ
聞ス
四

第百拾壹號

明治六年十月第三百五拾貳號ヲ以テ布告候新聞紙條目廢廳更ニ別冊ノ通被定候條此旨布告候事

明治八年六月廿八日　　太政大臣三條實美

新聞紙條例

第一條

凡ソ新聞紙及時々ニ刷出スル雜誌雜報ヲ發行セントスル者ハ持主若クハ社主ヨリ其ノ府縣廳ヲ經由レテ願書ヲ內務省ニ捧ケ允准ヲ得ベシ允准ヲ得ズシテ發行スル者ハ法司ニ付シ罪ヲ論シ（凡ソ條例ニ違フ者ハ府縣廳ヨリ地方ノ法司ニ付シ罪ヲ論ス）發行ヲ禁止シ持主若クハ社主及編輯人印刷人各〻罰金百圓ヲ科ス其ノ詐テ官准ノ名ヲ冒ス者ハ各〻罰金百圓以上二百圓以下ヲ科シ更ニ印刷器ヲ沒入スベシ

第二條

願書ニ舉クベキソノ目左ノ如シ

一　紙若クハ書ノ題號

二　刷行ノ定期（毎日毎週毎月或ハ無定期ノ類）

三　持主ノ姓名住所○會社ナレハ兼金人ヲ除クノ外社主一人若クハ數人ノ姓名住所

四　編輯人ノ姓名住所○編輯人數人アル者ハ編輯人長一人ノ姓名住所

五　印刷人ノ姓名住所○編輯人自ヲ印刷人ヲ兼ル者ハ其由ヲ著ス

右ノ五目中詐謬アル者ハ發行ヲ禁止若クハ停止シ（時日ヲ限リ發行ヲ止ムル者ヲ停止トス）仍ホ願人ニ向テ十圓以上百圓以下ノ罰金ヲ科ス

第三條

編輯人若クハ編輯人長退任シ若クハ死去スル時ハ假ニ編輯人若クハ編輯人長ヲ定メ刷行スルヿヲ得但シ遲クモ十五日內ニ（退任死去ノ型日ヨリ起算ス）新定セル編輯人若クハ編輯人長ノ姓名住所ヲ持主若クハ社主ヨリ其府縣廳ニ屆ケ出ヘシ若シ期內ニ屆ケ出サル時ハ發行ヲ停止シ持主若クハ社主罰金百圓ヲ科ス

其他第二條願書ニ載スヘキノ目ニ於テ一ノ變更アル時ハ遲クモ十五日內ニ持主若クハ社主及編輯人若クハ編輯人長ノ連名ヲ以テ屆ケ出ヘシ若シ期內ニ屆ケ出サル時ハ持主若クハ社主及編輯人若クハ編輯人長各〻罰金百圓ヲ科ス

第四條

持主若クハ社主及編輯人若クハ假ノ編輯人タル者ハ內國人ニ限ルヘシ

第五條

持主若クハ社主自ラ編輯人若クハ編輯人長タルヿヲ得

第六條

編輯人二人以上アル者ハ、其一人ヲ撰テ編輯人長トスベシ

每紙每卷ノ尾ニ編輯人、印刷人名ヲ署シ、編輯人數人アル者ハ、編輯人長名ヲ署シ、編輯人若クハ編輯人長、疾病事故アル時ハ、代理人ヲ定メ其名ヲ署スヘシ、若シ名ヲ署セザル時ハ、編輯人若クハ編輯人長若クハ代理人罰金百圓以上五百圓以下ヲ科シ、印刷人罰金百圓ヲ科ス

紙中若クハ卷中載スル所ノ事ニ付テハ、紙尾署名ノ編輯人若クハ編輯人長一切責ニ任スベシ

第七條

紙中若クハ卷中載スル所第十二條以下ノ禁ヲ犯シ若クハ誹謗律ヲ犯シタル時ハ、編輯人首ヲ以テ論シ、筆者ハ從ヲ以テ論ス、持主若クハ社主情ヲ知ル者ハ、編輯署名ノ人ト同ク論ス

第八條

新聞紙及雜誌雜報ノ筆者ハ（投書者ハ筆者ヲ以テ例ス）尋常ノ瑣事ヲ除クノ外凡ソ內外國事、理財、人情、時態、學術、法教、議論及事、官民ノ權利ニ係ル者ハ皆其ノ姓名住所ヲ書スヘシ

筆者變名ヲ用ヒタル時ハ、禁獄三十日罰金十圓ヲ科ス、他人ノ名ヲ假托スル者ハ、禁獄七十日罰金二十圓ヲ科ス（二罰共ニ科シ或ハ偏ヘニ一罰ヲ科ス以下之ニ倣ヘ）

第九條

外國新聞紙及雜誌雜報ヲ飜譯ノ記入スル者ハ、尋常ノ瑣事ヲ除クノ外

譯者名ヲ署シ其事第十二條以下ノ禁ヲ犯シ若クハ讒謗律ヲ犯シタル時ハ譯者其責ニ任スヘキヿ第七條筆者從ヲ以テ論スルノ例ニ依ル

第十條

事犯編輯人ニ止リ禁獄ヲ命シタル時ハ特ニ發行ヲ停止シタル時ヲ除クノ外持主若クハ社主ヨリ假ニ編輯人ヲ定メ、若クハ新タニ編輯人ヲ定メテ仍ホ發行スルヿヲ得其ノ編輯人ヲ定メスシテ發行スル者ハ、發行ヲ停止スヘシ

第十一條

新聞紙若クハ雜誌雜報ニ指名サレタル官署會社若クハ人民ヨリ辨白書若クハ改正ヲ求ムルノ書ヲ寄スルトキハ、其書ヲ受取リシヨリ直チニ其次號ニ刷出スヘシ違フ者ハ編輯人罰金十圓以上百圓以下ヲ科

ス

第十二條

新聞紙若クハ雜誌雜報ニ於テ人ヲ教唆ノ罪ヲ犯サシメタル者ハ犯ス者ト同罪其教唆ニ止マル者ハ禁獄五日以上三年以下罰金十圓以上五百圓以下ヲ科ス

其教唆シテ兇衆ヲ煽起シ或ハ官ニ强逼セシメタル者ハ犯ス者ノ首ト同ク論ス其教唆ニ止マル者ハ罪前ニ同シ

第十三條

政府ヲ變壞シ國家ヲ顚覆スルノ論ヲ載セ騷亂ヲ煽起セントスル者ハ禁獄一年以上三年ニ至ル迄ヲ科ス其實犯ニ至ル者ハ首犯ト同ク論ス

第十四條

成法ヲ誹毀ノ國民法ニ遵フノ義ヲ亂リ及類ハニ刑律ニ觸レタルノ罪犯ヲ曲庇スルノ論ヲ爲ス者ハ禁獄一月以上一年以下罰金五圓以上百圓以下ヲ科ス

第十五條

裁判所ノ斷獄下調ニ係リ未タ公判ニ付セザル者ヲ戯スルコトヲ得ス及裁判官審判ノ職事ヲ戯スルコトヲ得ス犯ス者ハ禁獄一月以上一年以下罰金百圓以上五百圓以下ヲ科ス

第十六條

院省使廳ノ許可ヲ經ズシテ上書建白ヲ戯スルコトヲ得ス犯ス者ハ罰前條ニ同シ

附則

此ノ條例布告ノ前ニ已ニ允准ヲ得テ發行セル新聞紙雜誌雜報ハ新タニ願書ヲ捧クルニ及ハス但シ府縣廳ヲ經由シ丹務省ニ屆クル爲ニ此ノ布告ヲ承ルヨリ第十日迄ニ布告ヲ承ルノ型日ヨリ起算ス府縣廳ニ向テ第二條五目ノ屆書ヲ捧クヘシ第十日ヲ過テ屆書ヲ捧ケザル者ハ府縣廳ヨリ發行ヲ止ムベシ其ノ更ニ願ヒ出ル者ハ第一條ニ依ルヘシ

從前編輯人數人アリテ編輯人長ナキ者ハ條例布告ヲ承ルヨリ第二日迄ニ布告ヲ承ルノ型日ヨリ起算ス編輯人長ヲ定メ若クハ假ニ定ムヘシ第二日ヲ過テ刷行シタル紙若クハ書ニ編輯人長ノ署名ナキトキハ府縣廳ヨリ發行ヲ止ムベシ其ノ更ニ願ヒ出ル者ハ前ニ同シ

冊子原寸　縦一九・五糎　横一四糎　六枚

追加一七五ノ一五

易曰、困于石、拠于蒺藜、入于其宮不見其妻凶、子曰、非所困而困焉名必辱、非所拠而拠焉身必危、既辱且危死期、将至妻其可得見邪、

文書原寸　縦二四・五糎　横三四・八糎

追加一七五ノ一六

参議三等

正参議

副参議

参議補

文書原寸　縦一六・五糎　横一八・七糎

追加一七五ノ一七

一　年五十六七、細川家ニて人望有り　長岡休焉

右ハ細川家にてハ嫡家なれハ、一門の悉頭、而して其人たる公平なるを以長じたり、其形たる未タ半髪にして長刀を帯、義論尤正義、尚其人柄大ニ温潤にして勘考あり、門地にして珍らしき人物なり、暫く先年家老頭職勤められたり、学者にてハ無御座、

一　年五十八九　長岡佐渡

右ハ八代の城主にて細川家の元老、其人物たる頗る正義にて、人柄も柔ニして向先き強し、然処一時細川家の権を専にして、一旦人望を誤れり、乍去元来の人柄大ニ正直ニ候へハ、使方ニ依てハ如何とも使ハれ申へし、素より学問無し、　従二位様御出堂承知仕候ハヽ、定而上京も可仕候、

一　年五十七八　仁田四郎左衛門

右ハ細川家表役久しく相勤め、決而棄られざる人物なり、然れとも従前の因循なる時ニハ、余り勇気強きニ過きたる故、政事向ニは皆々恐れて用ひ申さず、乍去深謀遠略有て事に臨ミ、如何ほどの大難事たりとも決

而拆ケ不申、大ニ義気正しく依頼仕候ハ、、身を棄てゝ人を救ふ事、天下広しといへとも、今日の世上にてハ其類無かるへし、其勇気尖きニ到てハ細川家ニて当るもの無し、元来武人なり、乍併老齢ニ相成、好ひ加減に人物も折合ひ、御用ひニ相成候而可然、素より学文無し、日用ニハ不足無し、

文書原寸　縦一六・五糎　横八六糎

追加一七五ノ一八

新聞社投書

今ヤ王法厳ニシテ且寛教化功ヲ奏シ、人智敏開シテ用ルニ鉄車・汽船・電信・針織ノ器、皆一ヲ以テ百千人ノ用ヲ為ス、雖然ト尚洋人究理シテ石炭ノ失費ヲ厭ヒ、気ヲ以テ行ルノ策ヲ思考スト、是以テ予惟ヘラク、果シテ無ト為ヘカラス、就中英都龍動水ヲ汲ニ筋骨ヲ費労セス、是噴水ヲ以テ壁間ニ伝フル者也、我カ東京噴水ノ法ヲ用ヒント欲ト雖モ、玉川ノ水原遠クシテ事大業ノ急速之成ヘカラス、容易之ヲ得ヘカラス、故ニ茲ニ石炭ヲ用ヒス、人力ヲ借ラス機車ヲ以テ水ヲ汲ミ、活動清泉ヲ得ルノ法方ヲ探窺シ得タリ、都下ノ諸君モシ我言ヲ試ミ用ヒ給ハ、、数万人ノ肢力ヲ補助シ、且火防ノ備ヘ有シメン、夫レ水タルヤ汲テ貯フヘカラス、泊シテ滞ス可ラス、凡人不動ナルトキハ疾病ヲ生シ、水不動ナルトキハ塵埃ヲ浮シ、且炭素凝結シテ人用ルニ宜カラス、共ニ動物ナルヲ以テ也、不知ヤ、山間僻地ノ人自ラ長生スルコト、空気ノ渺茫タルヲ呑吸スルニ因ルト雖モ、一ツハ飛泉ニ飲シ急流ニ浴スルカ故也、此法行ハル、トキハ府下衆人ノ天寿モ補益スト謂ヘキ乎、

筑摩県管下信州安曇郡新田町村　藤森善一

文書原寸　縦二一・五糎　横二〇・五糎

追加一七五ノ一九

乍恐以書附奉窺候、

今般以機車ヲ上水運用之法、別紙之通新聞社へ投書仕相弘成業仕度奉存候、就而ハ電線標柱且道路之差支等決而仕間敷候間、何卒御聞済被下置候様奉願上度、右御許可之程奉窺候、以上、

筑摩県管下
信濃国安曇郡新田町村　藤森善逸

明治七年十一月

文書原寸　縦二一・五糎　横二七・五糎

追加一七五ノ二〇

長野県　渡辺司法大丞○
高知県　河野権大判事
肥前　杉本中検事
大隈従弟
奈良　比島中判事○
福岡　早川少丞○
肥後　早川権中判事

右ノ人数ニテ此度佐々木大輔ヲ免シ、更ニ河野権大判事ヲ以テ大輔ニ任スルノ束（蘇カ）、已ニ大木卿ヘ申出ル、大木不取合故ニ大久保参議ヘ河野ヲ以テ謀ルヘキ事ヲ議ス、又鶴田明法頭ヘ謀ル、鶴田異論ス、鶴田ヨリ丹羽少丞ヘ談ス、丹羽ヨリ西野ヘ談ス云々、

文書原寸　縦一八・八糎　横三六・二糎

追加一七五ノ二一

御手札之代り
奉
献
御熨代り
朝鮮産
酒茶飯三宜
黙媒　壱箱
野詩壱章

糸魚川渡
頓首拝

島津久光侯
足下
左右(侍)史

文書原寸　縦一六糎　横二七・五糎

追加一七五ノ二二

今朝御廻シ申上候伺書類之内、蕃地事務局ノ海軍省ヘ御指令案一件ハ差急候儀ニ付、若御調印被下候はゝ御戻し被下度、此段申入候也、

八月八日　内使

左大臣殿

文書原寸　縦二六・三糎　横三九糎

追加一七五ノ二三

八月八日午後二時三十分京都府御雇ベイヨリ出、同日午後五時着、

ブンブヨウ　ヲンヤトイ　ベイコクジン　ドクトル
ウイタル　コウガクリヨウ　ヲンヤトヒ。マアシヤル
ノ。リヨウニン　チウチニキタリ　ゴヨナイ　ハイケ
ンノコトヲ　モフシイデタリ　サシユルシ　シヤルベ
クヤ　シキウゴシキヲコフ

別紙京都府御雇ベイヨリ電報写一通進呈仕候也、

明治七年八月八日　史官

島津左大臣殿

冊子原寸　縦二六・八糎　横四〇糎　二枚

追加一七五ノ二四

「(包紙ウワ書)願書入　市中
町人中
〆」

願書之事

一八九小区町用掛之者一同権威振り、店之者共難渋仕罷

在候ニ付、何卒更替被仰付被下置候様、偏ニ御聞奉願
上候也、
明治七六月十二日　　市中
町人中
当御邸様
文書原寸　縦二四・五糎　横　三四糎　　包紙原寸　縦一六・二糎　横二三・八糎
追加一七五ノ二五
（包紙ウワ書）
「年中吉凶考　　村山
大上様　　」

文書原寸　縦三三・七糎　包紙原寸　縦一六・二糎
横四七・四糎　横一六・三糎

追加一七五ノ二六

（封筒）「島津左大臣殿
親展」

（封筒ウラ）「〇」　大史本局

（「野口」）「〇」

（封紙ウワ書）「左大臣殿
御手展」　大史本局
野口常然

〆」

別紙川邨（村）海軍大輔伺壱括、太政大臣殿ヨリ御下命ニ付差進申候、御入手被下度候也、

九月廿日

文書原寸　縦一七・八糎　封筒原寸　縦二四糎
横三八・三糎　横一〇糎

追加一七六ノ一

（包紙ウワ書）「上　封　安田轍蔵」

包紙原寸　縦四〇・五糎　横二七糎

追加一七六ノ二

東　西
西ヶ浜　春嵐
竹ノ森　川嵐
小錦　雷
宇治川　寅風
若柳　鶴ヶ崎
響野　八幡山
鳴神　御神滝
荒熊　島之森
常盤山　松ヶ崎

追加一七七　不要書類。断片。封筒等一括（二）　二十通

源氏山　逆鉾
藤田川　陣ヶ平
文書原寸　縦一九糎　横四一糎

東　西
雷　松ヶ崎
剣岩　小錦
常盤山　春風
島之森　鶴ヶ崎
逆鉾　若柳
楢木川　源氏山
陣ヶ平　鳴神
御神滝　荒熊
藤田川　八幡山

以上、

文書原寸　縦一九・二糎　横三五・五糎

東　西
駒之戸　瀬戸嵐
勝男嶽　寅風
小錦　宇治川
楢木川　八雲形
春風　勝男山
八剣　越之海
陣ヶ平　宇治川
文書原寸　縦一九・五糎　横二五・五糎

西　東
駒之戸　岩舟
春風　岩千代
文書原寸　縦一九糎　横七・七糎

春嵐　竹之森
文書原寸　縦一九糎　横三糎

宇治川跡

竹山下　勝男嶽上

文書原寸　縦一四・七糎　横五・五糎

楢木川　剣岩

文書原寸　縦一八・七糎　横二・三糎

東　西

岩舟　楢木川

瀬戸嵐　寅風

小錦　八雲形

勝男山　越之海

勝男嶽　陣ヶ平

岩千代　八剣

文書原寸　縦一九糎　横二二・八糎

明不代年

追加一七六ノ四

納涼　百拝

風やとり杜の木蔭にやすらへは

秋にをとろくこゝちこそすれ

文書原寸　縦一六・五糎　横二三・五糎

追加一七六ノ五

肅啓

昨日出版開港在駐英人新聞紙中摘課御参考之為、奉呈台覧候也、

七年四月廿五日　貞秀

松方閣下

文書原寸　縦一八糎　横一八・二糎

追加一七六ノ六

新年之御慶愛度申納候、昨年中ハ毎々参館失敬申上候段、多罪奉万謝候、随而少臣此程社用ニ而上京仕候、早速相伺可申処、取紛失敬罷在候段、平ニ御海容奉希候、誠ニ

恐入儀ニ候得共、別紙建言書白面書生之狂言、御披覧も恐縮候得共、杞憂至情之余り相認申候間、御筆削被成下、御序之節左府殿下へ御執達之程偏ニ奉願上候、本月中ハ滞京罷在候間、御尋之儀有之候ハ、御呼立被下度、恐懼奉悃願候、

頓首、

一月廿日

愛宕三丁目壱番地
篠原実章方止宿
荒地春樹（朱「はるき」）○

内田明公
閣下

文書原寸　縦二四・八糎　横三三・八糎

追加一七六ノ七

当県士族伊良子軍十郎外数名徒党ヲ結ヒ、兵器ヲ集メ、不容易企有之趣探知候ニ付、直ニ捕縛ニ及候処、軍旗・腹巻・袖印等ヲ備ヘ、多分ノ刀剣ヲ集メ有之、暴挙ノ主意ハ去ル明治九年暴発セシ神風党ノ趣旨ト不異、当時神風党ノ信向セラレシ高神社ヲ信向シ、神力ヲ恃ミ不日暴発、熊本鎮台ヲ襲撃スル企ナル旨及供述、党類モ至テ寡少、広ク関係無之見込有之候、此段御心得迄及御通知候也、

十二年一月十六日

熊本県
第四課

鹿児島県警察課
御中

文書原寸　縦一六・六糎　横四二糎

追加一七六ノ八

（包紙ウワ書、朱）
「癸亥　長崎江夷人乱妨一件」

包紙原寸　縦二五・五糎　横三八糎

追加一七六ノ九

銅銭一統ヨリ天保銭ニ付願書

私共儀、三邦丸江便船仕罷下候処高官被仰付、藤安・野上等之蔵ニ被押込、世間通行も不相成様罷成、存外之仕合、別而迷惑仕、金札様ヨリ左三味線ニ而通行仕候様被

仰上被下度奉願候、以上、

文書原寸　縦二六・八糎　横二〇・三糎

追加一七六ノ一〇

（包紙ウワ書）
「『甲子十一月』
〆　」

包紙原寸　縦二九・五糎　横四一・五糎

追加一七六ノ一一

（包紙ウワ書）
「大坂
伊地知壮之丞様　大久保一蔵
要用　呈置
九月廿四日午後
〆
『丙寅』　」

包紙原寸　縦二九糎　横四〇糎

追加一七六ノ一二

（包紙ウワ書）
「島津大蔵殿

喜入摂津殿
小松帯刀殿
川上但馬殿
川上式部殿
岩下佐次右衛門

封

『鹿児島英人戦争一条
癸亥七月十三日江戸』　」

包紙原寸　縦二八糎　横三九・八糎

追加一七六ノ一三

先般米油空相場会社三井等へ特許相成居候処、不公平ニ付、今般是ヲ廃シ、又株式取引会社ヲ設ケ、是ト空相場会社ト合併ストノ云々、甚不条理、心外ノ事、

但
空相場会社ハ、人民相対ニテ相設ケ候義ハ、不苦トノ御沙汰可然云々、

（抹消印アリ）
〇長崎石炭山ヲ後藤初ヘ御払下之義、不分明ニテハ無御座哉ノ事、

文書原寸　縦一六・三糎　横五二糎

追加一七六ノ一四

（封筒）「大久保参議殿　実美」

（封筒ウラ）「呈　」

封筒原寸　縦一八・五糎　横四・五糎

追加一七六ノ一五

（包紙ウワ書）「上

左大臣島津公閣下

第二大区七小区飯倉片町四番地寓居

新宮簡」

包紙原寸　縦三六糎　横四九糎

追加一七六ノ一六

（朱、以下同ジ）

「〇一対馬　府中

「〇一日州　延岡

「〇一同　佐土原

「〇一同（紙）飯肥

「〇一豊後　日田

「〇一同　臼杵

「〇一同　木付

「〇一同　日出

「〇一豊前　小倉

「〇一同　中津

「〇一肥後　求摩

「〇一同　宇土

一同　熊本

「〇一肥前　平戸

「〇一同　竹田

「〇一同　唐津

「〇一筑後　久留米

一出雲　松江

「〇一加賀　大聖寺

一伊予　宇和島
一丹波　福知山
一因幡　鳥取
一紀州　和歌山
一出羽　本庄

横帳原寸　縦一四・一糎　横四〇・二糎　一枚

追加一七六ノ一七

歴代御陵

薩摩国　壱ケ所
大隅国　二ケ所
大和国　二十九ケ所
河内国　十一ケ所
和泉国　三ケ所
淡路国　壱ケ所
讃岐国　壱ケ所
長門国　壱ケ所
丹波国　壱ケ所
山城国　三十五ケ所

都合八十五ケ所

文書原寸　縦二七・六糎　横三八・七糎

追加一七六ノ一八

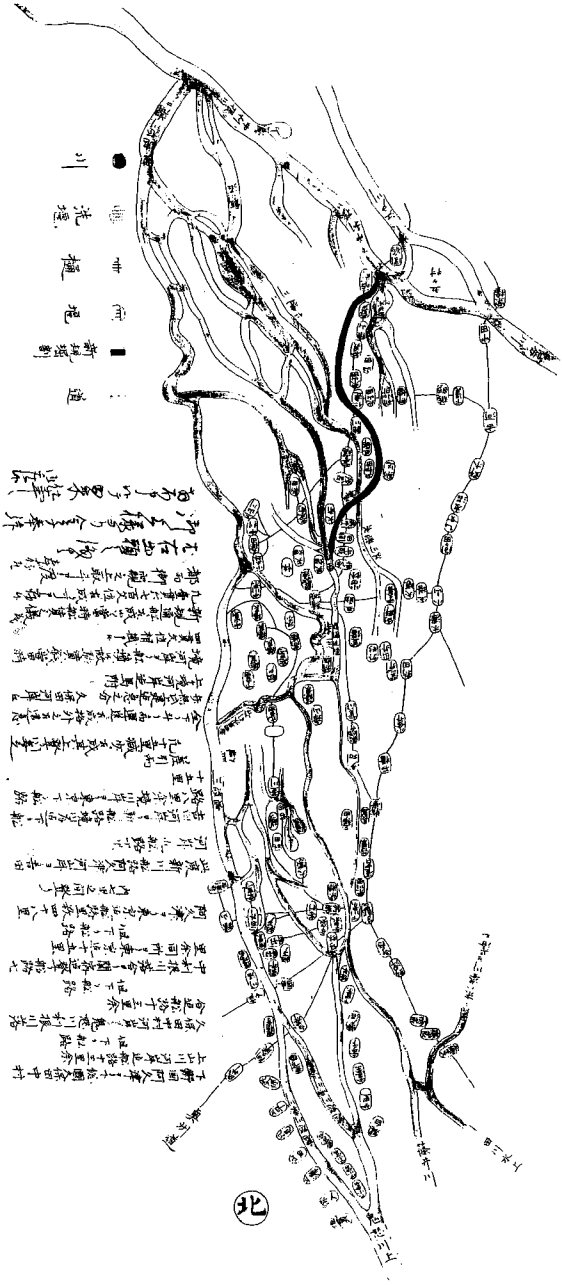
上総国市原郡
第五大区三小区
山木村住
石川静湖

右代議人江諮問七ケ条之義ニ付、建白之趣ハ猶為参考書取置候事、

千葉県令柴原和

文書原寸　縦二五・二糎　横三四・八糎

追加一七六ノ一九



文書原寸　縦三九糎　横八一糎

遺一七　烈公及藤田東湖手翰　合装巻物

人名目次

贈正一位源烈公、諱斉昭、字子信、号景山、別号潛龍閣、万延元年八月十五日薨、享年六十一、

贈正四位藤田彪、字斌卿、称虎之介、後更誠之進、号東湖、安政二年十月二日歿、享年五十、

文書原寸　縦一八・三糎　横二八・八糎

（異筆）「源烈公書」

先日伊達之臣松根内蔵とか申者の母妻等ニて織候木綿指出候故、各歌認可遣と存、其節歌ハ直ニよミ居候所、右松根の実名を何と申候哉、前書ニ認候ニ指支候故、今日迄其まゝに致し置候所、若し実名存居候ハ、一寸可申聞候、又不分ハ無已故某抔と認可申候ヘハ否可申聞候、先方抔へ問合候ニハ不及、全ク書状抔ニ認有之ニて存居候哉否を聞候事故、只今認候所故、一寸否を可申聞候、

伊賀へ

文書原寸　縦一八・三糎　横二五糎

（異筆）「藤田東湖書」

神兵家譜之御論一々敬承仕候、右之内愚生も心付候分ハ兄弟の妾同氏、并ニ長州を加へ度との御論ハ元より御同意に御座候、

一きりしたんの事如何にも気ニ懸り申候処、やはりあのまゝが可然哉、此処実ニ疑惑仕候、神印正直の人ゆへめつたニ直し候事も不相成、一体彼家両度の焼失にて旧記類やけ候よし、然ル処神印さすが正直人ゆへ、十年も前ニ家譜迄取立候は感心に御座候へ共、実ハ取立候程ならハ、今少し火えんを加へ申度御座候、此度登前ニ是非直し度との志ハ感心に御座候得共、先々二三十日東湖預リ可申御座候、先日の模様と違ひ、此節の模様にてハ却而家譜抔ハ先々急ニ調不申方ニ御座候、今日ハ余程酔中草々申上候、以上、

閏月二日夜

文書原寸　縦　一五糎　横六七・八糎

巻子原寸　縦一九・三糎　横　一六〇糎